

私たちの戦争体験

私たちの戦争体験



玉城町遺族会 編

玉城町遺族会 編

序

戦後六十三年が経過し、戦中戦後の苦難な時代を経験された方もその数を減らしつつある今日、あの忌まわしい戦争体験さえも平和のかけに風化されようとしており、過去の歴史をさぐる道はますます遠のいております。

そこでこの戦争体験を風化させることなく新世代に語り継ぐために、玉城町遺族会の皆様が「私たちの戦争体験」を発刊いただく運びとなりましたことに対し、心から敬意を表する次第であります。

顧みまして、今の日本は戦争とは全く無縁のように繁栄を続けておりますが、忘れてはならないのは今も先の大戦で体や心に傷を負った方がたくさんおられ、戦争を知らない新しい世代と戦争を体験された方々が同居しているという現実です。

皆様方の貴重な体験文を読ませていただきますと、どの方も筆舌に尽くせないご苦勞をされて生き抜かれました。

私たちは戦争体験者の方々の苦しみに思いを寄せ、この体験記が世界平和と人類福祉の向上に、役立つよう関係各位のご苦勞に対し、改めて敬意と感謝を表します。

平成二十年十一月六日

玉城町長 辻村修一

目次

外城田地区

シベリヤ抑留	浦田 璋八	12
東南海地震の記憶	太田 準一	14
野兎と美少年	喜多 功	16
戦地の思い出	小林 晴男	18
(一) 喜びが悲しみに		
(二) 野牛舞台始末記		
戦争時代の体験	中野 健一	21
兄の思い出	中村 惣造	23
父なき子	西野 武	25
今も残る疵跡	南 源之助	27
戦中戦後	中村 梅夫	29
戦時中の回想	中村 幸生	32
兄の思い出	福井 一夫	34
欲しがりません、勝つまでは!!	釜谷 義一	36
配給について	前川 和洋	38
戦争に想う	出口 房男	40
激戦の中に見たもの	青山 四郎	42
教育で凄いものだ	下井 文生	45
戦争時の出来ごと	中森 信郎	47
終戦記念日に思う	老谷 うめ	49
終戦間近の記憶	大北 幸松	51
(一) 祖母の着物にすがって		
(二) ゼロ戦が学校で作られた		
終戦の日の思い出	大谷 幸平	54
竹槍と国防婦人会	大西 田鶴	56
農作業中に弾丸が	木村 辻枝	58
艦載機の恐怖	竹郷 定夫	60
中学校時代の履歴書	中西 寛四郎	62

山田の空襲	中村と志	64
一兵として見たもの	石橋清	66

(一) 恐怖の一瞬

(二) 引き揚げの苦難

田丸地区

三縁寺の被爆	愛洲雅子	72
過渡期を生きる	青木利夫	74
昭和暗黒時代の想い出	木下耕作	76
戦時中の記憶	下村幸生	79
軍需工場への爆撃	下村精一郎	82
大戦下の小学生たち	出口環	84
私の終戦日	中西康夫	86
戦後小さい頃の記憶	森川途子	88
母の悲願	浦田善治	90
戦争の想い出	奥山武次郎	92

小学校の思い出	小林幹子	95
頑固な親の涙	下村久	97
食糧不足の苦難	須田実	99
こんな苦しみはイヤ	西野ふさ子	101
我が青春の一頁	西山耘平	102
空襲のこわさ	森下鶴子	104
少年の頃の想い出	森田欣一	106
学徒勤労働員のこと	山口和男	109
忘れられない想い出	吉田はつゑ	112
空襲の惨劇	池田形左衛門	114
北満の広野に生きて	大喜多逸子	116
こわい戦争	高木市郎	118
(一) びんた		
(二) 空から油タンクが落下		
兄は還らなかつた	高木米子	121
平和な日本と戦時中	中西弘和	125

兄の出征	山	久	127
私の戦争体験	松	春	130

有田地区

玉音放送を聴いて	乾	寛	134
昭和二十年八月十五日	奥	山	136
悲しい思い出	向	井	138
必死で生きた戦中戦後	大	西	140
入隊から除隊まで	大	西	144
怖かった戦争体験	大	西	146
学徒動員と夜の空襲	北	岡	148
戦争の記憶	北	岡	150
戦争体験	増	田	152
私の戦争体験	荻	田	154
戦争の記憶	荻	田	156
呉の思い出	幾	田	159

子供のころ	中	西	161
フィリピンを訪問して	見	並	163
回顧	見	並	167
戦争の思い出	川	井	169
終戦前後のこと	小	林	171
予科練の思い出	山	口	175

下外城田地区

兵隊さんの思い出	中	井	182
戦時中のこと	中	井	184
青春の思い出	松	田	185
兵隊の体験	松	尾	187
大切な人たちに	松	尾	189
父の戦死	松	田	191
戦争の頃の思い出	松	田	193
平和な村	松	田	195

弟の戦死	村田まさ	198
世の中安穏なれ	村主一水	200
敵機の銃撃	中川源吉	202
戦争の体験	見並信一	204
七歳の思い出	八木勝美	206
悲しい思い出	山口綾子	208
焼きついた記憶	山本勇	210
(一) 父の遺骨		
(二) 空襲の記憶		
父の眠るビルマへ	角谷泰	214
従軍追想	中西勸六	217
私の戦争体験	内山裕敏	219
戦争は悲劇	松田一良	222
捕虜となって	松田寛	224
戦中、戦後をかえりみて	松山勇	226
東京空襲のこと	井上亨	228

思い出	奥藤義治	231
過去を忘れまい	西山勇	234
耳の奥に残る空襲警報	野口繁	236
語り伝えたいこと	橘浩文	240
遠ざかる記憶	中村勝臣	243
宇治山田大空襲の記憶	西川勝洋	245
幼少時代の戦争体験	西山達也	247
夫の戦死	西山すへ	249
父のこと	池山義則	251

編集後記

.....
253

お断り 一部の写真は文章と関係ありませんが、イメージとして使用させて頂きました。

外城田地区

シベリヤ抑留

浦田 璋 八 八十三歳・原

私は、旧満州国 竜江省の現地に於て、日本軍（関東軍）に召集され、竜江省の陸軍部隊に入隊しました。

昭和二十年七月になると、ソ連軍が戦車部隊を先頭にソ満国境を越えて進軍して来ました。私たちは、一兵卒として第一線で応戦しましたが、敗戦が濃厚となり、関東軍首脳は家族共々南満州に逃げ去りました。北満州に残った日本人は多くの人がソ連軍に拉致され、昭和二十年九月頃より陸軍兵士は多数シベリヤに抑留されました。

その頃のソ連国ロシヤは、全く物資が不足しており、関東軍が満州国内に膨大な資材を残して敗れたため此の物資をシベリヤ鉄道で何十両となく運び出されました。

私たちは此の資材の積み込みをするため、荷役作業に駆り出されました。

作業は昼夜別無く続けられ、零下十度以下の夜間作業にはソ連軍兵士が拳銃や機関銃を手「ダワイダワイ」と追い立てられ、苛酷な使役でした。昭和二十一年春から日本人会で内地に向けて引き揚げが始まりました。

北部満州奥地の開拓団の婦女子は、何百里の曠野を徒歩で苦心惨憺、命からがら南に向いました。昭和二十一年十月頃より内地への引き揚げが開始され、中国北部の口島港に何万人もの日本人が集結して、内地よりの引き揚げ船を待ちました。私は日本海軍の海防艦に乗船しましたが、小さな舟で荒れ狂う玄界灘を海を越えて九州博多港に入港できました。

昭和二十一年十一月に博多に上陸し、博多の土を踏みしめて、ようやく母国に辿り着き、安堵しました。それはそれは長い長い苦しみでした。

東南海地震の記憶

太田 準 一 八十二歳・原

昭和十二年に日華事変が勃発してからは、徐々に戦時色が高まり、昭和十六年十二月八日に太平洋戦争が開戦、同二十年八月十五日に終戦を迎えた戦時下の生活は、正に苦難の連続でした。

その頃、現在の外城田小学校は東外城田村国民学校の名称で、私は当時十八歳で、助教として同校に勤めておりました。

その時期の強烈な記憶の一つは、昭和十九年十二月七日に発生した東南海地震でした。その日の午後一時四十分頃、殆どの児童は下校していましたが、男子児童一人の補習授業を済ませて教室を出ようとしていた時、これまでに一度も経験したことが無い揺れが襲って来ました。

「あつ地震や！」

と咄嗟に叫び、教室から校庭までは割合近い場所でしたので、二人で走って避難しました。校庭に出ると揺れが益々大きくなり、立っているのもやつのことで、目に入る範囲の地面全体が校舎と共に轟々と音を立てて揺れ、その内に校舎の屋根瓦が次々と落下して来ました。一分八秒の揺れだったとの事でしたが、本当にこの世にこんな恐ろしい事が起きるのかと驚くばかりでした。

幸い、この地域では人的被害は少なかった様子でしたが、その後長く余震が続き、その頃から米B二十九による本土空襲も激しさを増し、名古屋方面へ爆撃に向かう大編隊が上空を通過して、上からと下からとの恐怖で夜もゆっくり眠れない日が続きました。

震度七、九の激震だった事や被害の状況は殆ど報道されず、熊野灘沿岸の町村が津波で大被害を受けた事などを知ったのは、かなり月日が経過してからでした。

天災は予知が出来にくい分、日頃からの心構えと対策が必要だと痛感します。

忘れることが出来ない六十四年前の記憶です。

野兎と美少年

喜多 功 七十二歳・原

美少年？ の僕は昭和十八年東外城田小学校の一年生であった。或る冬の日、校長先生をはじめ先生みんなと、児童全員が野兎狩りをした。東外城田神社の西の山林に高さ一メートル、長さ五十メートルぐらいの網を仕掛け、野兎を捕獲するのだ。もちろん人間が食べるためである。動物性蛋白質を摂取する必要からだ。小学生は、手に手に棒などを持って大声を上げて野兎を網へ追い込む作戦だ。残念ながら野兎は一匹も網に掛からなかった。北風が網を通り抜けるばかりだった。先生も児童も山の地に座りこみ、がっくりした。校長先生の落胆の顔を見て密かにほくそ笑んだ。

白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り 齋藤 史

歌人の史が二・二六事件で肉親が殺害された悲しみを間接的に詠んだ短歌だ。

学校の運動場の大半が耕されて甘藷畑になった。杭を打ち縄を張り各字に割り当てられた。畝を作り、甘藷の苗を各自家から持って来て植え付けた。イモ校長として有名な島田校長の指導で、斜め挿し、水平挿し、二列じぐざぐ挿し、など工夫して植え付けた。日除けのため麦稈を苗の上に覆った。除草作業は三年生以上の上級生が担当して秋には大きな甘藷がごろごろ収穫できた。ふかし甘藷にしてみんな一個ずつ頂き、食べておいしかったことは忘れないう。沢山の護国甘藷はどうなったんだろうか。

空襲警報のサイレンが鳴ると、勉強をほっぽり出して教室から神社の山林へ逃げ込んだ。親指で両耳を塞ぎ、人差し指、中指、薬指、小指で二つの目を覆う。そして地に伏せる。爆風で耳の鼓膜が破れないためと目玉が外に飛び出さない予防だ。

子供ごころにこわかったこと、恐ろしかったことは今でも忘れることはできない。

「俺の後ろへ続け」

といたのでジャングルの中へ行った。

「戦争は終わった。日本は負けた」

何という事だ。だが、皆やれやれといった本音の顔をしていた。野牛部隊は、社会人と軍属が陸軍に召集され、それを海軍が教育するという変形の部隊。階級章は錨の下に星一つで陸海軍二等兵か。その後、司令官が来られ、

「天皇陛下が終戦の御聖断を下された。本職はこれに従う。武装解除をなし、日本へ帰った。復興に力をつくしてほしい。これに異議のあるものは申し出よ」

と報告がなされたが、言葉は誰にもなかった。

二、三日後、教官の運転するサイドカーに乗せられ司令部へ。主計長に申告をして勤務先の第二十五海軍軍用郵便所へ戻った。来訪する人が私の階級章を見てげんなりした顔。その都度説明する。二、三日して召集解除の知らせがあった。やれやれ。

インドネシア、セレベス島マカッサルでの出来事。私はその時二十歳だった。

戦争時代の体験

中野健一 八十三歳・原

昭和六年勃発した中国（支那）との戦争も、北支中支南支と拡大、十六年には第二次世界大戦へと戦火が拡大していきました。十五、六歳の少年が予科練として航空兵に志願し、若い命を南の空に散らし、戦場もタイ、スマトラ、ジャワと南下するに従い、兵器、食糧、衣料は戦地優先となりました。私は三重師範学校の寮に居ましたが、食事は「いもめし」（米六割、いも四割）から次に雑水に（水五割、野菜三割、米二割）と悪化していきました。「ほしがりません勝つまでは」の標語のもと、空腹に耐え、柔道の部活動を頑張りました。でも、次第に戦況は悪化し、学生はペンを棄てて学徒動員として工場へやられ、飛行機など兵器作りのため、私も名古屋陸軍工廠へ動員されました。機関砲作りに昼夜二交替で勤めましたが、空襲警報が発令されると防空壕へ避難しつつ作業の厳しい日々でした。

戦況は増々悪化し、サイパン島の玉砕等でついに、学徒出陣が始まり、第二陣として二十年五月松戸陸軍工兵学校へ特別幹部候補生として入校し、厳しい訓練を受けました。特に架橋爆破、地下壕掘り、敵前渡河（鉄舟）等の諸訓練は厳しく、とりわけ、煙幕の中鉄舟を六人で河に入れ敵前上陸の訓練や火薬を背負っての爆破訓練は苦しく、訓練中に戦友を亡くしました。第一期の基礎訓練が終わり、七月に千葉県柏市の部隊に配属されました。兵隊は四十、五十代の召集兵で、しかも新兵。酷暑の事とて訓練では、バタバタと倒れる有り様にビツクリしました。今にして思えば気の毒でした。

八月十五日、十二時、天皇の玉音放送で終戦の詔勅を聞き唯々呆然としました。涙の中、命令で急ぎ工兵学校に帰校し、残務整理を終えると八月末に懐かしい故郷に復員しました。

戦後の町は焼土と化し、家を失った人も多く、食糧、衣料も乏しく僅かな配給を頼りに耐乏生活が続きました。やっと人間らしく生活出来るように成った時は、少年青年時代がすぎていました。世界では今も戦争が絶えません。一日も早く国連主導で戦争をなくしてほしいと願う者です。

兄の思い出

中村 惣造 八十三歳・原

兄は、旧東外城田村東原から現役兵として、お国のためと万歳の声におくられ、今の田丸駅から見送ったのが最後でした。昭和十四年十二月に入隊しましたが、早くも翌年の二月十日、支那大陸で頭部に銃弾を受け、二度と故郷を見る事もなく、戦死を遂げました。享年二十二歳でした。この当時は、太平洋戦争に比べて戦死者が少なく、村あげての葬儀でした。白布でまいた遺骨を、お友達の前胸に抱かれて我が家から小学校まで、約二キロの松並木の沿道、銃を肩にかけた青年団を先頭に、在郷軍人、国防婦人会、区民の方が参列して下さいました。講堂には、村長さんを始め、役場や各団体、一般村民の方が迎えて頂きました。会場正面、両側には銃剣をつけた青年団が立ち、ラッパの音とともに式典が始まり、村内僧侶のお経がながれて、村葬として盛大に行われ、大勢の方がご参拝して下さいました。幼年で

あった私には、あの当時の、元気な兄の顔が、いつまでも目にうつり、胸がいたみます。でも、手厚い葬儀をして頂いた兄も幸せでした。どうかやすらかに、お眠りください。太平洋戦争が始まると戦火が激しくなり、多くの犠牲者が出て、大勢の尊い命が失われました。六十年過ぎた今日、二度と、このような悲惨な戦争を起こしてはなりません。

父なき子

西野 武 七十一歳・原

軍服姿の父の膝に抱かれた幼い頃の写真が一枚残っているが、記憶をたどってみても父の膝の温もりはもとより顔すら思い出せない。私は、昭和十八年に国民学校へ入学したが、その頃父は二度目の応召で戦地に赴いていたので、父のいない淋しさだけが印象に強く残っている。

戦況が悪化するにつれて次第に食糧や物資が不足するようになり、国民の生活は苦しくなっていた。何事をするにも「お国のため」が合言葉で、食糧増産が叫ばれると、農家には米の供出が強いられた。一家の大黒柱を兵役に取られた家にとっては、人手不足が大きな苦しみであった。それでも、戦争が終われば父は必ず帰ってくることを信じ、祖父母も母も歯を食いしばって働いていた。吾々子供達も稲を運んだり荷車を押ししたり風呂焚きなど、手に

合う手伝いをするのが日課であった。昭和二十年八月、やっと戦争が終わり、混沌とした世情の中にも、戦地から帰還される人達の姿が増え村にも明るさが甦ってきた。しかし、我が家では陰膳を供え、一日千秋の思いで父の帰りを待つ日々が続いた。終戦二年目の秋、遂に父の戦死の公報が来てしまった。家族の落胆は電灯の消えた暗闇に似ていた。

その時四年生であった自分にも、家族のために何かしなければという責任感が芽生えていた。祖父の仕込みで牛で田を鋤くことや鍬の使い方など、叱られながら必死に覚えた。農繁期になると、学校から帰ってくると勉強よりも農作業の手伝いが先であった。田植えの時期には、田の沖から帰る頃には日も暮れてしまう。牛を追って夜道を帰る道すがら、飛び交う螢の灯を悔し涙をこらえて眺めた日の事は今も脳裏に焼きついている。その頃は、欲しい物があっても言い出すことさえ出来ずに我慢した。父さえいてくれたらとどれだけ思ったことか。父なき子として悔しい日々の少年時代であった。

戦争で父を亡くした私と同じ境遇の子供達が、それぞれどんなに辛い思いで生き抜いてきたことか。戦後の苦労は計り知れないものがある。このような惨い結果を残す戦争は、決して二度と繰り返してはならない。この世に戦争ほど愚かなものはないと思う。

今も残る疵跡

南 源之助 七十歳・原

昭和二十年八月、原にも爆弾が投下された。それまで何度も空襲があり、警報が鳴るたびに防空壕に入っていた。その日は家の側の川でアヒルを飼っていたので、アヒルに餌をやっている、防空壕まで行けなくて、川の土手に伏せていた。大きな爆発音がしてそのあと、超低空で東から西の空に去って行くアメリカの戦闘機を見上げて、足が地に着かず、がたがたと震えていた。

その時、外城田川で水泳をしていた友達も何人かいて、みんな水田の中に伏せていた。その時、大変恐ろしかったと言っていた。

その後、田の中に落ちた爆弾の大きな穴を見に行った。近くの家では爆発の時の破片が外壁や戸箱などに飛んで来て大変な騒ぎであった。今もその疵跡が納屋の戸箱にあるそうだ。

また、わが家は大家族でみんなで十一人。食事が一番大変で、食べる為にわとりやうさぎをたくさん飼っていた。それにアヒルも、家の横を流れる子守後川で飼っていた。

戦後は二十年七月津市の大空襲で、家も焼かれ両親も亡くした従兄が二人疎開して来て、家族は二人増えて十三人になった。

子供達は学校から帰ると、農作業の手伝いをし、その後にはわとりやうさぎやアヒルの世話や餌やりをした。

貧しくとも、その中に大家族と同年代の従兄とのたのしい生活の思い出も数多くあった。

戦中戦後

中村 梅夫 八十歳・蚊野

昭和十一年、支那事変が異国で起きたと耳にしたのが、小学校の高学年ぐらいと記憶している。長兄の喜久男に召集令状が届き出征した。年が離れていたのか、他の兄弟もいたせいか、印象も薄かった気がする。

当時、男性は二十歳になると徴兵があり、久居駐屯地に入隊して身体検査合格者は兵役についた。

男手がない家は女の人が、残された老人や子供を守る為に苦勞をした。自分は家が農業であり、贅沢は出来なかったが自給自足で空腹だけは免れていた。小学生の自分には、戦争の本当の恐怖や悲惨さは実感できなかった。

大東亜戦争が勃発、再び戦場に多くの人が送られ、蚊野地区でも犠牲者が出た。自分の兄

も二度目の召集で、マリアナ・サイパン島の洋上で最期を遂げた。後に遺骨の代わりに遺髪と爪が届けられ、戦死という現実を受け止めた。我が子を失うという母親の心中は、さぞかし無念であり辛かっただろうと思った。

いよいよ本土にも、戦争の影響が押し迫ってきた。武器用の鉄が不足となり、鍋・釜等のあらゆる鉄製品の供出となった。

尋常高等小学校を卒業して、上の学校へは進学せず男子は青年団として軍事訓練を受け、女子は軍需工場で勤労奉仕を行った。戦争に勝つ為に誰もが文句を言わず、「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に皆が我慢を強いられた。

空襲で伊勢市が爆撃され、東の空に真っ赤な火炎があがった。木造家屋は焼夷弾によって、またたく間に燃え広がって焼け野原となったそうである。怖い目にあったのは、目の前にB二十九という飛行機から爆弾を落とされた時、防空壕の中にいて命びろいはしたものの、あの時の体験は言葉にできない位の恐怖だった。書庫にあった書類が飛び散り紙吹雪のようだった。ただ震えるばかりだった。

いよいよ日本の敗戦を聞いた時、安堵感はなく終わった気持ちにはならなかった。明野の飛行場に居たが、その時、戦闘機が滑走路に並べられ燃やされた。

広島・長崎に原爆が落とされたことなど、ずいぶん後から知った。戦争が終わっても物資(米)は配給制となり、その後も政府から供出要請があり手元に残らず、相変わらず厳しい食糧事情があった。幸いにも住居が無事だったのが何よりであった。平和へ徐々に近づいていた。十分な栄養が取れず、せっかく命ながらえて祖国に帰っても、栄養失調で亡くなった人もあり、病気になっても治療が受けられず命を落とす人もいた。



鈴鹿海軍工廠ポスター（三重の戦争遺跡より）

戦時中の回想

中村 幸生 七十八歳・蚊野

昭和二十年三月五日頃のこと。分家の人の依頼で東京の家に疎かいするための荷物を取りに行くことになった。三月九日の夜行で行く事になり伊勢号にのり、十日の朝八時頃に東京へ着く。駅の外に出ておどろいたのは、東京は毎日のように空襲をうけているのに駅前にもひびがない事であった。宮城についたら警戒警報になり、急ぎよ靖国神社へ行く事にする。それは靖国神社には防空壕があるからである。空襲警報になるとB二十九が上空を五十機くらいがとんで行く。どしんどしんと音がして次々ととんで来ては去って行く。昼頃までつづいた。見上げたとき、B二十九へ零戦が体あたりをするのが見えた。

夕方に分家につき、それより荷物をつくり十一日の伊勢号で東京を出る。

焼けあとに立つと見わたすかぎりの焼土である。東京は広いと感じたのはそのためであった。焼けていない所はどこなのかと思つた事である。家に帰るととなりの人たちがよく無事でもどつたなあと言ってくれた。何故かときいたら新聞で東京大空襲とかいてあった。空襲をうけて十万人ほど死んだそうである。



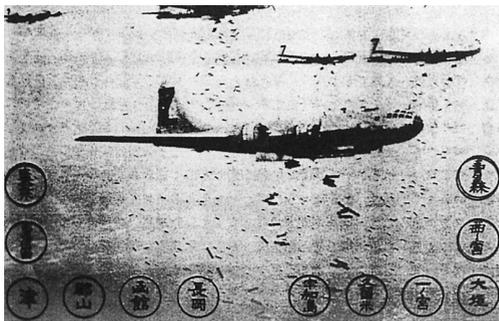
東京大空襲（毎日新聞社）

兄の思い出

福井 一夫 六十六歳・蚊野

私は昭和十七年一月生まれなので、戦争当時の状況は知りませんが、空爆の飛行機が飛来したとき、防空壕へ姉さんらと逃げこんだのをかすかに覚えております。何でこんな所に逃げ込むのかなあと子供心に思いました。後になって知ったことですが、B二十九というアメリカ軍の爆撃機が津市から伊勢方面へ空爆に飛来して来たのです。市街地は多数焼失し多くの人命が奪われたと聞いております。今でも全国のあちこちで、不発弾が発掘されております。戦争によって多くの命を奪い人々を不幸のどん底に落としてしまいました。

私より二十歳年上の兄は昭和十七年十二月に応召されました。兄にとってはたった一人の弟なので少しのあいだでしたが我が子のように大事にしてくれたようです。その兄も昭和二十年五月中国湖南省にて戦死。無事帰還された戦友の方は兄は水が飲みたいと何度も言っているのを引き取ったんですと言っておられました。大勢の人を苦しめ、尊い命を奪い合うような戦争は絶対にあってはなりません。母国の為に戦ってくれた兵士の皆さんの犠牲があつてこそ、今の平和な生活が存在するのです。これからは、永遠に戦争のない世の中であつてほしいものです。



B29 (三重の戦争遺跡より)

欲しがりません、勝つまでは!!

釜谷義一 七十八歳・蚊野

これは臨戦態勢が広がった昭和十八年頃、巷に見られた標語の一つだ。此の頃から物の配給制度が布かれ昭和十七年頃には米の配給制に加え塩の統制・衣料切符（一人年間百点）制度の公布、又昭和十九年には砂糖の家庭用配給が停止となり人々の暮らしは日を追って窮屈になっていった。尚これらの食管法により農家も一日当たり二合五勺の割で保有米として残り、それ以外の米は強制出荷となり生産者も満足に食する事が出来ず、ひもじい思いをした。

その背景には「取れる所からは取る」という江戸時代さながらの役人根性が見え隠れしており、腹立たしい思い出がある。それというのも外城田地区は、戦前より度会郡有数の米どころとして販売俵数が多い実績があり、それに基づく供出数量が割り出された為、他の地区に比べ厳しい供出となつたらしい。誠に不合理極まるもので、我が家でも天候障害等で出来

が悪く割当量が不足した年は、上地町の知人に甘藷の白干しを何俵か都合して頂き、何とか不足俵数を満たし供出した年もある。

米さえ此の有様だから地元でつくれない物の入手は惨憺たるもので、昭和十七年に始まった衣料切符の点数が、同十九年には三十歳以上四十点、それ以外は五十点に削られ纏まった買い物は出来ず、両隣の家々で融通し合い急場を凌いだ。例えば、シャツ十二点、手拭き三点を工面しても店に品物がなく手に入らずやむを得ず、古着を更生服に仕立てなおしたり、ツギを当てて着たものだ。

以上が物不足のなかで、特に不自由した事の最たるものだが数えあげれば枚挙にいとまがない。

人々の生活をどん底に追いやった、戦中戦後を潜り抜けて来た私達にとって、家族そして古里の美しい幾山河が残っていることが、せめてもの現在に生きる者の幸だろう。あのような標語等に踊らされる世の再来はもうご免だ。

配給について

前川 和洋 七十三歳・蚊野

終戦の時「昭和二十年八月二十日」に私の家族は私と母、長女、次男、次女の五人家族で老人のいない分家でした。又、私の部落は百戸位で父が戦死の家は私の家だけでした。日時などは覚えていませんが終戦後食糧や衣類の配給がありました。回覧等でお知らせがあると、お寺で魚やタマリ、砂糖、衣類等の配給があり、私は十歳三年生でしたが配給品をもらいに行きました。並んで順番を待っていると、名前の知らない人が後から来て、並んでいる先頭に行き、自分のすきな物を取って行きました。私は後回しになり、残り物を貰って来た事がありました。私はその都度大人のする事に子供心に腹が立ちました。母子家庭で食べる物も不足していましたが、米、野菜類も家で作ったもの全部に供出の割り当てがあり、全部出荷しないとアメリカの進駐軍が来て調べて全部持って行くと伊勢新聞などで見て、私は小学三

年生でしたので本気に取りました。それでも米、麦等を母と二人で家のイモ穴に隠す手伝いもしました。又配給で貰った毛糸の靴下等を母は解いて私達の手袋やセーターに編んでくれました。また、兵隊の服もばらいて学校に行く手提げ袋を作ってもらい学校や遠足などに使った思い出があります。

そして、終戦後、今の農協の貯金も封鎖という制度が出来たそうで、貯金通帳に封鎖と記したシールを貼られ、お金も使えなくなりました。私達家族の衣類は町から女の方が行商にこれ、米、麦、野菜等と物々交換して着せてもらいました。肉類の配給はないので、家の軒先にニワトリやウサギ等を飼い、学校へ行く前に世話をして卵を取り食材にしたり、ニワトリを殺して肉として食べたりしました。今考えると小学三年生でニワトリの首を絞めて殺した事を思い出すと恐ろしくなってきます。また、ウサギは近くの老人の方にさばいてもらい、肉は食べ皮は干して着物にしたこともありました。

戦争に想う

出口房男 七十五歳・野篠

昭和二十年当時、私は小学校六年生でした。新聞は我が軍の勝利の報道ばかりです。村では母親達が敵が攻めてきたら防ぐんだと、防空頭巾で竹槍の訓練の日々でした。

そんな私が初めて「戦争中」であることを実感したのは、ある日の授業中のことです。突然、空襲警報発令のサイレンが鳴り響きました。

「退避しろ」

との校長先生の叫び声のなか、ブーンブーンと銀色の機体が飛行機雲を引きつつ、東の方へ飛んで行きました。その後、敵の爆撃機が上空を通過するようになり、ある日の真つ昼間には、B二十九の大編隊が悠々と飛んで行ったのを見ました。豊川辺りの軍需工場が爆撃されたと後で聞きました。

また、艦載機も襲来するようになりました。田丸近辺には、護京師団の駐屯地が点在していたためです。ある日のこと、その艦載機が田丸にて急降下し、機銃掃射をして私の住む野篠で急上昇していきました。その時は、家の裏の竹藪が折れるかと思うほどの風圧で、おまけに機関砲の不発弾を私の家の屋根に落として行きました。

数日も置かずして、天皇陛下の終戦のラジオ放送を聞き、日本は戦争に負けたんだなあと知りました。その日はアメリカ兵が的山を越えて来て、私達を皆殺しにするのではないかと恐怖をおぼえました。終戦になり物資が不足し、農家でさえ雑穀や芋を多く食べなければならず、服は親の古着で作りました。非農家の方もっと大変だったと思いました。秋の薩摩芋の収穫後、畑に残されていた小芋を拾いにみえた方もありました。

ごく一部の指導者がおこした戦争で、親を失い、家族をバラバラにされ、表現のできない悲惨な日々を過ごされた方々を二度と出さない為にも、この愚かさを忘れず、正確に後世に伝えていかなければなりません。

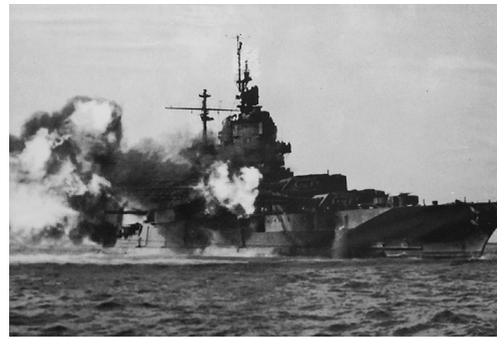
激戦の中に見たもの

青山 四郎 八十三歳・矢野

私は昭和十六年四月三十日、良く晴れた日に村の村長さんや字の区長さんを先頭に、集落の大勢の皆さんが手に手に日の丸の小旗を持ち約四キロメートルの道を歩いて田丸駅まで送って頂き、駅頭で簡単なお礼の挨拶をして万歳の声に送られ汽車に乗った。兄は心配のあまり呉の海兵団まで付き添ってくれた。私にはなによりも心強かった。当時は日中戦争のさなかで、兵役のあった若者は召集され中国大陸に勇ましく出征していった。軍の進行と共に戦線は拡大され戦勝の報に国内は湧き軍国主義的風潮も日増しに高まり忠君愛国の教育も徹底しこの戦争に参加することがこの上もない名誉なことと讃えられた時代であった。私は昭和十六年五月一日志願兵として呉の海兵団へ入団した。

その時私は十六歳だった。あの若さでよくも志願したものだとしみじみ思い出した。男子の本懐これに尽きるものはないという気概で入団したが、軍隊は想像していたよりはるかに厳しく辛い生活だった。三ヶ月半の新兵教育も終了し戦艦伊勢に乗艦。その後三ヶ月程して身体の具合が悪くなって呉の海軍病院に入院したが、一ヶ月程で退院、呉の海兵団勤務となり昭和十八年航空母艦隼鷹に乗艦。昭和十九年の「ア号作戦」に参加した。六月二十日午後敵艦隊発見の知らせで雷爆機や艦爆機、戦闘機など全機が発進して行った。送る兵隊も送られる搭乗員も悲壮な思いであった。夕方五時頃、艦尾方向から敵艦載機約六十機来襲との知らせで長い「ブザー信号」が艦内に響いた。艦は回避行動をしているのか右や左に大きく揺れスクリューの振動も激しくなった。豆を煎るような機関銃の音や高射砲の発砲するものすごい音が聞こえた。その音に混じって又「ゴォーン」という振動音が前方でしたと思うと艦内の電灯も消えた。後方で物をたたきつけるような音がして身体が揺れ、艦尾左舷に至近弾を食ったとの事だった。一瞬にして修羅場となった。早日も暮れかかって友と飛行甲板にあって見ると甲板には無数の弾痕や穴があいて肉片が飛び散っており、消火用ホースが無数に横たわっていた。艦橋を見ると破片で腹を撃ち抜かれた兵隊が手摺りにぶらさがっていて内蔵がとび出していた。大煙突は無惨に破壊され中途から煙が噴き出し、めくれあがった鉄板に兵隊が黒焦げになってひっかかっているなど、目を覆うばかりの惨状であった。航空機

は離着艦不能になったが必死の消火作業と復旧作業で航行出来たことになによりも幸運であった。戦死者五十余名を出したと聞き無念であった。戦争は憎い。今更思い出したくもないと誰もが考えているに違いない。しかし青春時代を志願兵として太平洋戦争に終始した四年半の余りにも苛酷な生活や死線を体験した事実を子や孫そして若い人達に伝えておきたいと思う次第である。そして今日の平和な日々の有り難さを知って貰いたい。



猛烈な艦砲射撃を行う米戦艦
(伊勢の空襲展より)

教育で凄いものだ

下井文生 七十六歳・矢野

日本は神の国であり、一億が一心に成って戦えば、戦争は勝利するのだと、教えられた。対国の豊かさ、物力共に、優れているのも何も知らず、日本は無知な戦争をしたものだ、誰も思う事は、皆同じである。昭和十九年の頃を振り返ってみると、小学校のグラウンドに、食料不足のため、サツマイモを作ったことを思い出す。其の時の校長先生は、芋博士ともいわれた島田先生であった。現在の外城田保育所の所は山であった。其の所へ自分の入る防空壕を掘った。実際に入った事は、一度も無かった。今考えれば阿呆な事を、していたのだと思う。

十九年十二月七日昼、南海大地震があり、其れからというもの、空襲と地震とが一緒に来た。十歳以下の弟を祖母が背負い、家内中防空壕に入る、トタン地震が来る。子供心にほ

んとうに怖かった。其れからは、各地に次々とB二十九に依る爆撃が有り、津市が爆撃された。月の明かりにB二十九が帰って行くのが、よく見えた。其の後すぐに、東の空が真っ赤に成った。山田が焼夷弾で爆撃を受けたのだ。隣の老父がジゴロ車へ、衣ダンスを載せて、山の方向へ行くのを目にした。学生の僕には何処へ何をしに行くのかと、思った。こんな時節の中、軍部上官の方が、本土決戦やら何やらと言つて、母達（国防婦人会）を寺の庭へ集めて、ヤーヤーと竹槍の訓練。飛行機から落下して来る米兵を殺すのだと、一生懸命でした。こんな事で勝てる筈はないのに、幼稚で馬鹿な事をしていた。

去る三月十日にテレビで東京大空襲の映画を見たが、悲惨なものであった。戦後六十余年を経たいま、戦争の悲惨さを決して忘れてはいけない。次世代に命の大切さを教えて行かなければならないと思う。戦争の戦の字も嫌だ。戦争で犠牲になられた方々に、報いる為にも決して忘れてはいけない。平和な社会を何時までも、守り続けて行く事が、我々に課せられた使命であり、義務でもある。

戦争時の出来ごと

中 森 信 郎 七十三歳・矢野

小生は終戦の昭和二十年八月小学五年生でした。当時の通学登下校時には、母親が作ってくれた綿入りの防空帽の持参が義務付けられており、いざという時の備えで肩に掛けて通つたものでした。今の世でいえば、交通事故或いは災害事故対策のヘルメットの着用に似ています。

警戒警報や空襲警報、この場合のサイレンの響きはさすがに緊急を告げる聞こえがしたものです。特に夜の場合、荷車へ積み合わせた布団、衣類、そして当座の必需品を家から遠ざける事により、爆撃による火災から免れるための手段だと聞かされたものでした。

〈防空壕〉各家に一つの防空壕が掘られており、待避するための地下穴。空襲警報が鳴り響

〈竹槍〉

くと一目散に逃げ込んだものでした。
男達は戦地に向いて留守、留守を守る主婦達が集って、青竹で造った竹槍の使
い方の訓練をしていました。上空からパラシュートで降下してくる敵部隊を地上
着地前に竹槍で撃退するための訓練でした。留守を守る主婦の皆さんが、家を
守り、家族を守り、そして地域を守るため、当時はまさに真剣だったと俚ばれま
す。



終戦記念日に思う

老 谷 う め 八十一歳・山神

昭和二十年七月だったと思います。私はその頃、今の伊勢農協外城田支所に勤務中の事でした。空襲警報が発令された為、農協の重要書類を抱えて防空壕へ逃げ込みました。書類を胸に耳を塞ぎ地に伏せていたその時、B二十九の爆音が近くなり何か落として行った音がしたのです。だが爆弾ではなかったのです。ああよかった助かったとほっとしたのを覚えています。その後、警報が解除され壕から出て見ると、小学校の東の道に白い紙片が沢山落ちていたのです。恐る恐る拾って見るとその紙にはこのような事が書いてありました。『日本国は速やかに降伏せよ』というものでした。それを駐在所へ届けても何の音沙汰も無いのです。其の後一ヶ月も経たぬ間に広島・長崎に原爆が投下されたのです。今思えば、もっと早く降伏していれば、日本は世界唯一の被爆国にはならなかったのです。

そして広島二十万以上、長崎十三万人以上の人達が爆死され、六十年以上経った今尚、原爆症で苦しい日々を送っている方々を思うと胸が痛みます。

今思うとあの紙切れは原爆投下する予言だったのだと思うのです。

八月十五日の終戦記念日が訪れる度にあの頃の事を思い浮かべ、悔やまれてなりません。

終戦間近の記憶

大北 幸松 六十九歳・山神

(一) 祖母の着物にすがって

あれは昭和二十年の夏の夜の出来事だった。我が家には東京の叔父が送ってくれた古いラジオがあった。毎日のように空襲警報がつかえられていた。

この日(伊勢市空襲展資料より八月二十八日)も夜遅くになり空襲警報が発令された。我が家は母と祖父が病死し、十九年暮れに父、翌年の七月に叔父が相次いで戦死、家には祖母と七歳の自分と一歳年下の弟の三人家族だった。

そんな中、唯一祖母が頼りだった。その夜祖母の危機感を帯びた声に起こされ防空頭巾をかぶり、手を引っ張られ防空壕にもぐった。

祖母の背中には、風呂敷に包んだ白木の位牌がくくられていた。耳を澄ますとゴーという爆音が聞こえた。祖母は山田が空襲や、と言いこも危ないから隣の家へ行こうといって男の人のいる前の家へ連れられていった。

その家も家族みんなが壕から出て東の空を見ていた。その光景は丁度夏の花火を逆さまにしたように上空からキラキラと明かりが幾つも連続して落ち、そのたびに地面が明るくなる。丁度目の前に小高い丘があり炎は見えないが空が真っ赤になったのを今もはっきりと覚えている。

その日は夏の満月の日、しかも雲ひとつない晴天、B二十九の編隊がお月様の上を通るのが見えた。祖母は、ここへもし焼夷弾が落ちたら、里山へ逃げるんやで、と言い聞かせていたのも覚えていいる。

後の資料によれば百機以上のB二十九が焼夷弾を伊勢の町へ投下したとある。

あの光景は多くの人が見たと思うが、老若男女の命や、家や財産を無差別に焼き払う攻撃は、戦争とはいえ、二度と繰り返してはいけない。

戦後六十二年が過ぎ戦争を知らない人達が多くなった今日、あの時の恐怖と現実を振り返り絶対戦争はやらない、やらせない日本をこれからも続けてほしい。

(二) ゼロ戦が学校で作られた

あれは昭和二十年六月だったと思う。私は、小学校へ四月に入学したばかりで、毎日のように空襲警報が発令され、その都度近くの竹藪に掘られた防空壕へ逃げ込んだものだ。その頃は戦争が激しくなり、学校の授業も手につかない有様だった。そして、学校の講堂では、当時日本の主力戦闘機であったゼロ戦の模型が木で作られていた。それを見て不思議に思ったものだ。

本物そっくりに作られた木造の飛行機も、銀色に塗られ日の丸が描かれると目を見張るものだった。私は低学年であったので近くに寄ることすら出来なかったが、完成した飛行機の模型は、やがて高学年の人達が手伝って、明野飛行場へ運ばれたと聞いた。

戦争が末期になり、日本の飛行機の数が増減したため、急ぎよ木造の模型を急造し、飛行場に並べて敵の目をあざむく作戦であったようだ。何の利益にもならない見せかけの行為であり、今にして思えば、戦争とは空しく悲しいものであることを痛感する。

終戦の日の思い出

大谷 幸平 七十八歳・山神

今日も又暑い日でした。いつものように工場の従業員用の食糧（米・麦）を持って農家へ行き、唐臼で搗いていると、今日の昼ラジオで重大放送があるから必ず聞くようにとの事でした。とぎれとぎれしか聞き取れませんでした

「耐えがたきを耐え偲びがたきを偲び：ポツダム宣言を受諾する」

と聞いたときに、これで戦争は終わった負けたと知らされました。

思えば自分達は国家の方針で工場へ動員され、北勢地方で寄宿舎生活をし働いていました。その間には二度の大地震や空襲等色々な事ばかりでした。中でも夜間の空襲は後半になると激しくなり、工場の近くの山へ避難して見上げていると、頭の上をB二十九の編隊が通って行きます。直ちに探照灯で照らし出して高射砲で撃つのですが、飛行機のずっと下の方でパ

ツパと火花がするだけで届きません。これが毎回の事でこれでは先が思いやられ何とか出来ないものかと強く思い知らされました。そうこうしている間に、だんだんと工場の近くが爆撃されるようになり自分達は地元の工場へ帰されました。

地元の工場は薄暗く、危険な場所では朝鮮の人達が働かされていました。

日課の様になっていた搗きあがった食糧を載せたりヤカーを引っ張っての帰り道、これらどうなるのだろうかと思う一方やれやれこれで終わったのかとホットして肩の力が抜けたような気になりました。

会社へ帰るとこれからの事は又連絡するとの話で帰されました。いつもの様に近くの駅まで来ると朝鮮の人達が居り、

「お前ら日本は負けたんだぞ知つとるのか」

と言って殴られました。殴られはしましたが手かげんをしているようでなんだか空しく、今にして思えば戦とは何のため、誰のためのものだったのか考えさせられました。

竹槍と国防婦人会

大西田鶴 八十八歳・山神

戦争も末期の昭和二十年初夏、地区には男の人は老人と子供、そして婦人たちで若い男の人は少しもいなかった。出征兵の妻や母が地区を守っていた。

そんな中、もし敵が上陸してきたら婦人たちが先頭に立って戦うように上部機関から強く言い渡され、婦人たちもそのときに備え全員が一丸となっていた。

農作業もままならない毎日の中、学校の校庭や地区の広場に婦人たちは集められ毎日のように竹槍訓練が行われていた。

家庭にある鉄という鉄は、そのほとんどが供出で没収され、青竹を槍のように尖らせ、隊列を組んで唯一残っている男の人の先導で、エイ、ヤーと掛け声で訓練をしていた。

結果的に一度も使うことはなかったがあんな物で敵を倒せると思っていたのか、今考える

ととても理解が出来ない。

我が家は、たった一人の兄が出征してから父母と姉妹で農作業をしていた。終戦間近になると、毎日のように空襲警報が鳴り、その都度田んぼから駆け上がり近くの藪や山に逃げ込む日が多くなり、背中に草履を背負っての作業が日常だった。

十九年に准尉に昇進した兄は七月にマニラに向かったとの報を最後に連絡は途絶えた。届いたのは二十年五月十三日戦死の知らせだった。

そんな息子の出征に、父は多額のお金を払って軍刀を作り戦地へ送ったのだが、戦後帰国された部下の人から父母の願いや励ましの手紙を含め、すべてが軍に没収され届いていなかったと聞き父母は愕然としていた。

でも、戦地で戦っていた息子の勇姿を聞き兄が帰ってきたようだと涙を流し喜び三日も家にとどめた。

大切な息子を亡くした父母の泣き崩れる姿は、今も私の目にありありと残っている。国民に悲しみと、苦痛だけを残す戦争は二度としてほしくない。

農作業中に弾丸が

木村 辻 枝 七十九歳・山神

私はまだ結婚前でした。昭和二十年ラジオは本土への空襲を毎日のように伝えていました。この地域にも、多くの若者や男の人たちが召集で出征し、働く人が少なくなっていました。そんな中、兵隊に行つて働き手がなくなった家に学生が勤労奉仕に来ていました。今の中学一・二年生で、幼い手に鍬や鎌を持ってせつせと草取りや収穫を手伝っていたのを覚えています。

私の家はお茶をたくさん作っていて、多くの勤労学生が来てくれていましたが、みんな一生懸命でした。

私も一家の働き手で、いつ空襲があるか神経を尖らせながらの農作業でした。

こんな中、先輩のおばさんから聞いた話です。

暑い中、必死で水田の草取りの最中、突然目の前に水しぶきが上がったのです。空を見ると艦載機が低空で迫っていて、あわてて近くの藪に逃げ込んだそうです。その後、震えがとまらなかつたそうです。

こんな状況下の中、都会から多くの人が田舎へ避難する疎開が始まり、我が家にも、東京の伯父たちが家族で来ていました。

私は女で、余り戦争のことは知らされていませんでしたが、兄や伯父たちが必死で戦いに出征する人達を見送る姿を見て悲しく思いました。

戦後、結婚した嫁ぎ先も夫の兄が戦死しています。義父母も地元の人達の先頭に立つて地域を守ってきました。当時は立身出世も願っていたがやっぱり戦争には行かせたくなかつた、無事を願っていたのに残念だと嘆き悲しんで泣いていました。

食べ物も満足になかつた当時を生き抜き、今も健康でいられるのも多くの英霊のお陰と思いい、どうか戦争のない世の中を願っています。

(聞き手・大北)

艦載機の恐怖

竹 郷 定 夫 七十八歳・山神

私は、終戦の時、満十五歳の少年でした。その頃の戦況は日毎に厳しい一途にあり、また、空襲警報の回数も増え、どの家も身近に迫る危機と緊張を感じながら、それぞれ防空壕を掘り始めていました。

私も屋敷内の高い場所に防空壕を掘り、B二十九が近くに飛来した時はそこで息を潜め、あの恐ろしい飛行機音が過ぎ去るのをじっと待っていました。

当時、私は水泳が好きで自信も手伝って暑い日には時々池におよぎにっていました。そしてその日も三、四人の連れと新池（的山の北側で急な山麓にある）でいつものように遊泳中、突然艦載機の大編隊が見通しの悪い山越し現れ、機銃の試射なのか威嚇なのか池の上空でバリバリと撃ち始めたのです。何度も繰り返されて私は自分たちが標的になっているのでは

と思い、全員が無我夢中で岸まで泳ぎ、山の中に逃げ込みました。

気がつくとお互いの顔が真っ青で全身震えていた記憶があります。この直後、田丸駅近くで爆撃があり、親戚の家の近くに爆弾が落ち、家の柱や囲い板に破片が深く突き刺さったり貫通していたのを後日見て、爆弾の威力に驚きました。これが家に落ちていれば大惨事になってたと改めて思いました。

私も、遺族の一人として日本がこのような不幸な戦いのない、永久に平和な国であることを切に願っています。

中学校時代の履歴書

中 西 寛四郎 七十九歳・山神

戦局はますます厳しくなってきた。教科書はほとんど前半の頁だけ、後半は目を通した事がない。教科書にない、柔道、剣道、銃剣術、行軍などが正課となったため、時間がなかったのだろう。

校歌を歌う機会が殆どなく、今も歌えない。今でも歌えるのは、毎日歌っていたこの歌だ。「海行かばみづく屍、山ゆかば草むす屍、大君の辺にこそ死なめかえりみはせじ」

日々のように予科練特別幹部候補生、志願兵への推進があるので早く兵隊に行きたい気持ちであった。

このような時代であっても青春時代、異性を想う気持ちはあった。ひそかに片思いを寄せていた女学生があった。汽車通学の為、男生徒は最前列車両、女生徒は最後尾車両と区別さ

れていた。ある日、無性に会いたいため部活をサボったことがあった。翌日見事に生徒官室に呼ばれ、こっぴどく説教をくった。

戦況が悪化してくると勉強どころではない。大学生は出陣、中学生は学徒動員に出動せよとの命令が下った。自分も明野航空隊へ機体整備に動員させられた。ある日、練習機を山林部分へ退避させていた時、急に目まいがし気分が悪くなった。級友にその旨を話すと皆気分が悪いと言い出した。おーい、おかしいぞ機体があたがたゆれている、あつ、地震だ。暫くして宇治山田の方を見るとものすごい土煙が上がっている。大変な被害が出ているように思った。

後日B二十九からビラが投下された。「地上では大地震、空からは爆弾に見舞われ可哀な日本よ、早く降参しなさい」との意味のものであったそうだ。本来に可哀な中学時代、五年教科を四年に繰り上げられ、昭和二十年三月三十一日付で卒業証書を受け中学時代を終えた。

思い起こせば六十五年も前のことである。が、しかし現在世界のどこかではテロ行為がある。間違った教育をすれば戦争は絶えないように思えてならない。

山田の空襲

中村と志 八十一歳・山神

弟の手を引いて防空頭巾と非常袋に少量の食料を詰めて逃げる。二見街道は避難してきた人で動けない、私の家は燃えていると、口々に泣いて逃げ惑う人の波、照明弾が落ちる、火の手が上がる、火の玉となって転がってくる。

焼夷弾が集中して落ちる。あつ山商が燃えていく、二階建て校舎が火の柱となって倒れていく。

伝統ある学校がと思いきや目の前に焼夷弾、老人、女が、子供が倒れている。泣き叫ぶ声、飛び交う悲鳴、全く地獄絵のごとく。空からは錫箔物体、降伏せよ、のビラが容赦なく降る。気がついたら私は、ドブ川の中にいて、時間は皆目分ならず朝が来た。

煙で暗い朝、幸い我が家は無事であったが、弟が帰らず心配、暫くして帰り親子が涙で抱

き合った。

震災孤児とはこうして生じたかと今も胸が痛む。戦争とは尊い命を無惨にし、かけがえない財宝を破壊し、人の心は荒ぶ、食料は不足等、百害あつて一利なし、二度としてはならない。

現在の平和に感謝して物を大切にして戦争のない平和な社会をまもって行く義務がある。



米軍の照明弾（伊勢の空襲展）



親戚を訪ねる者、施設に入った者、浮浪児となり戸籍のない者など運命はさまざまだった（毎日新聞社）

一兵として見たもの

石橋 清 八十三歳・勝田

(一) 恐怖の一瞬

昭和二十年二月、二十歳で私も現役召集を受け京都伏見の部隊に入営しました。其の数日後に大阪が大空襲を受け、赤々と夜空を焦がしているのを部隊の防空壕の中から眺めていました。翌朝軍の機密との理由で行く先も知らされず、京都駅まで徒歩で行き、列車に乗りました。下関で船に乗り換え、翌朝着いたのは釜山の港でした。こんどは貨車に乗り、朝鮮半島を北上し、途中停車駅で食事の差し入れを受け乍ら京都を出てから一週間程過ぎたでしょう。もう何日経ったかもわからなくなっていました。

着いた所は中国山西省潞安という小さな町でした。それからトラックの荷台に分乗して目的地向かい、暫く走った頃、はるか前方の空に一機の飛行機がこちらに向かって来るのが見えて来ました。立って見張りをしていた兵士が屋根をたたいて運転士に知らせ、すぐに道路から横にそれて木の蔭に車を止め、付近の草むらに身をかくしました。大きな爆音が近づき、地面すれすれと思う程の低空で連続してかん高い銃声が聞こえ、動けば撃たれると思ひ、更に身をかがめて地面に伏せていました。

間もなく機影は遠ざかり、みんなが無事を確認し合つて再びトラックに乗りました。少し進んだ所で車が速度を落としたのでふと横を見て異常な光景にハッとしました。大平原の中の一本路で、荷馬車を引いたロバが一斉に倒れているではありませんか。二十数頭はいたでしょう。あたりの道路は一面に血が流れて赤く染まり、臓物がとび出してゴム風船のように大きくふくれ上がり、見るも無惨な有様でした。さっきの銃声はこれだったのだと直感しました。車夫の中国人は逃げていたので無事でしたが、米軍機の無差別な攻撃を受けたのです。私達もこの一本路を走っていたら機銃掃射の標的になり、このロバと同じ運命だったのです。

戦地に来て早々と受難の第一号が始まりました。兵隊は命令に従って行動しなければならぬ運命にあり、これから先どんなことが起きるやらただ運を天に任せるだけと我が身にそつ

と言いきかせました。

(二) 引き揚げの苦難

中国山西省太原の陸軍病院に勤務していた時終戦になりました。やがて復員という言葉が聞かれるようになり、派遣部隊の引き揚げが始まりました。奥地から送られて来る傷病兵を一時受け入れ、その人々を乗船場の港に近い天津に集結させるため、太原の駅迄運び列車に乗せるのが任務でした。その任務は約十ヶ月程続きました。翌年の五月半ば、ようやく私達にも順番が来て、患者と共に貨物列車にすし詰めになって乗り込みました。中には担架で運ばれて来た重症の人もあり、途中で力尽き亡くられる方もあり、遺体と共に運ばれてゆく貨車の中の時間はずい分長かったように思いました。

天津の元陸軍貨物廠という軍需物資を保管するために設けられた幾棟もの大きな建物が、引揚者の臨時収容所になっていました。軍人と在留邦人の棟は分かれていましたが、邦人の棟からも病人が続出していましたので、軍医さんが回診に行かれるのにお供をして行った時

のことです。ずい分広い建物の板間一面に敷きつめられた毛布に、大勢の人がぎっしりと詰め寄り、疲れ切った様子で横たわっている人やうなだれて荷物の袋にもたれかかっている人達に一瞬目を見張りました。あちらこちらには顔に白い布をかけられ、枕元に線香の煙が細く立ち上っているのが見え、その傍で幼い子供が一人二人としょんぼりと座っています。中には両親共亡くなり遺体にすがって泣いている子もいました。まるで地獄絵のような惨状でした。これから先、この子達どうなるのだろうと哀れに思い、そっと遺体に手を合わせました。敵国の地で、こんなにも多くの居留民の人々がよくも住んで居れたことだと驚きました。戦争は戦う兵士ばかりでなく、一般の民衆迄も巻き添えになり、思わぬ所で悲惨な事態になるものだと思います。数日後、やっとの思いで博多港に上陸。家に帰る列車の窓から見えた広島街はあとかたもなく、はるか向こうの山のふもとまで焼け焦げ、昼間なのにまるで夕暮れ時のようなひっそりと薄暗い感じで、原爆の凄まじさを見せつけられました。戦争はもうこりこりです。



上：血で染まった着物のまま助けを待つ少女
下：爆心地付近の惨状
(伊勢の空襲展より)

田丸地区

三縁寺の被爆

愛洲 雅子 八十四歳・田丸

昭和二十年八月十四日、棚経が終わってお昼過ぎ、私は少し身体を休めて、子供を寝かせていると、突然大きな異常音が響き、あわてて一歳の長男を抱きかかえ防空壕に逃げ込みました。しばらくしてから、頭を上げて、外を眺めると、書院の方から土埃が立ち上っていました。書院に爆弾が落ちたらしいのです。そこは、駐屯していた中隊長さんの居場所になっていました。中隊長さんは、大きな怪我はなかったのですが、額に少し傷をしていて、大したことはないから騒がないようにと言われました。

外は晴天で、梅を土用干ししていたので、梅干しに土や砂埃が被ってしまいました。このことを今もはっきり覚えています。

山門の方に行くと、田圃の中に直径三メートル位の穴が掘れており、爆弾の破片が山門の柱や扉に突き刺さっていました。山門の近くに掘った防空壕は、当時お寺の敷地に住んでいた大工さんが頑丈に造ってくれたので爆発音は、あまり大きく聞こえませんでした。

当時三縁寺の本堂や庫裏くらには、百人位の通信部隊が駐留しており、本堂の裏には何頭かの馬が繋がれていたもので、それを狙って撃つたのではないかと思いました。

又同時に、お寺の横の民家にも爆弾が落ちました。その爆風で建物が倒壊し、二人の女性が亡くなりました。髪を乱し圧死した悲惨な情景を見た知人は、今も目に焼き付いて離れないと言っております。

今、思い起こしてみると、このような大きな事件であっても、当時の私は、それ程、怖いとも思わなかったし、兵隊さんも冷静で、騒ぐこともませんでした。

軍国主義教育の恐ろしさと、終戦前日に、命を亡くされた方が残念で、本当に悲しく思います。

過渡期を生きる

青木 利夫 八十歳・田丸

昭和二十年の三月、私は明野農蚕学校を終戦の年に卒業した。特に二・三年生になった頃から、戦時体制が強化され、学徒動員を強いられた。

私たち生徒は、隣接する明野陸軍飛行学校の飛行場の拡張のために、特に三年生になってからは、軍政が厳しくなるに従い、学校の校舎は軍隊に収用され授業は全く出来なくなった。専ら勤労奉仕の一年であった。当時は、多数の朝鮮から動員された人々と一緒に拡張作業に励んだ。特に真夏は、わら草履にゲートルを巻いて照りつける太陽の下での作業であり、暑さに耐える精神力が唯一の盾であった。もちろん食糧は、不十分で体は痩せる一方である。生徒の皆がそうであることを思い、くじけそうな自分を、支える力でもあった。

さて、在学中一番印象に残ったのは、次から次へと開発される戦闘機である。一式・二式（ドイツ製水冷式メッサシュミット）・三式・四式と、飛行学校ではその試乗訓練である。奉仕作業をしながら飛び立っていく操縦士に手を振ると、相手も応えてくれる勇ましさに感動したものである。しかし、飛び立った戦闘機が整備不良なのか、見る見るうちに墜落する場面をいくつも見つめた。五〜六メートルほど掘り下がり白い絹の襟巻きが、埋もれた土から悲しく見えていた。

手を振ってくれた操縦士が一瞬のうちにこんな姿に変わるとは、何ともいいようがなかった。ただ冥福を祈る思いであった。成層圏近くを飛ぶB二十九の撃墜のためとはいえ、多くの犠牲を払わねばならない戦争は人々の悲しみをいつそう駆り立てるものである。

昭和暗黒時代の思い出

木下耕作 八十歳・田丸

昭和初期に生まれ育った青少年時代の思い出の一部をお話したいと思います。

昭和初期の年代は、まさに戦争に明け暮れた暗黒の時代でした。

昭和十二年七月に日中戦争（支那事変）が勃発し、次に昭和十六年十二月八日に日米戦争（太平洋戦争）が勃発して、日に日に戦線が拡大して行きました。その状況に対応する軍隊の強化が迫られ、国内の若者は次から次へと赤紙一枚の召集令状で、強制出動させられる事態が進み、軍事主体型の様相が強くなりました。

その戦時下昭和十六年四月宇治山田商業学校に入学しましたが、戦争が激しくなるにつれ本来の授業科目もだんだん減少し、学校教練の授業、体力づくりの剣道、柔道、体操の授業が多くなりました。また、人手不足による勤労奉仕、食糧増産による農家への勤労奉仕の校

外活動の時間が多くなりました。

昭和十九年四月四年生になった一学期に「学徒動員令」が発せられ、昭和十九年七月「花もつぼみの若桜、五尺の生命いのちひっさげて

国の大事に殉ずるは、吾等学徒の本分ぞ

あゝ紅の血は燃ゆる」

の歌とともに我等山商三十七期生百五十名は、故郷を離れて遠く名古屋の三菱発動機製作所名古屋「大幸工場」（現在ナゴヤドーム）へ航空機エンジンの製造関係の仕事に従事しました。しかし我々の腕でする仕事は、ニワカ工員のため出来の悪い製品ばかりでした。

学徒として一生懸命作業した数ヶ月が過ぎた時、昭和十九年十二月十三日忘れる事のできない名古屋の大空襲があり、B二十九爆撃機の爆弾集中攻撃を受け工場が壊滅しました。

空襲警報のサイレンがけたたましく鳴りひびき、全員作業を止めて工場外の防空壕へもぐりこむと同時に、まるで地震のように揺れが起こり、工場が壊滅の様相となり生きた心地もしませんでした。工場から逃げおくれた者、防空壕で亡くなった者も数多く、悲しい出来事でした。幸い山商グループは命拾いをしました。

工場移転した大曾根工場も昭和二十年一月に焼失。つづいて拳母工場（現在豊田市）に移転

し作業をしました。戦時下の特例として中等学校の教育課程が五年制から四年制へと繰り下げが決まり突如昭和二十年三月三十一日工場の食堂にて卒業式を迎えました。これからどうなるのかと不安にかられましたが、翌日休暇をもらい、待望の故郷へ帰宅して両親に当時の状況をいろいろ報告をしました。

当時は教員不足の為教員試験を受け、有田村国民学校の代用教員として社会人の第一歩を踏み出しました。然し、戦争はますます烈しくなり、校舎も護脚部隊の駐屯となり授業もできず各地区のお寺会所での分散授業となりました。

昭和二十年七月二十八日夜半、宇治山田市がB二十九の空襲を受け、校長の命令を受けて学校奉安殿に安置されている天皇の御真影・教育勅語等を背負い、自転車に爆撃機が飛行している下無事日向のお寺にお収めした事等、昨日のことのように想い出されます。兄もフィリピン・レイテ島で戦死しました。

昭和二十年八月十五日天皇の玉音放送にて長かった戦争に終止符。

戦争に明け暮れた暗黒の時代を過ごし、国の為、天皇の為と何事も強制され、全く自由のない世相でありました。

戦争の悲劇は二度とあってはならないと強く思います。

戦時中の記憶

下村 幸生 七十二歳・田丸

国民学校時代は全て戦時下であった。入学したのは、開戦直後の昭和十七年四月、校庭には機雷と魚雷の展示品があり印象的であった。

二年生（昭和十八年）の夏頃から「空襲警報」の発令回数が増してきた。

各家庭に防空壕と防火用水の設置義務、バケツと叩きが常備され、母親たちの「国防婦人会」に交じって消火訓練が行われた。

学校では教練として、ゲートル巻き、歩行中に耳と目を両手で塞ぎ素早く地に伏す練習が、毎日繰り返し行われるようになった。

三年生（昭和十九年）戦局は次第に厳しくなり出征兵士を神社から上級生の鼓笛隊を先頭に、「愛国行進曲」を歌いながら田丸駅まで見送る回数も月毎に増していった。食料も乏しく

なり校庭は、畑と化し甘藷の栽培をした。

勤労奉仕が始まり、新田町の養蚕農家に行き桑の木の皮剥き作業をした。

昭和二十年になると、米軍の艦上戦闘機が頻繁に来襲するようになり、遠くの明野飛行場が繰り返し爆撃されるのを悲しく眺めていた。

ある日、家の外に出た途端、グラマンが一機超低空で来るのが真正面に映り、咄嗟に身を伏せると同時に背後で大音響がした。

近所に出来た、石油の代替燃料「松根油」の製造施設を狙った小型爆弾の投下であった。目標がそれて少し離れた鶏舎に落ち、被害は鶏と兎の各一羽だった。しかし今でもあの時の恐怖と大音響は忘れることはできない。

七月二十八日夕食後、何時もより空襲警報がせわしく聞こえていた。少し暗くなったころ、「津がもえているって見にいこう」

と友達数人と隣村（勝田）の端まで行った。

城山と田辺山の山間の北の空が赤く染まっているのを見ての帰り道、東の空に突然「ピカ、ピカ」と花火のような光を見た。皆が言った

「あ、あれはなに？」

光は瞬く間に赤い炎になって滝のように降り注いだ。

「焼夷弾だ逃げる」

の声にあわてて家に帰ると、祖父と祖母が大八車に荷物を積み込んでいた。母は二歳になった末の妹を背負い、私は妹二人を連れて暗闇のなかを逃げ出した。

「じいちゃん どこへにげるの？」

祖父が

「そろばんやま（現在の浜塚団地）」

と答え南に向かった。東の空は真っ赤になり、火の手が裏の山まで迫ってきたかと錯覚した。祖母が

「佐田山（現在の栄町）が燃えてきた、はよう はよう」

と泣き叫びながら歩いていった。夜が明けると曇り空から何と灰が降ってきた。昼ごろ被災した人達が、ぐったりした姿で、

「何か食べる物をください」

と乞うて、家々を訪ねていた。悲しい記憶だ。

私は当時四年生だった。子孫には絶対体験させたくない出来事だった。

軍需工場への爆撃

下村 精一郎 八十一歳・田丸

昭和二十年に入ると空襲もだんだんと激しくなり、工場疎開も進んで来ました。私達も一段と忙しくなり、残業残業で休日も殆ど無く、又空襲警報は毎日のように有り、防空壕に避難する日々でした。

昭和二十年八月七日の新聞に、「広島に新型爆弾投下」の記事が一面トップに出ました。文面は定かではありません。

その日の夕方、豊川海軍工廠が空襲で壊滅したとの報が入り、同廠出身の係官が派遣されました。当時私は鈴鹿海軍工廠に居りましたが、従業員は豊川から転出して来た人が多く、造られる兵器も豊川と同じで、機銃（飛行機に装備される機関銃）それに使用される弾薬でした。又豊川の事もいろいろと聞き、従業員も何千人もいるとの事でした。

八日には、豊川に派遣された係官の話を組長から聞かされ、工廠の空襲は爆弾で至る所に死亡した人々が倒れており、空襲警報と共に逃げ込んだ防空壕に爆弾が直撃し、防空壕もろともに人々がばらばらになり、飛び散っている悲惨な光景もあったとの事でした。此の話を聞き、人ごとではなく、何時かは自分もそのようになると覚悟を決めました。

翌九日に長崎にも『新型爆弾投下』の報が入りそれから一週間、八月十五日の終戦を迎えました。戦とはいえ、自分は生きていたんだとつくづく思いました。後で聞いた話ですが、豊川に落とされた爆弾は三千発以上、又死者は二千数百人との事でした。

今世界では、戦争・暴動と人命に関わる事が各地で起こっております。此のような事が一日も早く無くなる事を願ってやみません。

大戦下の小学生たち

出口 環 七十六歳・田丸

熾烈を極めた大東亜戦争の真つ只中から、敗戦に至る激動の時代に、我々昭和六年組及びその前後に生まれた者は幼・少年期を送りました。思えば昭和十九年三月田丸国民学校初等科を修了した頃から戦局は日に日に悪化。学生でありながら大切な学業は捨て、男子はゲートルを巻いて通学し、軍事教練やら防空壕掘りに明け暮れました。また食糧増産の名のもとに、遂に運動場を開こんで、さつまいもや、かぼちゃを栽培しました。やがて米軍機B二十九が飛行機雲をなびかせて悠々と、本土の上空に飛来するようになると空襲警報が発令され各戸に防空壕が義務づけられました。

夜は灯火管制で、電灯は豆球一つ。さらに黒い袋をかぶせて明かりが外にもれないようにしました。昼は空襲の合間に壕掘りや農作業、勤労奉仕に汗を流し、さらに出征兵士の見送

りも一つの学業でした。上級生になると、学徒動員とやらで近くの軍需工場にかり出され、只々皇国の必勝を信じつつ、戦争生活を続けてきました。夜空襲警報が発令されると壕に入り、母や弟妹たちと寄り添って轟音におびえ恐さにふるえながら、なぜこんな戦争をしたのかと、小さい胸を痛め考えこんだことは幾たびもありました。これにひきかえ恵まれた環境の中で勉強に体育に集中できる現在の学生諸子はうらやましい限りです。さて戦況は敗戦の色濃い中、昭和二十年八月十五日を迎えました。暑い暑いこの日、正午からラジオで重大放送があり、小学校庭において聞きました。

これがあの有名な天皇陛下による玉音放送です。終戦とは、実は「日本は戦争に負けた」ということでした。

ここに古びた一通の文書があります。卒業式で、在校生総代として読んだ「送辞」の原稿です。たどたどしい文字で綴った文面には、産業戦士、食糧増産、皇国の歴史的大使命など、勇ましい言葉がおどっており、今では非常になつかしく、これがまさに、我々の戦争体験であったと信じています。

今後の恒久平和をひたすら祈念しつつ。

私の終戦日

中西 康 夫 八十三歳・田丸

私は最後の現役兵として、昭和二十年三月旧北満州瑯瑯^{あいらん}の陣地野砲隊観測兵として入隊しました。陣地には旧ソ連に届く野砲を備えていました。八月五日頃、旧ソ連の戦車隊と歩兵が攻め込み、迫撃砲と三八銃で山の上から応戦しました。八月十五日終戦の親書を持って白旗を掲げた軍使も射殺され、二十日迄応戦しました。その後、黒河までつれて行かれましたが、道端には戦死した戦友が、目を見開き水ぶくれになって累々と続き悲惨なものでした。その中を通り凍りついた豆満江を渡り、丘下の広原に各地各部隊が集められました。私は地元ブラゴエチェンスク第三収容所へ四ヶ中隊千名の収容所に入れられ、連日強制労働に従事しました。私は火力発電所の石炭焚きの作業に従事していましたが、何日目かの夜間作業で窯口の前で倒れてしまいました。結核と診断され、数百キロ離れた陸軍病院へ入院、一つ

のベッドに二人寝としていましたが、次々と戦友は死んでいきました。私は収容所と病院の入退院を繰り返していました。病院や収容所で死んでいった戦友何十人の世話と処理に接してきました。私は病人で働けない者として二十二年十一月高砂丸で舞鶴へ帰国しました。帰国を何時も夢に見ながら故郷を偲び父母兄弟等を偲びつつ、無残にも無念の形相で死んでいった幾十人の戦友の顔々を忘れられません。帰国後、戦友会などの集いで知ったことですが、第三収容所でパラチフスが蔓延して収容所は閉ざされ、私の中隊の初年兵四十一名中三十九名が死亡、全体で四百人が死んだことを知りました。

私がいま生かされているのは、死んでいった戦友の屍を越えて生かされておりました。祈る外ありません。八月十五日の終戦記念日がめぐってきても落ち着いた気持ちにはなりません。私の終戦日は私が逝く日が私の終戦日だと思いい、生かされ続けています。

戦後小さい頃の記憶

森川 途子 六十六歳・田丸

私は一九四一年七月に生まれ、戦争中のことは知りませんが父は戦死でした。私は父の顔を一度も見たことはありません。誰の物かもわからない頭髪を役場の人が白い半紙に包んで持参され、母の手に渡っていたのが今も私の眼に焼きついています。母は、私が六年生の頃まで父が戦死したことが信じられず、終列車が行ってしまっても戸を閉めずに帰りを待っていました。今日も帰って来なかったなーと言いなながら戸を閉めていたのを思い出します。

その後世の中が貧困のせいで再三民家に泥棒が入り、洋服やコート、芋類などよくなくなっていました。又私達姉妹はお腹が空くと、まだ熟していない柿やみかんなどを食べ、お腹を壊したものでした。山中の田舎暮らしで田畑がありました。父がいないのをいいことに他人に名義を書き換えられ田畑を何枚か取られたと話していたことがあります。

母と姉はよく働きました。農繁期になると全校休校となり、親の手伝いをする期間です。私も小さい体で手伝ったものです。供出という制度があり、収穫の何割かを提出しなければならなかったそうです。母は朝早くから暗くなるまで田畑で働いていました。雨の日は学校から帰ると母が家にいるのでうれしかったのを覚えています。又配給という三ヶ月に一度農協が村の出張所に来てくれる日があり、一軒につき品数は限定されていましたが砂糖など貴重でした。

また、乞食なども多く、山や物置によく潜んでいることがあり、怖かったものでした。戦争帰りの人が家族もなく、働くところもなく、食べる物もないので線路へ飛び込み自殺があり、よく見に行ったものでした。終戦日になると戦争の事がテレビで放送されますが、そのたびに父もこんなふうだったのかと心が痛みます。

母の悲願

浦田善治 七十八歳・佐田

岸壁の母の一節

《母は来ました今日も来た この岸壁に今日も来た とどかぬ願いと知りながら もしやもしやに もしやもしやにひかされて…》

この悲願の歌詞のように今から六十有余年前の事を思い出します。

兄が「戦時死亡」の公報を役場の係の方から受け取ったのは昭和十九年七月五日との事でした。その日の夕食は家族みんなが涙を流し、だまつて箸を取るものもありませんでした。

しばらくして、父が小さな声で實(兄の実名)はお国のために戦い、お国のために亡くなったのだからみんなでがんばって實の死を無駄にしないようにと涙ながらに言った事は、今でも忘れることは出来ません。

母は兄が出征してから、朝は暗いうちに起床し、氏神様(田丸神社)に日参をして武運長久を祈り、雨の日も風の日も毎朝一生懸命に約五年間続けた末、その甲斐もなく死亡という残酷な結果でした。母は日参をすませてから朝食の用意をしてくれたのでした。仏前にお供えし、兄の膳(陰膳)を別に作り家族が朝食を共にいたしました。夕方になると農作業から家に帰り、すぐに夕食の用意を済ませると、いつも家をこっそりと出て行きました。最初のうちはみんながどこへ行ったのか分かりませんが、母が帰り夕食の時に聞いてみると、田丸駅のホームへ實がもしや帰ってくるかと思いついて迎えていたのだという事を聞き、何か胸に熱いものがこみあげてきました。

冒頭の一節にもありましたが、場所は舞鶴の棧橋と田丸駅のホームの違いはありますが、母親の悲願はみな同じであった事と思います。戦争による多くの悲劇は二度と起こさないと起こしてはならないのです。平和な国を守っていくのが私達の望みであり、大切な務めでもあると思います。

戦争の思い出

奥山 武次郎 六十五歳・佐田

私は昭和十七年生まれです。私が生まれて六ヶ月の時に、召集令状が来て、父は私の顔だけを見て戦争に行きました。私が生まれたのは一キログラムたらずで、八ヶ月の未熟児で生まれました。その当時は保育器も発達しておらず、育つかどうか危ぶまれ、父は大変心配したそうです。

父はフィリピンのソロモン群島に行きましたが、食べ物もままならず、時にはカエルやヘビ等を食べて生き延びていたそうです。父は、フィリピン南方を出港し物資輸送の途中で襲撃され、昭和十九年五月に撃沈して戦死したと聞いております。終戦後十年程たってから、あなたのお父さんといっしょに生活していたという、伊勢の方が来られ、私は一隻後の船に乗っていて命が助かりましたという話を聞きました。その当時の戦地での苦い経験を聞かせ

て頂き、何とも言えなく感無量でした。その時の話によれば、

「私達は赤紙で一銭五厘の命と言われたものです。多くの兵士の命を左右した「臨時召集令状」は、在郷軍人に対して、市町村役場より発令されたら、定められた日時に指定の連隊に必ず入隊しなければならなかったのです。淡赤色の紙に印刷されていたので、赤紙と名がつけられたのです。」

とお聞きしました。

戦時中母が三ツ橋の水田に行っていると、B二十九爆撃機が飛んで来て水路の中にとび込み、草の中にかくれ、子供を下にしてふせた事を聞かされました。父が戦死しているので母もいつ死んでもいいと、あきらめていたそうです。家の前には防空壕が掘ってあり、近所の人といっしょに入っていたように聞いております。終戦後はそこでよく遊んだ事を記憶しております。

終戦後八年間は、国からは何の援助もなく、親子で大変な生活をしてきました。私が小学校二年当時のこと、食糧難で食べ物が無く、母が畑でさつま芋を掘っていると、後部から小さいのでいいから、どうか私達を助けて下さいと言って芋を拾っていかれた人がいたそうです。物が不足していた時で大変な時代でした。現在は何でもある贅沢な時代になりました。

二度と戦争の起こらない平和な社会をいつまでも守り続けていく事が、私達に課せられた大きな使命であると強く思います。私の母も長く寝たきりの生活を送り、三年少し前に亡くなりましたが、力強く逞しい生き方だったと思っております。

小学校の思い出

小林 幹子 七十四歳・佐田

私が小学校二年生の時、尋常小学校が国民学校に改名しました。その頃は毎日学校へ通うのが楽しみで授業も好きでした。五年生（昭和二十年）の頃になると、衣食の配給が思うようにならず、貧民生活でした。小学校では農兵隊が小学校の講堂で起居し、大きい運動場は芋畑と変わりました。私達上級生は毎日手伝いました。運動会も遠足もなく、体操の時間になると、上級生は竹槍の練習（敵国アメリカが攻めて来たら竹槍で攻撃する練習だと教えられました）。春頃からは敵機襲来が多くなり、授業中に警戒警報が発令されると、東外城田神社の山の中で勉強しました。

朝の当校はみんな並んで行きますが、下校は別々なので途中で空襲警報のサイレンが鳴ると凄く怖く、山の中へ逃げて震えていました。頭の上を敵の飛行機が飛んで行きました。放

課後は、上級生は家から持ってきた藁で、自分が明日はく藁草履作り、一足作らないと家へは帰れませんでした。うす暗くなる日もありました。小俣町明野の飛行場には日本の飛行機が無く木製の飛行機が並んでいると聞いて悲しく思ったものでした。

昭和二十年八月夜八時頃空襲警報が発令され防空壕に入りましたが、西の空がとても明るくなり、津市内へB二十九機が焼夷弾を次々落とし、光がとてもきれいでした。あんな光景は二度と見られないでしょう。その内に東の空に変わり、宇治山田市（現伊勢市）が全部焼けました。翌朝は暗く黒い灰が一面に降っていました。

私の兄も中支（現中国）で戦死しました。二十二歳の若さでした。二度と戦争のない明るい住みよい日本にして欲しい。これが私の願いです。

頑固な親の涙

下村 久 七十五歳・佐田

私が国民学校五年生だったと思う。当時の三重県にも夜毎空襲警報のサイレンが鳴り響いた。電灯に風呂敷をかけた灯火管制の中、空を見上げるとサーチライトに照らし出されたB二十九の編隊が北上し続けていた。行き先はたぶん名古屋方面か三重の北部と思われる。近くに明野航空隊の飛行場があり、そのためか連日の如く空襲があり、松阪の町も伊勢の町も一面の焼け野原と化した。何もない国鉄の田丸駅にもグラマンによる機銃掃射を受け恐怖におびえたものであった。

丁度その時期であっただろうか。次兄の戦死公報が届き、遺骨をもらいに行くと言っていた。骨や遺品が一杯入っていた。気丈な親は涙一つこぼさず、お国のためだと言っていた。続いて軍属で戦地におもむいた長兄の戦死公報が入った。その骨箱には何も入っておらず小さ

な紙切れ一枚であった。友人が家にたずねてきて、ブーケンビル島のブインで亡くなったと聞かされた。その時は、気丈でしっかり者の親も、私にさとられないようにと影にかくれて泣いていた悲しい姿が、幼い私にも頭からはなれなかった。戦争がどれ程憎いものであるかと思ひ知らされた。もう二度と戦争はごめんだと痛切に思った。



B29模型



空襲に備えての避難訓練。防空頭巾にモンペ姿が当時の子どもたちの標準的な服装。(毎日新聞社)

食糧不足の苦難

太平洋戦争中は、勝利の日まで頑張ろうと国民全体が目標のために一生懸命だった。しかし、当時は物資不足で特に私達若者は空腹との戦いだった。昔から腹が減っては戦は出来ないと聞いていたが、諺通りになり日本は敗れてしまった。食糧は戦時中は統制がとれていたが、終戦の翌年頃より無秩序で無法者の天下になった。即ち、買い出し部隊が農村等へ繰り出して米や芋等の仲買を始めた。当時は此の人達を闇屋と呼んだ。近鉄中川駅は闇屋の人達でごった返し、取り締まりの警官に追われた人達が担いでいた米をホームより線路へばら蒔き逃げる。その米をホームより飛び降りて素早くポケットへねじ込む人、さながら地獄絵の餓鬼の様相であった。

敗戦の悲哀を語るのに、特に思い出すのは、津市の海岸近くの大根畑へ、若いアメリカ兵

須田 実 八十歳・佐田

二人がジープで乗りつけ、取り入れ近い大根を片っぱしから潰し廻って遊んでいたことだ。そばでは耕作者の老婆が地面へ座り込み、泣いていた事を思い出す。日本は戦争に負けたのだと悲しい思いをした事を未だに思い出す。その時ふと思った事は、畑の中を走り廻せる性能の良い車両を造れるような優れた国と、なぜ戦争をしたのだろうかと当時の国の指導者たちへの怒りがこみあがってきた事を思い出す。

こんな苦しみはイヤ

西野 ふと子 七十歳・佐田

私は昭和十二年生まれの現在七十歳で大阪生まれ。十七年の夏に引き揚げて来ました。父の入隊の為にその後は、母親と私達姉妹の親子三人での生活となり、家も何回となく替わりました。戦争もはげしくなってB二十九が家の上を飛ぶようになり、伊勢の空が赤く花火のようにかがやく様を何かボーとしてみていた事を思い出します。

そうこうしている時、母が病気になる、私と妹は親戚に引き取られる所までになりました。母は奇跡的に助かり、またもとの三人でくらせるようになりましたが、十九年十二月七日の大地震にありました。その頃は食べる物も無く、着る物も無く、皆やせ細っていました。私達は、まだ田舎ぐらしだったので直接の爆撃は知りませんが、終戦を迎えたのは二年生の時でした。その後も苦しい生活が続きましたが、やっと中学生ぐらいになって少し楽になったように思います。今の子供達にこのような苦しみの無い事を祈ります。

我が青春の一頁

西山 耘平 八十二歳・佐田

「人生意気に感ず」よし合格。昭和十八年八月四日伊勢市の神都公会堂に於いて実施された甲種飛行予科練習生一次検査（身体検査）での徴募官の一声でした。

身体検査では、肛門の病気（痔）や性病の検査をするため全裸で検査官（軍医）の前に立たなければなりません。多感な若者は羞恥心の固まりで、なかなかその行動がとれなかったのです。と、そのとき、私はさつと全裸になり一番に軍医の前に立ったのです。それを監督していた徴募官から発せられた「合格」の一言だったのです。結果、私は裸になっただけで合格証書を手にしたのです。

一次検査合格者には二次検査が課せられたのですが、私にはその通知が来ないままに終わってしまいました。なぜだったのかその訳は未だにわかりません。でも、そのおかげで今日

の自分があるのですから、徴募官に感謝しなければならぬと思います。また、そのときの合格証書は私のお守りと思いいまでも大切に保管しています。そして、あの日の光景が今でも眼に浮かびます。

通称「予科練」は日本海軍が制定した志願兵制度で甲乙丙の三種があり、十四、五歳から志願できました。私の志願は十七歳の時でした。

この制度は昭和四年に始まり、将来の航空戦に備え大量の戦闘機搭乗員の養成が目的であったようですが、太平洋戦争も昭和十七、八年になるとミッドウェイ海戦の敗北、ガダルカナル争奪戦では連合軍に制海・制空の権力を握られ、日々に敗色が濃くなるなかで特攻隊の訓練が強化されていきました。

情報が閉ざされ、威勢の良い報道ばかりに踊らされた私たちは、予科練の歌に酔い、七つボタンの制服に憧れ、志願へと心を動かされたのです。

この稿をまとめるにあたり改めて、玉城町史下巻を開き、戦にたおられた方々の在りし日を偲びました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

空襲のこわさ

森 下 鶴 子 八十六歳・佐田

昭和十九年に仕事で北朝鮮に主人と行っておりました。まもなく空襲が始まって、毎日のように敵の爆撃があり、家の中で隠れていました。

内地からは危ないからすぐに帰れと毎日のように言ってきましたが、連絡船が内地へ帰る人で一杯でなかなか乗れません。ですが、どうやら乗ることが出来、救命袋と小さい袋一つで命からがら帰ることが出来ました。その時のうれしかった事は言うに言われませんでした。

家も主人の弟がビルマで十九歳の若さで戦死しました。戦争のつらさは忘れることが出来ません。

家に帰ってまもなく伊勢が空襲にあい、まっ赤な空から火の粉が家にとんできた時は、西

の方の山へみんなで逃げました。

家の庭にも防空壕がほってあって大事な物を入れていました。食べるものもなく、さつまいものつるも食べました。

米もないので友だちらは着物とお米と換えて食べていました。

私はおかげさんで実家が農家でしたので、お米はいつももらっていましたが、自分の着物をほどこいてモンペや防空ズキンを作りました。

あのむごい戦争で尊い命をどれだけなくした事か。どうかあのむごい戦のない事をくれぐれもお祈りします。

今は何一つ不自由のない世の中です。

これも戦死された方々のたまものと思っております。これからもあのむごい戦争の事を今の若い人達に伝えていかなければいけないと思っております。

少年の頃の思い出

森田 欣一 七十四歳・佐田

大東亜戦も終わりに近づくにつれ食料品等も不足し、未利用資源という事で草も食べました。小学校の運動場も高学年の学生達や外の人も家から鋤を持ってきて、皆で助け合いながら開墾し、畑になりました。

そして運動場いっぱいにはさつま芋を植えました。その当時さつま芋は大事な食料でした。運動場の土でもさつま芋はすくすくと育ちました。

学校では授業のほか、年齢に合わせた勤労奉仕がありました。

冬は皆で麦田の麦を片っぱしから踏んでゆきました。秋には出征している家の稲刈りも手伝いに行きました。

私の家も農業で、父が出征しておりましたので学生さんが手伝いに来てくれました。

当時はどこの家でも蚕を沢山飼っていたので、夜おそくまで手伝いになり出され、蚕に食べさせる桑の葉もぎをしたものでした。

そのあとの桑の茎を目当てに、学生さん達が私の家に来て、桑の茎を横槌でたたいて皮剥きをしたものでした。

桑の皮の繊維で糸を作り、学生服に加工された服をくじ引きで順番に配給を受けたものでした。

昭和二十年に入ると、警戒警報のサイレンがよく鳴るようになりました。勉強をしていますがサイレンが鳴ると皆が家に帰されます。外に出ると上空にはB二十九が飛んでいました。空襲警報のサイレンが鳴ると家の庭に掘った防空壕の中に家族全員で解除になるまで入っていました。

寺には兵隊さんが駐屯していました。

終戦の前の日だったと思いますが、敵機が飛来し、三縁寺に攻撃を加え爆弾を三つ落ちていきました。

あの「どどどん」という大きな音はおそろしくて今でも忘れる事は出来ません。爆弾は寺には当たらず、その内の一つが寺の東隣の民家を直撃しました。あとで見に行ったら壊れた

それは梅雨空の重い空気の漂う昭和十九年七月の事でした。私は当時旧制中学三年生でした。突然全校集会が召集され、運動場に整列した私達一同に、学校長から「今回、学徒動員令という国家の命により、諸君は本日をもって学業を修了とする」との訓示がありました。すると生徒の中からざわめきが起りました。それは風雲急を告げる国家の非常事態にいよいよ自分達も兵器増産の一翼を担う時が来たという武者ぶるいであつたのか、それとも数日後に迫った期末考査が中止された事への喜びであつたのかは確かではありません。予想も出来ないこれからの生活への不安を抱きながらも着々と準備をし、戦闘帽をかぶりゲートルを巻いた制服姿で、桑名市の東洋ベアリング桑名工場（現NTN）に向かったのです。その工場は予想以上に大きく、私達の宿舎はその片隅にあり、古い木造

学徒勤労働員のこと

山口 和男 七十八歳・佐田

家の中から亡くなられた人を担架で運び出している所を見て、かわいそうでなりません。た。終戦から六十二年、日本は戦争の無い平和な日々が続いておりますが、私はこの今の日本をいつまでも守り続けていかなければならないと思っております。



上：弾痕が残る山門
中：山門の弾痕
下：今も残る爆弾の破片（三重の戦争遺跡より）

二階建てで一室に十二名ずつ詰めこまれ、こんな所にいつまで暮らすことになるのかと思うと、やりきれない気持ちになりました。しかし戦地で命をかけて戦っている兵士の方々に比べたら何でもないことだと自分に言い聞かせました。皆も同じ気持ちだったと思います。最初の数日間の新入教育がすむと、生徒各自の体格・性格・能力等に応じて部署が決められました。また熟練工のもとで暫く見習いする者もいました。ある程度慣れると研磨とか旋盤の機械が任されました。

それから暫くして、大変悲しい事が起こりました。友人のA君がベルトに巻き込まれ、頭部を強打して不帰の人となったのです。彼は温厚篤実な人柄で信頼されていたので彼の非業の死は大きな衝撃でした。翌朝の朝礼で引率責任者のB先生が、涙ながらに事故の報告をされた事も忘れられません。戦況もますます悪化し、日本の敗色が濃厚となってきましたが、私達軍国少年(?)はいつかは神風が吹いて、戦局が好転することを信じていました。

唯一の楽しみであった食事も、日に日にお粗末となり、遂におかゆやすいものになりました。副食も当初はいわしの天ぷらが出て、さすがは軍需工場だけあると喜んだものですが、それも固く臭く異臭を放つ「あざらしの肉」が出るようになり、空腹に悩む私達もこれには閉口しました。昭和二十年二月硫黄島が米軍に占拠されてから、本土への空襲が一段と激し

くなりました。三月十日の東京下町大空襲をはじめとして、日本の大都市は次々とB二十九に爆撃されました。名古屋は三月十二日未明B二十九が、三三四機来襲し、無差別爆撃を行いました。その時であったと思いますが、播磨の裏山に逃げた時、B二十九が不気味な爆音を立てながら名古屋を標的にして私達の頭上を大挙して飛んでいきました。程なく東の空は一面真っ赤に燃え上がり、時々大音響もしました。夜明け前の寒い中でふるえながら見守っていました。また夜勤中、工場の近くに爆弾が落ち、壕に入っても体が宙に浮いたこともありました。五月下旬、やっとベアリングから鳥羽の神鋼に配置転換となりました。しかし勤労働員は終戦の日まで続きました。

忘れられない思い出

吉田 はつゑ 八十六歳・佐田

昭和十八年頃から戦争がはげしくなり内地には年寄りや女子供ばかりでした。主人も召集で戦地に行っていました。

B二十九が列をなしてとんでくると警戒警報となり、祖母は下の子供、私は上の子供を背負い、子供の着がえと少しの食料を大八車についで櫻街道へと逃げました。こわくて生きた心地もしませんでした。夜はサイレンがなってくると電気に黒い布をかぶせ、防空壕へ入ってふるえていました。学校の庭で毎日竹やりで敵を突くけいこをしましたが、馬鹿げた事でした。

近所のお寺に兵隊さんがたくさんいて、毎晩お風呂へ入りに来ました。九州の人が多くておもしろく、子供たちを可愛がってくれました。食べるものもないのでキビやさつま芋など

をもってきてくれ、遠い家の話など聞かせてくれました。でも中にはこわい人もいて、いやな思いもしました。祖母は元気だったので買い出しに行き、カボチャ、ジャガ芋を買ってきてくれました。カボチャがご馳走でした。

終戦の近い八月十三日、お盆で里へ帰っていた時のこと、B二十九が伊勢や津の方面へ列をなしてとんできたと思ったら大きな音と共に田丸へ焼夷弾をたくさん落としました。落ちた駅前の家は焼け、おばあさんとお嫁さんが亡くなり、気の毒でした。

お寺には、まだ当時の焼夷弾の跡が残っているそうです。

里の家の前のタンボへも落ち、子供二人を抱えてとなりの神社の森へ逃げこみました。

あとでタンボを見にゆくと、大きな穴がほれていて驚きました。

もう戦争はしてはいけません。平和な世界でありますようにいつも祈っています。

空襲の惨劇

池田 形左衛門 八十八歳・下田辺

太平洋戦争の後半になると、昭和十九年から二十年にかけて、米軍は豊富な物量、新兵器を以て反撃してきた。日本軍の最前線の軍隊は、後続の支援が途絶え次々と玉砕が報じられた。米軍の新兵器B二十九は、高度一万メートルで、日本の戦闘機や高射砲は届かず抗する術も無かった。敵機の思うがまま本土上空を飛び回り、いよいよ本土決戦となった。

特に二十年三月の東京大空襲は凄まじかった。空襲の翌朝、下請工場を確認に行ったところ、駅へ着くなり眼前一望焼け野原。所々にビルの残骸があるのみ。一帯を見ると、無残に焼け焦げた家々、道路の両側には焼け焦げた人々の死体が一列に仰向けにして延々と並べられていた。その中を歩いていくと、ある祠ほこらの近くで下請工場の主人と会った。真つ黒な顔をして茫然と立っていた。話によると空襲警報と同時位に周り一面に火の手が上がり、猛炎猛

火の中をこの祠に逃げ込んだ。ここは関東大震災の時も焼け残った所で、今回もここで命拾いをしたとのであった。猛火が縦横に吹き荒れる中にも、火炎の道筋があるらしく、その道筋から外れた所はちょっとした所で難を逃れる事も多々あるそうだ。この辺は掘削が多く、平時は貯木場として太い材木が浮かべてある。そこに今回は逃げ迷った人々が皆飛び込んだが、水面をなめるように火炎が這い、焼死した多くの人が浮かんでいた。

二、三ヶ月後、今度は京浜工業地帯だ。警報と同時に火の手が方々で上がった。家財を外に出し、フトンを被せて水をかけ田畑の方へ避難した。敵機が引き揚げた後、暗がりの中に家が残っていた。早速家に荷物を入れ工場へ行った。十四、五名の従業員が集まっていたが、会社は焼夷弾と爆弾で屋根は吹っ飛び、手の施しようもない状態であった。会社側から田舎のある者は田舎へ帰り、会社から連絡するまで待てとのこと。しばらく田丸へ帰った。一ヶ月位経って会社から連絡があり再び上京。昼夜の別なく空襲で仕事も伸び伸び出来ないまま八月に入り、広島、長崎へ原爆が投下され、八月十五日に玉音放送を聞いた。戦争が終わったと安堵で感無量の気持ちであった。

北満の広野に生きて

大喜多 逸子 七十歳・下田辺

満蒙開拓青少年義勇軍の教官であった父は終戦と同時にソ連に抑留され、残された母は私達四人の子供を連れて他の家族と共に、帰国の逃避行を始めたのである。姉は四年生、私は二年生、弟は五歳と二歳であった。当面の食料として、まだ青い畑のトマトやお米を炒り母が帯芯で作ったリュックサックに詰め、家族全員が少しずつ手に持って訓練所を後にした。

昼間は危険であるため、夕日が西に沈むのを待って団員が集結し、満鉄の線路伝いに進み始めた。ある時は野宿をしたり、広野をさまよった。やっとの事で鉄橋まで辿り着いたと思うと爆破されていて渡れず、浅瀬を探して渡った。幼い子供を連れた母は、いつも最後尾であった。秋風が吹く頃には、収容所に入れられ、配給される食事は一日二食のコーリヤンの粥のため、全員栄養失調に陥った。

冬になると吐く息も凍り、氷点下三十度という寒さである。二十一年二月初め、五歳の弟が餓えと寒さで亡くなった。母は、この日を境に姉と私に

「一人になっても必ず本土に帰るんだよ」

と、三重県三重郡千種村岡（現在の菰野町）泰七右工門という行き先を何度も何度も繰り返し言った。その夜、二歳の弟が泣き出して泣きやまない。ソ連兵が突然窓ガラスを割って侵入し、窓辺で寝ていた母を銃底で何度も強打した。私はただ恐ろしく、姉と一枚の毛布にくるまり震えていたが、いつの間にか眠ってしまった。

翌朝、気がついて母にさわると冷たくなっていた。夕べあんなに泣いた弟は、その母の腕の中で眠っている。「この弟だけは連れて帰ろう」と姉と二人で大切にしながら、その三日後には弟も息を引き取ってしまった。三人の遺体は毛布でくるみ、他の何百体もの遺体と共に公園に置くしかなかった。遺品は頭髮と爪を白紙に包んでリュックに入れた。

孤児となった姉と私の二人は、その後も苦しい逃避行が続いたが、優しい団長夫妻に助けられ、昭和二十一年十月に博多港へ帰国できたのである。戦争の犠牲とはいえ、この悲惨な体験はいつになっても忘れることは出来ない。二度と戦争は起こしてはならないと痛感する。

こわい戦争

高木市郎 七十二歳・上田辺

(一) びんた

おぼろげな記憶であるが、終戦年の朝九時頃になると、長い軍刀をぶら下げて馬に乗り、胸の上にピカピカ光る勲章を付けた、えらい兵隊さんが毎日のようにやってきた。

我が家の養蚕室が、どうやら軍の作業指令所兼休けい所になっていたようだ。続いて荷馬車や兵隊さんが二、三十人やってきて、裏の山の方に入っていく。戦後分かったことだが、山の中に物資の保管のための、防空壕を掘っていたようである。

壕掘りの重労働で、お腹を空かした兵隊さんが山から帰ってきて、空腹を我慢出来ず、家の前の畑のジャガ芋を素手で掘って食べた。それを見つけた上官が、びんたを何回もはじい

た。びんたを受けた兵隊さんは、こけては立ち上がり、またこけては直立している。厳しくも、みじめな兵隊さんの姿を、茫然と眺めていた記憶が鮮明に残っている。

思い起こしてみると、当時の我が家は、農家であっても米はなく、カボチャを潰した汁の中に、手のひらと指で押したあとのついたダンゴを、毎日のように食べていた。今でいうすいとんだ。

このような食料事情で、兵隊さんには何もしてあげられなかったのかと、今本当につらく想い、悲しむ。

(二) 空から油タンクが落下

終戦前の暑い日の昼過ぎ、ゴーツという音が聞こえてきて空を見上げると、ピカッと光った小さな物体が二、三十余り、北の方へ向かって飛んでいく。それがB二十九という飛行機で、名古屋の軍需工場を爆撃に行ったのだと後になって知った。その飛行機を撃ち落とそうと高射銃弾が、パンパンと五、六発、今の祭りの花火のように聞いていた。しかし、敵機が

高く飛んでいて弾が届かない。

サイレンが鳴ったら防空壕に飛び込まなくてはいけないのに、子供の自分は外で空を眺めていて、母に何時も叱られていた。

ある秋の昼頃、自分の家から二百メートル位南の方に飛行船のようなものが、ゆらゆら、ゆれながら落ちてきた。田んぼに落ちたと思ったなら水柱状のものが高く吹き上がった。少し経ってから怖々二、三人で見に行ったら、それは五メートル位もある、ぐにやぐにやになった大きなアルミタンクであった。しばらく経ってから何処かの人が来て、一升ビンにその液体を何本も入れて持ち去っていった。

B二十九が爆撃の帰り道に余った燃料のガソリンタンクを捨てていったと、誰かが言っていた。家の上に落ちず田んぼの中に落ちたので良かったと、その時つくづく思った。こわいことだ。

兄は還らなかつた

高 木 米 子 七十八歳・上田辺

昭和十七年初冬、京都の連隊での面会が終わると、兄は私たち家族に一礼して駆け出していきました。それが最後の姿でした。昭和十九年決戦に備え、ルソン島からレイテ島に向かう途中、米軍の攻撃を受け輸送船が沈没してしまつたからです。

七つ年上の兄は、農業が好きで、次男でなかつたら家で農業をするんだと常に言っていました。

昭和十六年、山中を卒業した兄は、名古屋の三菱重工業に就職しました。帰省の日が近づくとも色々な話をするのが楽しみで胸が高鳴りました。それこそ指折り数えて門に寄って待ち侘びたものです。

しかし、楽しい日はあつという間に過ぎ去りました。

昭和十八年田丸小学校の高学年になりましたが、私たちを待ち受けていたのは勤労奉仕でした。

まず運動場を開墾して、南瓜を植え食糧難をしのぐため増産に励みました。一面黄色の花を咲かせて、一個でも多くの収穫を願ったものです。また、南佐田に真綿工場があつて、そこで学徒動員として毎日仕事に精を出しました。学習どころではありませんでした。

十九年には、田丸実女に入学しましたが戦争は日に日に激しくなるばかり、増々の食糧増産のため、作業服に、モンペ、草履ばきで、田丸から宮古の梅林まで開墾鋤を肩にかつぎ、さつまいも入りの弁当をさげて通いました。来る日も来る日も額に汗して働きました。

農場ではボウフラの湧いた溜め水を沸かしてお茶代わりに飲みました。病気もせずに頑張りました。出来上がった畠にはサツマイモの苗を植えました。作業をするその頭上には米軍の爆撃機（B二十九）が編隊で飛んできます。その度に慌てて近くの山林に逃げ込んで身を潜め、解除をまってまたもとの作業を続けたものです。

家にいる時に空襲のサイレンが鳴ると、家の前の防空壕に逃げ込んで一夜を明かした事も度々でした。

その頃には、衣類も、食糧もすべて配給で農家で収穫した物も全部供出をしてから各家に届きました。毎日の食事は大きな鍋にさつまいも、南瓜、アズキ等を入れ、小麦粉をといってお玉杓子で鍋に落として、ダンゴ汁として家族みんなで仲良くいただきました。今思えばあの味は食材その物のうまみで、今の人には味わう事の出来ない味です。戦地では物資が不足して、お寺のつり鐘も供出し、また重油も不足で松の根を掘り出して、松根油として戦地に送られたのです。本当に色々な事があり、恐怖と不安の日が続きました。

また、田丸の三縁寺には、京都の部隊が滞在していたためか、上空からの爆撃を受け、隣の方が爆風のため犠牲になりました。また、田辺でも、外城田川に沿って艦載機が来襲して、射撃を受け、新田町でも犠牲が出ました。

そして二十年には、度重なる空襲を受け、遂に伊勢にも焼夷弾が落とされたのです。空襲が解除になってから、村人数人で小高い裏山に登り、東の空を見た時、本当に驚きで体がふるえました。空一面、真っ赤な火の海となり、各家々が真っ黒な姿で次々に崩れていくのを目にして涙しました。あの様子は今もはっきりと脳裏に焼きついて忘れる事はありません。

遂に終戦の日を迎えましたが、私は信じられませんでした。でも終戦と同時に田丸の町にも、米兵が来ました。初めて目にした時はとても怖そうで、何か悪戯をされないかと不安でした。ですが、思ったより親切で、やさしくて安堵しました。

終戦から、いく日か過ぎて落ち着きをとりのどした時、私は兄の無事の帰還を念じていましたが還る事はありませんでした。

冷酷非情、弱肉強食の国際社会の中で覇権主義に陥る事なく、国家の存立を図り、すすんで国益を確保していく、そんな術を真剣に考える時に今まさに来ているのではないのでしょうか。それが祖国の為に散華していった英霊に、せめてもの報いることになるのではなからうかと思えます。

平和な日本と戦時中

中西 弘 和 七十五歳・上田辺

私は昭和十五年四月に田丸尋常高等小学校へ入学しましたが、翌十六年十二月八日には大東亜戦争が勃発。二十年八月十五日まで続き、小学二年生より六年生の八月まで日本は戦争をしていました。軍事教練があつたり、運動場はさつまいも畑になったり、いろいろな事がありました。「生めや殖やせ」という国策のもと、どの家庭でも子供が五、六人いるのが普通でした。食糧増産の為に勤労奉仕といって、農家の農事手伝いにも行かされました。

体力増強のため鉄棒、倒立、水泳など強制的にやらされました。だからといって勉強の方もおろそかには出来ず、厳しくて居残り補習などもありました。みんな藁で作った草履を履き、雨の日は番傘に「下駄」でした。ゴムの長靴などは誰も履いておりませんでした。昭和十九年頃になるとB二十九による本土の爆撃が始まり、空襲警報が発令されると二列縦隊に

並んで城山にあった防空壕へ入りました。戦争末期になるとB二十九による空襲で、一トン爆弾が落とされました。田丸駅前の三縁寺には郷土防衛の兵隊さんが沢山いた為、爆撃にいい、すぐ東隣三十メートル位の所に落ちました。スパイがいるとの噂も聞きましたがよくあんな高い空から三十メートル位の誤差で正確に落とすんだと子供心に感心した記憶があります。

それに比べて日本の飛行機は小さいものでした。ある時、日本の戦闘機とB二十九が私の家の真上で空中戦をしました。日本の戦闘機は、竹を割ったようなパンパン音をたてていましたが、B二十九のは「ドンドン」と通り空気を重くひびかせるのを聞きました。「いつまでこんなことが続くのかなあ」といつも思ったことでした。

今の日本は、世界中で一番平和な国になったと思います。あまりにも平和な中につかっているため、それが当たり前のように思ってしまったって何を言っても、何をしても、自由だと自分の煩惱の赴くままに生きています。だから、不平不満による諍いや刑事事件等いろいろな事が起こるのではないのでしょうか。今一度平和の有り難さを謙虚にかみしめるよう心したいものであります。

兄の出征

山口久雄 八十四歳・上田辺

私は戦前戦中名古屋に居たり海軍に入隊していたりしたので故郷の当時の状況は殆ど分からない。そこで戦死した実兄の入隊から亡くなるまでの模様を記してみたい。

兄は徴兵検査で甲種合格昭和十五年四月現役の陸軍兵として久居に入隊する事となった。当時それは非常に名誉な事とされ皆様からお祝いをされた。

親戚からは、祝入営山口義雄君と大書きした幅一尺余りの長旗を贈られ、自身は祝出征と氏名を書き友人縁者に寄せ書きしてもらった日の丸の旗を国民服の上に斜めに掛け、千人針を腹に巻き、武運に強いといわれた興津の川上権現社で母がお百度を踏んで拝受したお守りをその中に入れ、勇ましい姿の出発である。(当日は母親心尽くしの赤飯を皆で祝い玄関で記念撮影行い組の人達に送られて田丸神社へ行く。此処で役場関係者を始め入隊者一同の奉告祭があり終わ

って町長を先頭に入隊者関係者田丸小学校児童等が行列を作って日の丸の小旗打ち振りながら、天に代わりて不義を打つ忠勇無双の我が兵は……と出征兵士を送る歌を高らかに合唱して田丸駅まで行進し汽車が来ると万歳万歳を唱和して送り出した。

兄はその後中支（今の中国）に渡り徐州の戦闘で負傷し、内地の陸軍病院で療養、手が一部不自由になったがこれ以上治らないので除隊になるとの事で久居まで帰った時、折しも昭和十八年冬新たなビルマ派遣軍の編成にぶつかり、下士官が不足だからと手が不自由ながら部隊の一員として再び戦地へ派遣される事となった。

私たち家族は、食料不足の中母手作りのお握りを携えて湯ノ山温泉近くにあった千種練兵場へ、本当に最後になる面会に行った。広場では多くの人達がむしろを広げて名残を惜しむ光景のひと時が繰り広げられ、涙乍らに帰ったのだった。やがてビルマインパール作戦は壮絶を極めた激しい戦いだったと聞いたので心配している内に終戦になり、案じていたら翌年昭和二十年六月十日仏印で戦病死したと公電が入り、中身が空っぽの白木の箱が帰ってきた。先年玉城町の追悼式の折戦没者の記念品の展示会があるというので亡兄の遺品を整理して意外な物を見つけた。それは千種で書いた遺書である。元気で別れた兄も決死の覚悟であったのかと涙を新たにしたら次第であった。

此処に遺書の写しを綴ってこの稿を終わりたい。

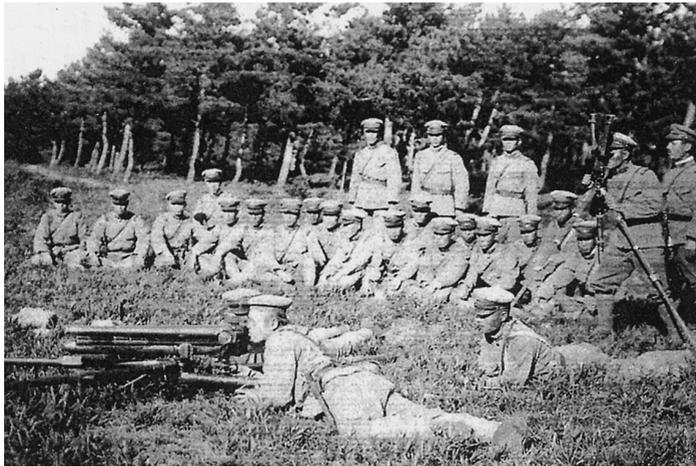
遺書

天皇陛下ノ為ニ
 尽スハ軍人ノ本分トスル
 所ナリ
 家ヲ捨テ身モ捨テテ国家ノ
 為ニ全力ヲ振ルツテ尽サン
 二十有余年孝トスル事ナク過ギタ
 ルヲ深く悲ム 爾後ノ御健ヲ祈ル

昭和十八年十二月二十八日

於千種廠舎

山口 義雄



当時の絵葉書から 歩兵砲の実弾射撃訓練（三重の戦争遺跡より）

私の戦争体験

松尾 春平 七十二歳・佐田

私が小学校二年生頃から、名誉の戦死をされた方々の合同村葬式が頻繁に行われた。五年、六年生は式典に参加していた。我が家の一番上の兄にも召集令状が届き、久居連隊へ入隊したので母と面会に行った記憶がある。その頃から南方の島々は米英連合軍に冠略され、戦況は悪化を辿っていた。やがて沖縄上陸と同時に本土の軍事基地や工場が次々と爆撃されていく。動員されていた学徒も大勢犠牲になったと聞いた。明野航空隊へも艦載機が爆撃に来た。学校の帰り道、空襲警報のサイレンが鳴ると頭上には敵機が襲来し、茶の木や柿の木の陰に逃げ込んで身を震わせ乍ら命が縮む思いをしたのを覚えている。

やがて都会も次々と空襲を受け、焼き尽くされていった。二十年早春名古屋爆撃の翌日、津・松阪・伊勢の街が火の海になった。当夜十時頃、警報発令間もなくB二十九が頭上に飛

んできた。同時に火の玉が光り、線香花火のように分散しながら伊勢の街へなだれ落ちた。焼夷弾と爆弾のものすごい地響きと同時に火柱と黒煙が立ち上り、街の夜空は真っ赤に染まった。私は怖くて防空壕で震えていた。後日尾上町の叔母さんが、腰を抜かしたような姿で涙乍らに恐ろしかった様子を家族みんなに訴えた。街は一面焼け野原となり、痛々しい焼死者が散在し、負傷者のうめき声が聞こえ、正に生き地獄になっていると言った。叔母の家も焼夷弾で焼き尽くされ悲しみに泣き崩れていた。私もみんなと貰い泣きをし、胸の奥がジンと痛んだのを覚えている。父は家族の命が助かっただけでも有り難いと思わないかんと言葉詰まらせ慰めていた。

その夏には広島・長崎に世界初の原子爆弾が投下された。その悲惨な状況は数日遅れて伝えられた。八月十五日、我が家は朝から防空壕を掘っていた。昼ラジオの特別放送があるとこのので隣の家へ集った。聞こえの悪い放送に真剣に耳を傾けて陛下の玉音放送を聞いた。日本はアメリカに負けたんや、もう壕はいらんぞと言われた。みんな胸を撫でおろした。

後日、兄も兵隊から帰ってきて数年ぶりに家族が揃った。敗戦後の混乱は物不足から泥棒や強盗など油断の出来ない物騒な日々がつづいた。衛生状態も悪く、蚤や虱が子供達にまで寄生した。赤痢や腸チフスが蔓延し集団防除を度々受けた。戦後数年すると代用品等も出回

り暮らしも落ち着いてきた。二十三年から教育制度が変わり、六三三制となり、新中学へ入学する。その後日本は目覚ましい勢いで復興と経済成長を積み重ね、東京オリンピック頃より物の使い捨て時代にまで変貌した。

僅か半世紀で国民は身も心も緩んでしまった。苦難の精神はすでに風化したのだろうか。この平和は戦塵の犠牲になられた方々のお陰であることを忘れてはならない。日本はこれからも世界平和構築の為貢献せねばならないと思う。また地球の未来の為、世界の国々と協調して総ての人々が幸福な暮らしが出来ることを祈りたい。



生き地獄の中を逃れてきた人々
(伊勢の空襲展より)

有田地区

玉音放送を聴いて

乾 寛 七十七歳・長更

昭和二十年七月二十九日未明、伊勢市の空襲で私達の学校は、奉安殿・校門の石柱・寄宿舎の煙突等を残して焼失しました。当時三年生の私達は授業もそこそこで、小銃を持つての軍事教練や勤労奉仕、それに離宮跡の丘にあった高射砲陣地の作業に出ていました。学校焼失のため八月の初めより、鈴鹿海軍航空隊の誘導路作りに動員されました。空襲で被災した者を除き二百余名が航空隊近くの加佐登小学校に泊まり、毎日シャベルやつるはしにモッコを持ち、茶園を起こしたり土運びをしました。五班に分かれ担任の先生の他に、軍曹、伍長が班長になり若い見習士官が総指揮をとっていました。炎天下の土方作業はきつかったので、勝つため国のためと一生懸命頑張りました。

三度の食事は大豆入りの玄米飯が飯盒に三分の一で、ラッキョの味噌汁に沢庵とお粗末でした。御飯の消化が悪いので朝の点呼の時には、下痢でズボンを濡らしている者がいつも数名いた事を覚えています。

こんな毎日が続く八月十五日の朝、班長より今日の昼重大放送があると知らされました。正午、全員集められ朝礼台の上のラジオから、天皇陛下の声を聴きました。雑音が多くわかりにくかったです。日本が負けたんだと感じました。その時後ろの方で

「日本は負けたんや」

と大きな声を出した者がいました。すると突然若い見習士官が大声で「日本が負けたと言った奴は出て来い切つてやる」

と軍刀を抜き凄いい形相でせまってきました。一時はどうなることかと思いましたが、先生達の取り成しで収まりました。私達のショック以上に負けた口惜しさと、馬鹿にされたと思つたのでしょうか。いつまでも忘れられない出来事です。

戦後六十余年続く平和は、尊い戦争犠牲者のお蔭です。私達はこの平和をいつまでも続くように、子孫に伝えなければならぬ義務があると思つています。

昭和二十年八月十五日

奥山 亘 七十一歳・長更

おふくろ二十八歳、私九歳、小学校三年生でした。

暑い昼下がりと記憶しています。

家にラジオがありました。有田小学校に駐留する兵隊さんが多勢来て庭に整列しました。隣の人達も暫くするとラジオから昭和天皇の玉音放送がありみんな崩れるように膝つき号泣していました。私も判らぬままおふくろと共に泣きました。

兵隊さんが帰ったあとおふくろが戦地（北支）の父さんこのこと（終戦）知るんやろかと又涙。

今や国民の七割を占める戦争を知らない皆様、論外とは思いますが、志半ばで逝ってしまった先輩達、辛酸をなめ続けた先人の日々苦闘に今一度思いを馳せ、今日の平和繁栄を御享

受下さい。

国やぶれて山河あり城春にして草木深し、今は前向きな私の心境です。



平和の誓いの樹
(ぼくらのことばで平和を語ろう・2より)

悲しい思い出

向井貞生 八十歳・長更

あれは昭和二十年春の事です。私は牛で田圃の耕作をしていました。すると突然、北の空から艦載機（P五十二）が低空で、田丸の町に向かって、機銃掃射を始めました。私は驚きました。それ以上に驚いた牛は、農具を付けたまま飛んで帰り家の厩に逃げ帰っていました。その場所から二百メートル位離れた所に日本の飛行機が撃墜され、若い航空兵がお亡くなりになりました。幾ら国の為とはいえ、大切に育てた息子に先立たれ、幾ら名誉の戦死といわれても、親の悲しみはいかばかりか察するに余りません。

私も兄の遺骨を九州まで引き取りに行きましたが、帰った時の母は、人前で涙も見せず、じっと耐えて気丈に振る舞っていた姿の痛々しかったことを思い出します。

今、思うとどんなに悲しかっただろうと心が痛みます。

悲惨で無残な戦争は二度とおこさない恒久平和の国である事を祈る私です。

必死で生きた戦中戦後

大西昭司 七十一歳・世古

「あの頃お母さんたちはみんな疲れていたんだ」山田洋次監督は言う。

たしかに今の生活には考えられない、戦中戦後の思い出したくない光景だ。

「赤紙が来た」

玄関口で母の震えるような指先を見つめていた。

「なんだろう赤紙って」

よくみると確かに赤い色の紙である。それは召集令状というものであることを、六歳のわたしには何の事か解るはずもない。まさしく否応なく戦争に駆り出される政府の命令書だ。その赤紙ひとつで一家の大黒柱が次々と戦場に発っていったのである。田丸駅の見送りは村中挙げて、はためく日の丸の旗のもと見送ったものだ。母親には哀しみの見送りであった

ろうが、小さなわたしには晴れがましくも歓呼の声に送られる父の姿の勇ましき姿であった。父が出征して一年、春も近い二月の末、外地派兵が決まったという知らせを受け、わたしは母と妹と福知山駐屯地に面会に行った。雪のちらつく寒い朝、家を出て京都で一泊。翌朝福知山連隊所に面会を申し込んだが寒い兵舎の門で一時間ほど待たされ、やっと父に会えることになった。父と一緒に食べたおにぎりの味と、父の腕の中の温もりをわたしは今も忘れない。それが最後の父との永遠の別れになった。

その頃、食べ物も玄関まで伸びた芋の蔓を食べ、山にいつては赤蛙をとってきて食べ、家で飼っていた兎の肉まで食べた。おやつというものは何ひとつなく、干し柿ぐらいのものであった。それから間もなく家の庭隅に掘った防空壕の中から、東の空が真っ赤に燃え上がる伊勢の大火を眺めることになった。六歳のわたしにはただ綺麗な火花をみるような感覚だった。震えながら不安のなかに右往左往する母や、隣近所の大人達の顔をおぼろげに覚えていく。毎日のように艦載機が飛び、やがてこの辺りも焼夷弾が雨のように落ちるのを子供心に恐ろしさを感じつつみていた。戦場に散っていった兵士達、私達は何十万もの犠牲者の上に、いまの繁栄があることを忘れてはならない。

詩（母の背中）

遺児と呼ばれて六十年余り
今年も終戦記念日が近づいてくる
当時八才の私は訳も分からず
真夏の太陽の照りつける庭に
ぼつんとたたずんでいた
まだ帰らぬ父を待ちながら
汗のしたたる母の背中を見つめていた
紺碧の空は妙に静か
庭の畑に西瓜の蔓が無尽に
伸びていた

幾日かして父の遺骨が届いた
隣近所の人達が集まっていた
白布に包まれた小さな木箱
八畳の間にぼつんと置かれた
「かあちゃんこれ何が入ってるの」
尋ねる私のそばで
母はただ黙って座っていた
焼けつくような太陽と戦火の去った
秋風が寂しく吹く頃であった

入隊から除隊まで

大西武司 八十二歳・世古

昭和二十年五月末に、突然召集令状（赤紙）が届き、静岡県三島野戦重砲東海第九連隊に入隊する事になり、六月初めに村の大勢の方に見送られ、歓呼の声をあとに出征をしました。

三島駅に着き駅前の旅館で一泊して、翌日部隊の門を潜りました。隊では新兵を祝つての赤飯が出たのかなと思ひ口に入れたら、赤く見えていたのはコーリヤンでバサバサの飯。喉に入らず残す者が多かったので次からは次第に量が減り、訓練等は厳しくなるしお腹はすくしで上官等の残飯を人目を盗んで食べたり、馬の手入れ時に豆粕を口にして空腹をしのぎました。空襲警報が出ると、夜中でも一番に馬をつれて箱根の山裾に避難させました。馬は部隊より大切にされました。訓練は御殿場口の方まで歩き、大砲の操作を受けたり、時には近くの山に横穴の壕を掘ったりしました。耐えられず脱走する者も出ました。八月の初めに鹿

児島への派遣命令があり夜三島駅を出発、ヘルメットもなく靴は足に合わない大きいのが割り当てられ途中の広島駅のホームに出ると線路はギンギラとかげろうが立つ暑い日でした。

駅前にカキ氷屋があり食べたのが忘れられません。下関関門トンネルを通り九州へ。九州でも鉄道がやられて歩いて歩いたりしながらやっと鹿児島駅に着きました。駅から見る太陽の色が何とも不思議な輝きをしていました。後になって六日に広島、九日に長崎に原爆が投下された事を聞き、自分達は投下の前の日に通過して来たことが分かり、驚きました。

自分達の駐屯地は畑の中の昔の隔離病棟でした。芋畑の中で色々と訓示を聞きましたが足元の芋を掘って食べた事を思い出します。屯舎の中の庭に井戸があり、飲みましたがボウフラがいる水で腹をこわし下痢腹痛に悩みました。薬もなく一日一日と辛抱していたら終戦になり病人だけは早く帰され月末に部隊を出ました。列車やトラックを乗り継ぎ、かろうじて田丸駅に降りる事が出来ました。歩いてようやく家に着きましたが夜中で母も弟もびっくりして声も出ない位喜んでくれました。兄二人は戦死していたので、生きて母に顔を見せる事が出来て本当に嬉しかったです。

今まで書いた事は、六十年余り前の事なので頭に残っている一部を書きました。

自分は生きて帰れましたが、戦死者や原子爆弾等で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りします。このような悲惨な事は二度とあってはならないと思っています。

怖かった戦争体験

大藪 礼子 七十二歳・世古

思えば昭和十九年、寒い冬の真夜中であった。何の前ぶれ警報もなくゴオゴオという不気味な爆音と共にアメリカ軍の飛行機が、カリコの山とその周辺の田畑に焼夷弾を落としていった。山は真っ赤に燃え上がり夜空を赤くそめた。その時、私の父はニューギニアの戦地に出征中…。祖母は

「エライ事になった、家も焼かれる」

と言いながら仏壇から仏像を取り出して胸に抱き、南無阿弥陀仏・ナムアマミダブツと何度も何度も念仏をとえながら泣いていた。私達は何が起こったのか分からずオロオロするばかり。母は幼い妹を抱き、みんなで防空壕へ急いで走り込んだ。その時の寒さと怖さで、私は歯がカチカチ体はブルブルブルとふるえがとまらなかった。防空壕の中で母がつぶや

いた「父さんがいたらなー」という言葉が今でも耳に聞こえてくる。

私は父の顔を覚えていない。支那事変、大東亜戦争と二度も戦地へ行った父の顔を覚える時間がなかったからだろうか。父のいなかった寂しさ、そして生活の苦しさ、みじめさに、あの頃の事をあまり思いだしたくないのだ。戦争は二度としないでほしいと願っている。

不幸の追い討ちをかけるように昭和二十年八月に父戦死という知らせがあり、母子で泣き通した事もあった。異国で死んだ父もどんな想いで逝ったのだろうか。妻と子供を残して…。町内の戦死された方々の尊い御精霊に、合掌。

学徒動員と夜の空襲

北岡 若子 七十六歳・世古

今の中学二年、当時高等小学二年生の時の事です。女子生徒は軍需工場（小俣町にある五十鈴製糸工場）に学徒動員としてかり出されました。その頃、伊勢線の跡地に線路だけが残されていました。その線路の上が近道なので毎日朝早くからただ一人で通ったものです。工場へと向かって歩いていると空襲警報のサイレンが鳴ってきます。敵機が通り過ぎるまで鉄橋の下にもぐって姿をかくしていたものです。その時の心細さは今も時々夢に見ます。敵機が見えなくなるのを見定めてから小走りで工場へと急いだものです。工場へ着き次第、みんなで朝の誓十項目を声を大にして誓ったものです。現場へ着き仕事にかかるのと又空襲です。機械を止めて男子生徒に掘ってもらった防空壕へとかけ込んだものです。解除になると又現場へとこの様な繰り返しをしていました。食べる物が無い時なのでまゆから糸を採った後、サナ

ギを取り出し、塩をまぶして乾燥機に入れて女工員達はおいしそうに食べておられた姿が目に見えます。そんな日々を終戦のその日まで続けていました。私達もいくらか国のお役に立ったのでしょうか。

終戦の年、昭和二十年五、六月のある夜の出来事です。夜中に伊勢市が燃えているとの情報が入り、私達は荷車に貴重品と食糧を積んで西の方角の山や池に向かって走って逃げたものです。東の空を見ると伊勢の方が真っ赤になっていました。東の方のたんぼのわらすきが焼夷弾の落下でまるで松明のようにたくさん燃えていました。よくぞ民家に落ちなかったと胸をなで下ろしました。こんな恐ろしい思いを次の世代の人達には味わわせる事のないようにと、戦争を経験した一老婆の切なる願いです。

戦争の記憶

北岡 卓雄 七十八歳・坂本

私が小学校の高学年の頃に戦争が始まりました。其の頃の平凡な暮らしも、やがて一、二年の間に物資が不足し、日用品や砂糖、肉、魚などの食料品が配給制となり、農家の米作りも深刻になっていきました。それに米は政府に出して農家でも食べられず、甘藷、麦、藪の茎などを食べて代用食として何でも食べたものです。

また学校から、勤労奉仕といって、戦争に行かれて家庭の担い手のない農家へ、手伝いに行く日が多くなり、勉強は疎かになるありさまでした。

その上空襲警報が鳴ると個々に防空壕に入り、一夜を明かす事が度々ありました。

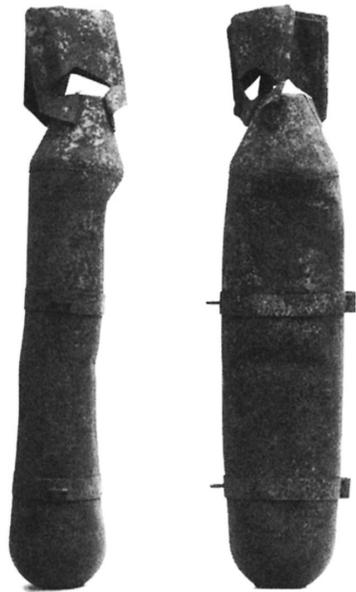
やがて終戦近くなると、我々の上空にもB二十九が飛びかうようになりました。そんなある夜、空襲警報が鳴るや間もなく東の空（伊勢）に焼夷弾が花火のように降り注ぎ、火の海

となり、伊勢は全焼しました。

なんと恐ろしい、この先どうなるかと生きた心地がしませんでした。

その上、昼間は学校の帰り道で、人影を見るや艦載機が急降下して激しく撃ってくるので、麦畑の中へとびこんだ記憶があります。

私達は、こんな逃げ惑う日々を送るような、いやな戦争は、二度と起こらないよう平和を願うばかりです。



上面

側面

M47焼夷爆弾（三重の戦争遺跡より）

戦争体験

増田 昭二 八十歳・坂本

戦争体験とは言え、私は軍隊生活はしていない。日本は本土での地上戦はなく、中国や南方の島々の戦だけであったが、B二十九と呼ばれる米軍機の爆撃が昭和十九年後半より始まった。二十年に入り連日のように「空襲警報」が鳴るようになるまで戦争の実感は少なかったが、B二十九が来ると各家の庭に掘られた防空壕に入った。B二十九の爆撃で日本の都市の大半が焼け野原になり果てた。

本土の戦はなかったが、中国や南方で戦死された人が、小さな地区でも数人、大きな地区では十人近い人が戦死された。戦争が拡大すると働く人と物資の不足がひどくなった。男の人は軍隊へかり出され、職場は老人や女の人に代わった。食料、衣料などの生活物資は統制され、家族数に応じて配られる切符がないと物が買えなかった。終わりには切符があっても品

物がなく買えなかった。都市の人は毎日の食料に困り、農家も産米の「供出割当」がきびしくとても腹一杯食べられなかった。学校も勉強は中止し、中学以上は工場へ勤労働員された。職業も自由はなくなり「徴用令」が来て自分の意志と関係なく工場へ送られた。戦局が切迫してくると、地区の山林に仮兵舎が建てられ、本土防衛隊としてかり集められた老兵が山に穴を掘っていた。

軍の報道は、日本が負けた戦は知らされなかったが、特攻隊の度重なる出撃など戦争が行きづまっている事は感じていた。しかし、日本が負けるとは思わなかった。二十年七月になると全体的に重苦しい感じが深まっていった。一体此の戦争はどうなるのだろうかと思った。広島、長崎の原爆もくわしく知らされなかった。八月十五日、突然天皇による終戦の放送があった。正直言ってほっとした。現在のように、何でも自由で有り余った生活をしている人達は、これをどのように読んでもらえるだろうか。

私の戦争体験

萩 田 賢 一 七十三歳・坂本

小学校入学と戦争の始まりとが一緒であった。学校も国民学校と呼ぶようになった。日が進むにつれて、毎日の生活にも物資が不足し、配給で購入するようになった。一年生、二年生の頃は戦勝の報せを耳にしたが、三年生頃になると警戒警報の言葉やサイレンの音が聞かれるようになった。三年生の終わり頃には通学も白いものは着る事はゆるされず防空頭きんをかぶつての通学となった。さらにもう少しすると敵機B二十九の飛来が段々多くなってきた。銀色に輝く敵機をながめ乍ら、稲ワラや土溝に身を隠し乍ら下校したものだ。

敵機の来襲は日を追う毎に激しくなり、毎日のように空襲警報のサイレンが鳴り響き、時々爆撃音が聞こえるようになってきた。

小学校四年生の初夏。田植えの終わった田んぼの緑が濃くなってきた頃であったと思う。

忘れられないのは、伊勢市（当時は宇治山田市であった）が夜間空襲にあい、東の空を真っ赤に焦がす恐ろしい様子を体験する事になった。この時私は、近所の老人達数人を連れて西の山へ逃げる案内役をした事を今も覚えていて、恐ろしい一夜が過ぎて、明るんだ田んぼの稲には宇治山田市の焼けた灰が一面に散らばっていた。焼夷弾による空襲により、この時宇治山田市では多くの人々が死に、怪我人が多く出た事は今も伊勢市の資料に残っている。

国民学校一年生から四年生まで厳しい戦争時代に過ごした戦争体験の一端である。

戦争の記憶

萩田 ちよ 八十歳・坂本

私は明和町の新茶屋に生まれました。今でも心に残る一番の記憶は、終戦間際の昭和二十一年夏、伊勢が空襲にあったときのことです。伊勢までは随分離れていますが、東の夜空に上がった火の手はどんどん大きくなり、遮るものが何もない平野なので、火の海は二、三百メートル近くまで迫ってきているように見え、身がすぐんでしまいました。明野駅に近い人たちも、街道筋を西へ上へと荷物を負いねて避難していきます。私たちも皆と一緒に少しでも遠くへ離れようと、とりあえず仏さんだけを風呂敷に包んで下有爾まで逃げました。

伊勢の空襲の後、新茶屋は飛行場のある明野に近いので、今度は自分たちの所がやられる。家を焼かれ、村が火の海になったら生きてはいけない。そんな思いから着物や大事な物を田辺の親戚まで預けに行ったことを覚えています。

二番目も逃げた記憶です。飛行場に近いこともあってか、空襲警報が出て防空壕に逃げることもたびたびありました。B二十九は高いところを飛んでいくので昼間は壕の入り口で飛行機雲を見ていることもありましたが。艦載機は低いところへ下りてきて逃げる人を追っかけて撃ってくるので怖かったです。近くの一歳下の娘さんは壕の近くまで逃げてきたときに頬を撃たれて大怪我をしました。飛行場から迎撃する飛行機はありません。いつも逃げてばかりでした。灯火管制でガラスにも紙を貼って光が漏れないようにしてあったので、日が暮れると外は真っ暗になります。いつまた空襲警報の音が聞こえてくるのかと心配で、夜は、ただただ「怖い」の一点でした。

三番目の記憶は食べ物のことです。戦後は食べるものが十分にありませんでした。駅に近い私の家にも買い出しの人がたくさん来しました。名古屋方面から来たおじいさんは、「お米よりお腹につむサツマイモがいい、尻尾でもよいから分けて欲しい。お金があってもいかん世になった。これと換えてください」

と聞きなれない「うなモ」という言い方で、泣きながら着物と換えていかれました。

終戦直後には、明野にも進駐軍がやってくるというので、若い娘たちは心配で「どうして死のう」

「死ぬときは皆一緒に死のうな」
などと話しあったこともありましたが。
私たちが受けた「怖い思い」はこれからの人たちには二度と味わってもらいたくないと思
っています。



空襲に遭った伊勢市内の様子（伊勢の空襲展より）

呉の思い出

幾田琢磨 八十四歳・日向

戦時中の事であまりはつきりとは覚えていませんが、昭和十五年十二月に徴用令によって呉の海軍工廠へ行く事になり、そこで軍艦の電気工事をする事になりました。其の時一日の給料は当時七十五銭でした。其所で私はしっかりとがんばりました。一年位過ぎた頃、人からロツパというアダ名で何でもロツパに言えといわれていた戸川組長の補助員となりました。そうなるのとキリキリまいの忙しさ。組員の出欠記録や弁当、洗たく、作業服の修理や明日休ませてくださいなどの上司の許可もらい等大変でした。

ある日戦艦大和へ二週間位行った事がありますがその大和の雄大な姿には全くおどろきませんでした。分かりやすく言えばそれこそ日本の全財産を一ヶ所に集めたという感じです。

しかし、今思えば戦争位無残な事はありません。この戦争で多くの戦死者や犠牲者が出て

おります。

心よりその方々のめい福をお祈りいたします。

子供のころ

中西 清 七十五歳・日向

私が小学校三年生の時、尋常小学校から国民学校に改名されました。昭和十六年、日本は太平洋戦争に突入し、国民はみじめで貧しい生活を強いられました。なんとと言っても食料不足と物のない状況でした。家庭では灯火管制がしかれ、電球に黒い布をつけて明かりが外に漏れないようにし、その下で本を読んだのを覚えています。また戦争に必要な武器や弾薬を作るために、各家庭は鍋や火鉢など金属製の物を供出し、湯田を通っていた電車の線路まではずされました。五年生の頃、湯田の養蚕農家へ行き、よく桑の木の皮をむきました。それを乾かして学校へ持っていきましたが、軍服や学生服の原料であったのです。

近くに明野飛行場があり、林の中に戦闘機が隠されているのを見ました。学校では木製で実物大の模型飛行機が作られ、上級生達が明野の飛行場へ運んだこともありました。模型を

並べて、上空からは飛行機が、まだ沢山あるように見せかけたのでした。また、私の地区の倉庫の軒下に、馬が三頭飼われていて兵隊が世話をしていました。ある日、その馬に乗せてもらった記憶があります。

昭和十九年頃からB二十九による本土空襲が始まりました。紀伊半島を目標にしてやってくるB二十九が、上空を通るたびに空襲警報となります。学校で本を風呂敷に包んで腰に結び、逃げ帰ったことは数え切れません。そのたびに恐る恐る空を見上げ、なんと大きな飛行機なんだろうとおびえていました。名古屋周辺の都市が爆撃されると、こんどは目標が南の方へ移動しました。津市が大空襲で焼かれたかと思うと、その夜のうちに伊勢が火の海となりました。その光景は恐ろしくて、今も目に焼きついています。翌日、焼けた雑誌が七キロも離れた私の家の近くまで飛んできているのを見て驚きました。

小学校六年生の時に終戦となりました。伊勢へ出かけた時、焼け跡を目のあたりにし、なんと恐ろしいことだろうと思いました。こんな悲惨な戦争は絶対にやってはいけません。私達のような戦争遺児を二度と作ってはいけません。いまの平和を後世に伝えていく事が大切ではないかと思えます。

フィリピンを訪問して

見 並 健 一 六十八歳・上玉川

私は、平成十八年十一月にフィリピン・ルソン島サリナスの現地へ、慰霊巡拝させて頂きました。長年の念願でした父の眠るマウンテン州サリナスの地で、追悼の誠を捧げ、平和への誓いを新たにすることが出来ました。

「お父さん遅くなりましたが、やっと来ましたよ…私の声が聞こえますか…家族みんなが待っています。一緒に帰りましょう…」

と、いつまでも叫び続け、溢れる涙で声にならなかった慰霊追悼。…そして、現地の方々や学校訪問での子ども達との交流など、ふれあいの中で「命の大切さと平和の尊さ」を、改めて心に深く感じずにはいられない旅でした。

その時の、涙とともに絶句・絶句しました私の「追悼の言葉」です。

戦争を知らない世代の皆さんに戦争を二度と繰り返さないために、後世に、正しく伝える道の一つの言葉として頂ければ幸いです。

追悼の言葉（現地・原文）

「お父さん・来ました！」…この度、日本遺族会のご企画頂いた「フィリピン慰霊友好親善訪問団」の一員として今・貴方が亡くなられた、このフィリピン・サリナスの地で、お父さんと・多くの戦没者方々の霊に、追悼の言葉を申し上げ・献花する機会を頂きましたことを、大変有り難く、心から深く感謝致しております。

今思うと、昭和19年1月応召されて、愛しい家族の、母と・私が3歳・妹が10ヶ月の私たちを残して戦地へ向われる心境は、お互いに淋しく・悲しみを絶する、胸が張り裂ける気持ちだった事でしょう。

「出征の日」には、まだ小さかった私は・これが最後の別れとも知らず、家から走って門を出て、無邪気に手を振り見送ったと母から聞いております。

「お父さん」と呼んだ記憶や、抱かれた事・遊んでもらった事など、何一つ無いのが、とても・とても悲しく思います。今日初めて「お父さん！」と呼ばせて頂きます。

お父さんの姿は写真でしか想像することが出来ません。出征の時に家族全員で撮った・軍服姿の写真で覚えている位です。

そして、壁に掛けられた凛々しい顔写真・その写真で、家族みんなが元氣付けられ励まされて、無事を祈る日々…そんな或る日…「昭和20年6月7日この地…」フィリピン北部ルソン島マウンテン州サリナス方面に於いて死亡」の悲しくも・辛い知らせが届きました。

遺品を持ち帰り頂いた郷土の戦友・加納軍曹の報告に、貴方の「昼は敵を避け、夜は暗黒の中の橋梁架設技術指導作業・また強性マラリヤの高熱・砲弾の深い傷での活躍」本当に辛かったです。それからというものは、働き手も無く、母と祖母・曾祖母の苦勞は、並大抵ではありませんでした。男手の無い我が家・いつも仕事を気に掛ける子ども時代… 私たち兄妹も、母を助けなければと、農作業など一生懸命手伝ったものです。

「貴方が天から見守ってくれている」と言い、農業をする「強靱な母」でした。…そ

の母も、随分苦勞をしましたが、晩年は、大好きな「日本舞踊」を、趣味にして・踊り手としてシツカリと楽しんでいました。

母は、平成5年10月21日・まるで釣る瓶を落とす様に、お父さんの許へ旅立って行きました。

私は66歳になりました。昭和34年4月から町名が変わりました「玉城町役場」に、奉職して47年目・現在も町行政の仕事をさせて頂いております。家族に恵まれ、孫6人に囲まれて楽しい日々を送っております。これも全て父上のお蔭です。

最後に、父上並びに、戦死されました皆様方のご冥福を心からお祈り申し上げますと共に、今一度・私達は、国在り様・世界との共存、平和・安寧などに思いを深め、この世から人間同士の醜い争いが、一日も早く無くなる事を心から祈念し、又行動していく事を誓い、私と、家族の追悼の言葉とさせて頂きます。終わりに、何時もお母さんと歌った「里の秋」を献歌させて頂きます。（「里の秋」独唱…）

お父さん、どうか・何時までも・安らかにお眠りください。

平成18年11月26日　フィリピン・サリナスにて・長男　健一　　拝

回顧

見並米子　七十二歳・玉川

今日もB二十九が高空を飛んでいます。学校で突然サイレンが警戒警報を知らせます。一斉下校の準備です。集団下校といっても通学道でなく、農道を各部落ごとに分散して行きました。体を小さくして空から見えないように、飛行機をよけながら帰路についたものです。高等科のお兄姉さん方は勤勞奉仕に行かれ、学校は五、六年生が主体となり、登下校の世話をまかされ、木陰や山道を選んで帰ったものです。

家では、警報が出ると、私はバスケットの中に仏像とご先祖様の位牌を入れられ、母に「これはあなたの役目よ」

と手渡されたのを大事に持ち、小さな妹とお祖母さんと三人で裏山の防空壕へ。父は防衛隊にかけつけ、母と叔母は家を守るようにとそれぞれ分担があったのです。

ある夜、低空爆音に驚き、こわごわ壕より出て高所から眺めると、飛行機から焼夷弾がばらばらとまるで花火をまき散らしたように落とされました。伊勢の空へ赤い炎の舞い上がるのを目にした恐怖が忘れられません。その夜は「人々は無事だった」のか母といろいろ話をしたものです。

その後、叔父の戦死の公報が入り、祖母、父始め家族みんなが悲しみにくれたものです。遺品を見ては涙！ どんなにか苦しかっただろうにと。

戦争は、戦地も内地も、大変な被害、心の痛手を残す悲惨なものです。みんな仲良く、平和で住みやすい世界になりますようにと祈るばかりです。

戦争の思い出

川井 昭 七十八歳・岡村

太平洋戦争は、昭和十八年頃より激化し、食料や物のない時代に入りました。空き地を耕して食料を増産することに一生懸命でした。運動場までもが畑となり、サツマイモが植えられました。松の根っこで油を取り木炭自動車を動かす燃料にしました。

昭和二十年三月十八日夜のこと。北の空が赤く燃え上がり何事かを見ると現在の旧二十三号道路の辺りに焼夷弾が落ちてきました。ひゅひゅと音を立て、北の空が赤く染まり、世古から井倉までの間が火の海になったのを思い出します。昔はこの地に伊勢電鉄の電車が通っていて、線路の横に稲ワラのすすきが沢山あったので、よけいに火が燃え広がったのでした。

私の感では、線路を飛行場の滑走路と間違えてアメリカ軍が攻撃してきたのではないかと思っています。その頃は仕事も手につかず防空壕掘りの毎日でした。

戦争とは何と空しいものでしょうか。みんなの願いとして、二度と起こしてはなりません。戦争のない世界にしたいと思います。



コンクリート製防空壕（三重の戦争遺跡より）



学校の校庭や屋上など開いている場所はすべて畑に変わり野菜が作られていた（毎日新聞社）

終戦前後のこと

小林 克巳 七十六歳・岡村

昭和十九年秋頃、有田小学校に陸軍が一部駐留していた。小学校の門の東側にテントを張って、炊事班が、めしやみそ汁を炊いていたのを覚えている。当時、小学校六年生の私たちも、軍の手伝いに駆り出された。有田村の東新村の西の山にざん壕を掘っていた。その手伝いに東新村へ引率され、兵隊さんから仕事の要領を教わり、その壕の内側を支える木材を運ぶ仕事である。今で言うバタ角（三寸角の木材）を二人して一本を担いで現場まで運んだものだ。

昭和二十年、私は県立宇治山田中学の一年生の時、五月頃、「勤労奉仕」として当時の田丸町へ来た。佐田の山の薪作りである。当時は、今の玉城病院の前から、JRの線路までの西側と、JRの線路から岡出区に至る道の両側は、全て山林であった。その山林を国策により

畑にすべく、朝鮮人（当時は、半島人と言っていた）が星二つの陸軍一等兵の監視のもと、青色の作業衣を着て、開墾作業をしていた。私たち中学生は、その山で切り倒した松や柵の木を、割木にする作業の手伝いである。私は割った木を縄で束ねる作業をしていたことを、今でもハッキリ覚えている。

昭和二十年七月二十九日の夜の山田の空襲について。その日午後八時頃津市が空襲を受けた。村の上空を敵のB二十九爆撃機が、北へ北へと飛んでいくのがよく見えた。岡村は観音堂が高い丘の上にあるので、そこに登ると津市の空が、真っ赤にかがやいているのがよく解った。半時間ほどして、飛行機の音も止み、静かになったので、家に戻り、もうそろそろ寝ようかと思っていた矢先、今度は、パンパンという破裂するような音がしたので、急いで、家中のみんなで観音堂に登った。今度は山田が空襲だ。焼夷弾で空が明るく、外宮さんの森がハッキリと見えた。山田が空襲だと、みんなが騒ぎ出した。私たちは、声をあげるばかりで何することも出来ず、山田の親戚を心配する人もいた。私の家は、当時、私の姉が、宇治山田高等女学校の四年生に在学中で「学徒動員」令で山田の東洋紡績に働きに出されていたが、その日に限って、何故か理由は知らなかったが、家に帰ってきていたので、家内中が、よかった、よかったと安堵した。

学校は夏休み中であつたが、二日後の八月一日、山中が全焼したとの報が伝わってきた。田丸の上級生の方々と、歩いて学校を見に行つた。が度会橋に警察官がいて、

「山田に親戚があるのか」

と尋ねられ、通してもらえなかつたので、下の橋を渡って御菌村の高向を通り、山中まで行つた。当時の山中は田圃の中にあつたが、全焼であつた。帰りは山田の街の中を通り帰つたが、被災して二日も経っていたのに、未だ倒れた家の下でクスクスと火があつたのを記憶している。また街の中に大変異臭が漂っていた。後日判つた事だが、便所が焼けた臭いだけだそう。夏休みの最中であつたが、八月十日頃山中の焼け跡の片付けに全校生徒ではなかつたが、召集がかつた。弁当と水筒を持って登校した。焼け跡の瓦などの片付けをした。その時、生徒たちの中で噂話として、「この間、広島に新型爆弾が落ちて、大変多くの人が死んだそう」ということを聞いた。当時は、新聞やラジオも国政に不利な事は一切報道しない時代であつたので、これが原子爆弾であつたとは、終戦後、大分経ってから知つた事である。

八月十五日、終戦となり、八月二十一日、夏休みが終わり、私たち一年生は、河崎の有緝小学校の一部を借りての新学期となつた。

新学期の校長の話に

「いずれ、この山田にも進駐軍（アメリカ兵）が来るだろうが、君たちは、アメリカ兵を見ても、二階から見おろすような事はするな、また街の中でアメリカ兵に会っても、指さすような事はするな」

とアメリカ兵への配慮の訓示であった。

昨日まで「鬼畜米英」という教育を受けていた私たち少年には、「何故か」と疑念が湧き「何が善で、何が悪か」の基準さえ解せない一つの時期であった。

昭和二十年という年は、八月十五日をもって、政治は、軍国主義から民主主義へ、経済は統制経済から自由経済へと、一瞬のうちに変貌した年であった。

各街にヤミ市場が出来て、伊勢市（当時の山田）にも、山田駅から宮後の踏切までの間に、沢山の露店のヤミ市が出来て、盛況であった。

予科練の思い出

山口 静雄 八十歳・久保

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が起きた当時、私は小学校高等科一年生だった。農家の長男に生まれ農業を引き継がなければならないということから、旧制中学校も祖父の反対で受験できなかった。

高等科二年生になって担任の先生から、海軍の予科練を受験して国の為に働いたらと勧められた。当時国の政策もあり若い男子には予科練は憧れのまどであった。家族は国家の為に尽くすことなので賛成してくれた。適性検査に合格し、三重海軍航空隊に入隊すべし、との通知書を受領した。

予科練に合格したことを先生始め小学校全員が喜んでくれて大変うれしかった。有田小学校の名誉の為に頑張ることを心にかたく誓う。まちに待った入隊の日が来た。昭和十八年十

二月一日、家族、親戚、村民の方々、青年団、有田小学校児童全員に見送られ田丸駅を出発した。

その日、三重海軍航空隊に入隊したのは、全国から二千名余り。海軍第二十一期飛行予科練習生として、教官、先輩指導員のもとで航空兵の猛訓練がはじまる。

入隊して約一ヶ月は軍人としての基礎教育、いわゆる躰教育の期間である。この期間には言語動作を始め日常生活のすべてを軍人らしく躰けられるのである。

朝、ラッパを合図に起床するとまず海軍特有のハンモック（吊床）の括り方からはじまる。洗面を終わると練兵場に駆けつけて整列。全員海軍体操、終わって朝の掃除、朝食である。主食は麦飯で、発育盛りというので普通の兵隊より飯の量も一割五分位多い。しかし、鋭敏なる神経の持ち主である空の少年兵たちにとって、食事ときにはやっぱり空腹をおぼえる。

予科練の編制は、二十人内外が集まって班を編制し、班長には下士官が当たる。十班が集まって一個分隊を編制し、これを統率するのが大尉か中尉の分隊長であった。分隊長の補佐として少尉か兵曹長の分隊士がいる。尚、指導配置に当たる士官を教官、下士官を教員とよんだ。

一日の日課は起床から就寝まできっちり組まれていて、普通学や軍事学などの授業は午前、

午後の座学は二時限で、引き続き、別科と呼ばれる体育が行われた。武技（柔道・剣道）や球技、水泳などが時に応じて行われた。

予習復習をする温習時間は、朝は授業前に約三十分、夜は就寝前に約二時間あって、これは授業と同じく講堂（普通教室のこと）で行われた。

一日の日課は起床から就寝まできっちり組まれていて、くつろぐひまはほとんどない。比較的自由な時間のあるのは夕食後から温習時間までの間で、湯に入ったり、洗濯をしたり、身辺の整理をしたり、音信を認めたりするのはこの時間であった。

入隊しての二ヶ月は小銃を肩にしての軍事訓練（陸戦）は、事業服に白い脚絆姿で行う。これは躰教育の基本である。戦いを学ぶのではなく、これによって軍人としての姿勢、敬礼の仕方、号令の練習、行進、折敷、突撃、捧げ銃など、ごく簡単なことを正確にできるよう訓練するのである。夕食後はモールス信号の練習等休む暇なし、やっと足並みも揃うようになり、練兵場で隊指令の第一期査閲を受けて全員伊勢神宮に参拝。

査閲後は午前中、普通学（英語、幾何、科学等）午後は軍事学、剣道、柔道、マラソン、カッター、水泳等で寒中水泳の厳しさを体験する。海に不時着した際一定時間浮遊していることができる訓練で、全員が輪になり分隊士の音頭で「うみゆかば…」を合唱しての立ち泳ぎ。

その外民家に宿泊しての野外演習等の厳しい訓練を受けたが、民家に四、五名宿泊した思い出はたのしかった。

この頃に一番厳しく教育されたのは、誰にも負けてはいけない、特に団体の競争に負けない軍人精神の涵養に励んだ。苦しい中にも楽しみがあった。

この頃、戦局は厳しくなり昭和十九年十一月末に前期の二十期生は飛行機とは無縁の小型魚雷艇要員（特攻隊）として出陣した。私たち二十一期生でも体力、知力に優れた者十数名は特攻隊員として出撃している。

その頃の昭和二十年四月には事実上教育は中止され、残された分隊員二百余名は静岡県藤枝海軍航空基地に移動する。この基地は零戦の特攻基地で数多く戦闘機が松林に温存されており、この機を守るための擬装工作（松枝等で覆う）及び機体整備の補助要員として配置される。出撃する飛行機はみな片道飛行で、沖縄戦に散華したものと推察された。基地の戦闘機も少なくなり、七月には三重海軍航空隊に帰隊する。

移動はすべて極秘で列車の窓は閉められ外の様子を見ることはできなかったが時折デッキに出て県下の主要都市を見るにほとんど空襲で廃墟と化しており戦局の厳しさを感じた。

帰隊後は、すでに本土決戦のためとして海岸松林内に設けられた機銃発射台の射手の訓練

もうけた。

昭和二十年八月十日、教育中止中の儘第十九突撃隊付を命ず、との命により班内の十数名が列車に乗り、貨物自動車と船を乗り継いで着いたところは、度会郡南海村大字礪浦の小学校が隊舎となり命令を待つ。

私たちは子供の頃から日本は神国であり苦難の時は神風が吹き戦いには絶対負けないう教育を受けてきたが、突撃隊付を命ぜられてから五日後、昭和二十年八月十五日の終戦を迎える。

今、三重海軍航空隊跡地には、戦没者の慰霊施設、若桜霊園、各期毎の記念碑が建立されており、刻まれている自分の名前を手触りすりに往時を偲ぶことができる。

今思うと、終戦が半年遅れていたら私の家族も遺族会の一員になっていただろう。



上：アメリカの艦船で埋め尽くされた本島の海岸
下：占領した飛行場を守るための、米軍のすさまじい対空砲火
(伊勢の空襲展より)

下外城田地区

兵隊さんの思い出

中井文子 七十歳・宮古

私は小学校二年生の時、城田小学校の近くに住んでいました。校庭で兵隊さんが十人位横に並べられ、バシッバシッバシッと顔をなぐられていました。私はドキドキしながら毎日見ていました。家へ帰るとはあちゃんが大きな釜でじゃがいもをたいてザルに揚げていました。突然、兵隊さんが三人勝手口から入ってきて、あわててじゃがいもを食べて走って帰って行きました。私は五人兄弟でいつも腹をすかしていました。腹一パイ食べられない時代でした。肥満児は一人もいませんでした。

富男おじさんはフリッピンで、けいぞうおじさんは沖縄で戦死しました。祖母は、自分の息子のことを思いながら、じゃがいもやさつまいもをふかして兵隊さんにたべさせていたのだと思います。兵隊さんの中に京都から来た大学生の田中さんがいました。田中さんは栄

養失調で顔はあお白くメガネをかけていて笑うと歯ぐきから血がにじんでいました。

顔はなぐられるのではれていました。

戦争が終わってしばらくしてから田中さんは京都からわざわざ両親といっしょに私の家まで来てくれました。泣いたり笑ったりしながら、うれしそうに長話をして帰っていかれました。あれから六十余年の年月が流れました。今、田中さんはどんなおじいさんになっていくのだろうか、一度おあいして話したいなあ…と時々思い出しております。

戦時中のこと

中井 かづへ 八十六歳・宮古

戦後六十年余りもたった今、思い出してみますと、いろんなことが有りました。あの空をとぶ飛行機の音が聞こえてきますと、昼間家にいる時は防空壕に入って身を守り、夜は電気に黒いカバーをかけたりました。農作業に出ている時には、山の木陰に隠れ、田にいる時は溝に入って身を守り、音の遠ざかるのを待ちました。そして、町の人々は田舎の親類の家や知り合いの家を頼って疎開に来てみえましたが、大変な生活だったと思います。私の家は農業でしたので、親類の方や近所の方、そして村の方々には大変お世話になることが出来ました。家族皆で助け合い、おじいさんおばあさんも元気にして下さいました。お陰さまで今も農業を続けさせてもらっております。

青春の思い出

松田 喜八郎 七十九歳・宮古

灼熱の太陽の下、練習機のばく音を聞きながら汗を流し、スコップで地ならしをした。朝鮮の労働者と共に、飛行場で毎日学徒動員員として奉仕作業に専念。時に大東亜戦争も風雲急を告げる昭和十九年真夏のことである。兄は、支那事変初期に北支山西省において二十三歳を最後に戦死。時の中隊長より仔細な内容の軍事郵便が届いたのは小学四年生の時であった。兄が戦死する二ヶ月前に美しい字で一枚のハガキが自分宛に届いた。『ふる里の父母に育てられた恩は忘れてはいない。弟である君に両親を頼む。体を大切に。そして一人前の人間に努力して姉妹と共に家を守ってくれ。今現地は雨天続きた。』これが兄の最終の便りであった。次兄は南支より南海方面を転々とし、終戦一年後復員、マラリヤ病にかかり二十七歳にて此の世を去った。

自分は松田家の末っ子に生まれ、当時の軍国の思想にあこがれ、甲種飛行予科練習生として家を出たのが十六歳。厚木に入隊し軍事訓練に励んだ。十一月の末になると北の空には霊峰富士山には白雪、冷たい季節風が相模野荒野に吹き荒れ故郷の父母や姉妹の身を案じながら寒風と砂ほこりの中、毎日訓練が続いた。その後、四国詫間水上飛行場に移され、昭和二十年四月には大分県宇佐航空基地に配属される。初めての関門トンネルを過ぎ宇佐へ入る頃には、戦運はすでに連合国側に有利、本土上陸の噂が流れ、南方の島々は玉砕の報を耳にした。

基地についた途端、あちこちで時限ばくだんが破裂し、飛行場には一機も姿がなく格納庫は空っぽであった。自分達一行は山深い谷間の集落の中腹にある仮兵舎に入った。隧道トネルが幾つか掘られ、中には魚雷が格納されていた。早暁の点呼と共に基地に出て、天山艦攻機に魚雷を登載し、先輩特攻隊員の出撃の見送りと共に別れを惜しんだ。

その後しばらくして、玉音を耳にして終戦の日を迎えた。想えば、あの若い青春を戦争の為に南の空で華と散っていった先輩雄姿のこと。更には多くの犠牲になられた英霊があればこそ今の日本国の平和がある。後世まで戦争でなくなられた人々の供養を忘れてはならない。

兵隊の体験

松尾 勝三郎 八十八歳・岡出

農家の三男として育てられた私は、学校を卒業するとすぐに名古屋の軍需工場で働きました。当時は二十歳になると徴兵検査があり昭和十七年に大竹海兵団に入団しました。三ヶ月の新兵教育の後、呉の海兵隊に配属になり、空母瑞鶴に乗り込み後部の機銃班の任務に付きしました。瑞鶴は四万五千トン、八十八機を搭載し乗員は二千二百名という大型船。

一時体調を崩して病院に入りましたが、半年後呉の海兵隊に復帰した頃から戦局は厳しくなりました。艦載機の襲来が度々あり、我が艦船からの砲撃で、空一面に真っ黒な煙がたちこめ、激しい交戦を何度も体験しました。軍港内では、魚雷被爆の修理を急ぐ六万八千トンの戦艦大和、空母への改装を進める戦艦伊勢の勇姿を見ながら、陸上での激務に励みました。二十年四月には、大和を主に十隻の船団が特別攻撃のため出撃の途につきましたが、二日

後に七千余の将兵と共に東支那海に沈められてしまいました。サイパンやグアムの島々が連合軍に支配されると、大型機の編隊による爆撃に遭い、各所の施設はほぼ不能になり呉港外に係留中の艦船は空襲で壊滅状態になってしまいました。

八月六日の朝、警報が出て一時間後のこと、閃光と爆風を感じ、山並みの向こうに立ち上るきのこ雲は四十キロ先の広島にある軍の弾薬庫の重大事故との情報。次々入る情報で混乱を極め、被爆地への救援物資に大わらわでした。しばらくして終戦を迎え、命拾いをした思いでした。

復員後、幸いにして農業に従事し、円満な営みを送ることが出来ましたが、軍隊の激務と戦争による人々の犠牲の大きさを悲惨さは忘れることはできません。何としてもこの平和が続きますよう祈ります。

大切な人たちに

松尾 三重子 七十四歳・岡出

語りつごう戦争の苦しみや悲しみを若い人達に！ この企画に余り似つかわしくない私ですが参加させていただきます。

私は伊勢市で育ち、地元の皆さんの戦時下のご苦労にはとても及びませんが、小学二年の十二月の開戦から終戦への四年間、戦争なんかどうして避けられないのだろうかとその恐ろしさによく思ったものでした。

お米や衣類は統制による配給で乏しく、おかずの愚痴なんてとても言えず、「欲しがりません、勝つまでは」のご時世。下校の途中、警報となり、艦載機の飛来にあい、村の方に匿ってもらった恐ろしい思い出は忘れられません。終戦後はただだ「ひもじい」日々でした。十一歳上の兄がビルマ戦線へ徴集されましたが、お身内の方を出征で送られたご家族はさぞ

かし大変だったと思います。

それでも厳しかった学校教育のお蔭で、両親を尊ぶ事、人の道を外さない事等、それなりに身につけることが出来ました。皆と気持ちを合わせる事、助け合いの心をしっかり教わりました。

いくら自由な社会になっても、人間は一人では生きられないもの、お互いを信頼し温かい心で人に接する事がまず大切だと思います。

人権を尊重し、自分を大切にすることも、貴重な理念ですが多くの皆さんと豊かさを分かちあい笑いあえる社会を目指そうではありませんか。お若い皆さんのご活躍を祈って止みません。

父の戦死

松田宗一 七十三歳・岡出

勢力争いの絶えない世の中で、資源に乏しい我が国は、軍事を高めて世界中からの風当たりが強くなり、戦争を始めてしまった。お国の一大事と召集を受けた者は、否応なしに戦場へかり出された。留守家族は、戦いが終わるまで、只々無事に帰ってくることを祈るのみであった。

戦況が悪化してくると物資が不足し、私達の生活はしだいに苦しくなった。食料や衣類など生活必需品は配給制度となって制限され、食糧増産が叫ばれた。人手による労働で作った農産物は強制的に供出しなければならなかった。また追い討ちをかけるように東南海地震に襲われますます不安な日々が続いた。

父にも三度目の召集がきた。任地は太平洋の果てニューギニア。奥へ奥へと転進を続けて

いるなかばで四千五百名余りの将兵を消耗したとの情報を聞き心配になる。年老いた両親は、父が元気に帰ってくることを祈り続けたが、結果は戦死という不運な知らせであった。大黒柱を失い悲しみに暮れる母に何一つ優しい言葉もかけられず、孝行らしい事も出来ずに過ぎた少年時代であった。

戦争という渦に巻き込まれ、家族をこわされた苦しみは忘れることはできない。お世話になった人達に感謝し、只々、戦争のない平和な世の中であるように願うばかりだ。

戦争の頃の思い出

松田としゑ 七十四歳・岡出

戦後六十年たちましたが、当時私は浜郷村一色町で小学校二年生の頃だったと思います。学校で勉強している時は、教室の拡声器で警報の音が聞こえてくると、母が作った防空ずきんをかぶり、すぐに家に帰りました。家にいる時は、警報のサイレンが鳴ると防空壕に入りました。その繰り返しでした。

朝熊山の方から、B二十九の爆撃機が何機となく飛んできては、伊勢市内や神戸製鋼の工場に爆弾を落としていきます。一色町の他の家が焼かれたりもしました。また、艦載機が後ろの方から急降下で飛んできては、市電の鉄橋や蒸気機関車めがけて撃ち込まれ、列車が暫く停車していたことがありました。ほんとうに子供心に怖い思いを体験しました。

兵隊さんが戦地へ発っていかれる時は、武運長久を祈って白い布に赤い糸で玉を作り、千

人針を結びました。そして、日の丸の小旗を振ってお見送りをしました。その頃は、お米などの主食になる食べ物や衣類もなく、みな配給でした。履物はワラの草履ばかり。毎日毎日、麦の入った雑炊にサツマイモを食べていました。私はその時、栄養失調にもなりました。今までよく生きてこられた事かと思えます。

それだけに、二度と戦争はしてほしくありません。今の時代は食物でも衣類でも豊富にあり、幸せな生活が続いています。この平和な世の中が、いつまでも続きますよう祈ります。

平和な村

松 田 松次郎 八十九歳・岡出

ミャンマー（旧ビルマ）のマングレーの決戦に参加したが、激戦の末敗れ、暗黒の死の町に響く砲声を聞きながらそこを後にした。

弊衣破帽・食糧なし。弾薬もなく三々五々ジャングル内を後退する私達は、只大陸を彷徨する夢遊病者に過ぎない有様であった。

漸く見つけた小部落、そこには従来同様に現地の村人達の笑顔が見られ、憔悴し切った私達に早速温かい食糧を提供してくれた。

何の猜疑心もなく一緒にコーヒーを飲み、時には祭や祝い事に招いてくれて、踊りの輪の中に入れてくれた民衆との過去の出会いが思い出される。

そのような満ち足りた平和な日々を送っていた村が、突如戦争という予想だになかった

事態に巻き込まれた。他国人同士で戦いが始まり、罪のない現地の人々の家を焼き土地を荒らして、生活を脅かすのみか生命をも危険に晒す結果を招いた。これまで、私達に協力し親善を温めた住民には、筆舌に尽くし難い罪科を犯したことになる、戦争だからと簡単には言い難い事実である。

部落を捨てて避難した後も残って、私達に協力し乍ら敗れ去った日本軍を今も快く迎えてくれるとは、何とやさしい民族だろうか。

補給なしで戦いたくさんの犠牲者を出した日本軍と十分な補給で戦った英国軍の戦場コヒマ・インパール。結果的には日本軍降伏から三年後、大英帝国もビルマを手放した。

特にイギリス軍の為に戦ったインド兵やビルマ兵は現在イギリスに対しどの様に考えているだろうか。大英帝国の存在もなくなり、大英帝国を守るといふ大義名分の為に犠牲になった人々の死さえ無駄なものになってしまった。

間違った場所で、間違った時期に行われた、間違った戦争が、此のビルマ戦ではなかったか。

今になって思えば一体何の意味があったのか。一九九五年八月十五日、英国BBCで放送された番組でもNHKスタジオで語ったが、夫々の国の従軍兵士は皆同一意見であった。

空しい戦争そのものを否定し、冒頭に記したように貧しくとも満ち足りた過去の平和をその儘に続けたいと思う。



亀甲墓の前で米兵にねらい撃ちにされたしまった日本兵（伊勢の空襲展より）

弟の戦死

村田 まさ 八十五歳・岡出

B二十九爆撃機の音と共にサイレンが鳴りわたると、電気を消して庭の片隅に作った防空穴に家内中が入って、イモダンゴを食べた夜の事が思い出されます。

今日もまた、召集令状が来て出征された人を、みんなで駅まで見送りました。女、子供、老人達は、力を合わせて牛やリヤカーで農事に精を出しました。食事といえば麦ごはんはんにイモやダンゴの汁。玉子など一つも食べた事はありませんでした。学校の子供達も出征に行つた家の桑もぎを手伝いました。町の人も食べる物がなく、遠く志摩から魚を持って畑までイモを買いに来ました。くずイモまで大勢で拾いに来ました。忙しい中でも、今日は国防婦人会の集会といつては、小学校の庭で鉢巻にモンペ姿でエーヤーと竹槍の稽古もしました。

そんなある日、私の弟も四人の友達と大勢の人に見送られ、万歳の声とともに日の丸の旗をふりかざし城山の彼方へと消えていきました。人知れず駅の片隅で涙をふきました。ようやく終戦となり弟は何時帰ってくるかと待っていました。ところが見知らぬ松阪の人が弟の遺骨を持ってきてくれました。中には弟の財布と軍隊の手帳が入っていました。仏前に置いて家族は皆涙しました。力を落としたのか元気だった父も亡くなり、弟も海軍病院で不思議にも二人同じ日に亡くなりました。続いて母までが亡くなり、親子三人の死に直面しこの世にない不幸の絶望でした。

軍隊から帰ってきた叔父達が毎日毎日仕事に来てくれましたので助けられました。姉妹達も今はそれぞれ近くに嫁ぎみんな幸せに暮らしています。

過去、現在、こんなにも違うものでしょうか。お買い物と言っては魚や肉の袋を提げて買物が出るこの幸せは誰のお蔭でしょうか。今は亡き戦死者のおかげであることを忘れてはいけないと思います。今年には姉妹揃って靖国神社へも参拝してきました。

毎日毎日を感謝して暮らしましょう。

世の中安穏なれ

村主 一水 八十歳・富岡

戦後六十年がたった。私は八十歳を迎え、「戦争を知らない子供たち」の歌がはやったのも、つい昨日のようだ。広島・長崎への原爆投下で戦争は終わった。当時、私は名古屋の工場の寮で終戦の玉音放送を聞いた。ホッとした気持ちだったが、胸の奥には深い悲しみ、苦しみで一杯だった。

戦争が激しくなり、やがて日本本土への空襲が始まった。私は大学に入学したものの勉強より工場で働き、このことで、学徒動員令が出され、全国の学生・生徒は勤労学徒として工場で働くことになった。私は、名古屋の大同製鋼所で働くことになった。工場での仕事は初めてのこととて、もの珍しさもあり懸命に働いた。しかし、名古屋は、連日の空襲で、工場は破壊され、市内は無惨な焼け野原と化してゆく。私達の足となった市内電車は完全に止ま

り、仕方なく徒歩で通勤。寮は今の中村区、工場は熱田神宮の側にあり、往復に可成りの時間を要した。

ある日、朝工場へ行く途中名古屋城を左に見ながら歩いていったが、帰りにはその日の空襲で天守閣が消えていた。皆口をそろえて叫んだ。

「シャチホコがなくなっている」

と。町のあちこちに広がる人々の死骸。防空壕をのぞくと沢山の人が死んでいる。気の毒とか可哀想だと思ふ気持ちはあるものの、そっと見過ごしていくしかなかった。明日は我が身かと思ふ気持ちであった。私の工場でも沢山の犠牲者が出た。何十人かの人を一室に集め、その夜私達はお通夜をしたのも印象的だった。私自身寮の近くまで火災が広がり町の人泣きながら逃げまどう。単身者の私達は消火作業にあたったが、いつか火の海に囲まれ、その中に焼夷爆弾が落ち、その勢いに飛ばされそうになった。火の海の中を必死で逃げ帰ったのはつきりと覚えている。

戦後の今、こんな体験をした人は少なくなってきた。戦争は二度としてはならない。

敵機の銃撃

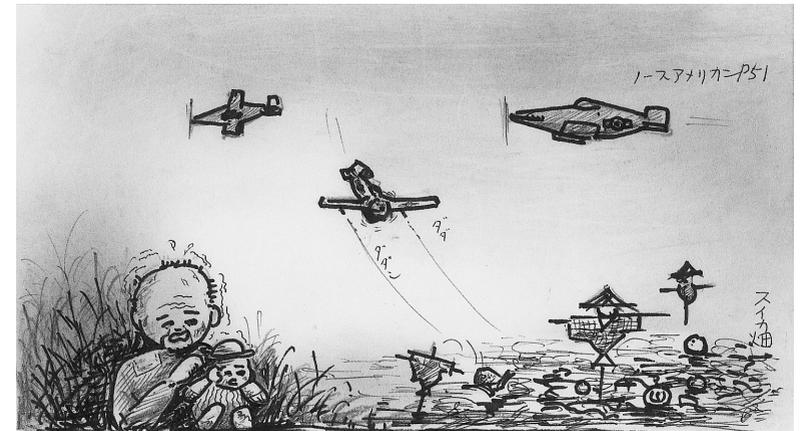
中川源吉 七十三歳・富岡

時は一九四一年十二月八日、日本はハワイの真珠湾を先制攻撃しました。それから、わずか四年たったの話です。

一九四五年の夏でした。私の家からおよそ三百メートルぐらい離れた所に、西瓜畑がありました。畑には西瓜を喰いに来るカラスの脅しとして可愛い案山子が三本立っていました。その畑へ西瓜をヂイちゃんと二人で取りに行く途中です。空からゴォーゴォと大きな爆音と共にバリーバリーパンパン…と、敵の戦闘機が低空で畑の案

山子めがけて撃ってきました。私はおヂイちゃんに泣きながら抱きつきました。そして急いで近くの溝へかくれたので助かりました。

その時です。東の方向に炎が上がりました。エライコッチャ。びっくりして家に帰り、火災の方へ走りました。隣村の部落が一軒燃えているのです。消防の人達が沢山来て、懸命に消火にあたっていました。すると大きな声で子供は、子供がおらん…どうしたアと叫ぶ人や泣きじやくる女の人もいました。みんな呆然と心配そうに見ていました。この家は上地でカヤ葺きの大きな家で、おバアさんと子供二人が家において親たちは畑仕事に行っていたのです。その時、空襲警報が発令されたので子供達を防空壕へ入れて、家に戻る途中、おバアちゃんを敵機が見つけ、銃撃してきたのです。弾が当たって家を全焼しましたが、家族は無事だったとのことです。



戦争の体験

見 並 信 一 八十二歳・富岡

昭和十三年、五年制の中学に入学して、昭和十八年三月に卒業する予定でしたが、戦局が激しかったので、昭和十七年十二月に繰り上げ卒業をして、当時軍需工場に現員徴用ということでした。

名古屋市東区に三菱重工業が、航空機の発動機を製作していました。従業員は三万五千人位で現在のナゴヤドームのある所です。会社敷地も広く工場内の移動に車内バスが運行されていました。居住は菱風寮という会社の寮に入り毎日増産に励みました。昭和十七年一月五日に入社して、最初は、タガネ、ヤスリの基本的な使い方を教わり、一定の講習を経て、私は労務課に配属になりました。

昭和十九年十二月十三日、名古屋初の空襲がありました。当時B二十九により一機二機の空襲は度々ありました。食糧事情の厳しい中、昼食を終えた一時過ぎB二十九の編隊が来ました。最初は何とも思わず安心していましたが、今日は様子が違うようです。工場の東の方から爆弾の破裂音がして、段々と私のいる方へ近づいてきました。私は消火班に属していたので、中庭にある防空壕に入って、敵の行くのを待っていました。防空壕にプスプスという物の落下音がして、私達の退避している壕の近くに一トン爆弾が投下され、その振動によって防空壕の土がザアザアと落ちてきて、全く生きた心地がしませんでした。敵機が去った後、防空壕から出て、負傷者の救出搬送に従事しました。やがて夜になり、工員食堂の一階に搬送した人の中から、負傷者を別の所へ搬送して、電気のない暗い部屋の中で従事しました。その後、工場の整理、機械工具の引っ越しの事がありました。私は入営のため会社を休職しました。この一回の空襲で、十五、六歳の動員学徒が、四百人程死亡しました。

当時は、一機でも多く早く航空機を戦線に送りたいので、空襲があっても各人の職場から離れる事なく、工場内の防空壕に入って敵機の去っていくのを待つて増産に励んだのです。

前途有望の若人が、国家国民の為に死んでいった事は悔やまれてなりません。

この様な悲惨な事が、二度と繰り返されないように、平和国家の建設に努力する事を誓いたいと思います。

七歳の思い出

八木勝美 六十九歳・富岡

昭和十九年十一月のことでした。ある日の午後、明野航空隊の航空機二機が青空のもと、私の家の上空で急上昇や急降下をしながら、空中戦の練習を繰り返していました。

ガチャンという大きな音がしたので見上げると、二機が空中で衝突をしたようです。一機は片方の翼がちぎれクルクルと回りながら落ちてきました。もう一機は宮川の方こうへ落ちたようです。家から百メートル位離れた畑に落ちたので、近辺の人達が大勢集まってきました。飛行機の中を覗くと、航空兵が口や鼻から血を流してぐったりとしています。助けようと誰かが戸板を持ってきて近くの家運び入れました。暫くして陸軍の車が来て乗せていかれましたがその後兵士は亡くなったと聞きました。

物が不足したこの時代、人の命が最も尊いのに、国としては二機の飛行機の損害の方が大きいと思う風潮がありました。なんと悲惨な事でしょう。人の命を無惨にする戦争は二度と起こしてはなりません。遺族の一人としてそのことを強く伝えていかねばならないと思います。

悲しい思い出

山口 綾子 七十四歳・昼田

昭和十八年の秋父は出征しました。私は三年生、妹二年生弟六歳の時でした。心配の余りやつれた母の顔が今でも目に浮かびます。機械のない時代、母は農地を守つての重労働。家が坂の上にあるので米・麦・芋をリヤカーに乗せて運ぶ時、後押しを手伝いましたが、息せききつて大変でした。

戦時中は大阪からでも主食にするさつま芋を買い出しに来ました。いつも母は、御先祖様のお蔭で土地があるから食べ物には不自由させないと言って、私達を慰めてくれました。だんだん戦争も激しくなり空襲警報のサイレンが鳴ると、勉強中でもすぐ家に帰りました。家の手伝いや小社の養蚕家の桑の皮むきもしました。田丸の実業女学校の人達も家に手伝いに来てくれました。

一番恐ろしかったのは、伊勢へ焼夷弾が落ちた時です。どこの家でも男の人が残つて仏様のお守りをしておりましたが、私達三人は母を残して山へ逃げました。その時、伊勢の空が真っ赤に焼けるのを見て母子バラバラになるのではと大変悲しい思いでした。父はいつも私を女学校へやってあげると言っていました。戦死のためあきらめました。

母は五十三歳弟は四十九歳で亡くなりました。遺族年金も最初だけもらっただけで、三人に時計を買ってくれたことは嬉しかったですが、お金も何も要らない母の命がほしいと思いました。戦時中は共同作業で田植えもしてもらいましたが、気の小さい弟は家に一人いるのがつらいと言って、雨降りでも傘をさして一日中道に立っていたと母が言っていました。朝、起きて包丁が無いと言ったら、こわいから隠したと言った時にはびっくりしました。父の居ない淋しさを心の中にも持っていたのかと思うと可哀想でなりません。子供の頃、山岡で二軒だけ、母子を残してなぜ父が兵隊に行かなければならなかったのかと思つたものです。尊い命を失つた遺族の悲しみは、一生忘れません。

少子化時代の皆様、憲法第九条を守りいつまでも平和な日本でありますようにお願いします。

焼きついた記憶

山本 勇 七十一歳・昼田

(一) 父の遺骨

昭和十九年六月、私がまだ小学校二年生の時でした。第二次世界大戦（太平洋戦争）の最中、父に召集令状の赤紙が来ました。父母と祖父母が深刻な顔をして、話しあっている姿を目にしました。農家の六月は麦刈りに夏野菜に、田植えの用意と猫の手も借りたいぐらい忙しい時期です。麦刈りを組の人や親戚の人達に手伝ってもらい収穫を終えました。父が脱穀機を動かしている姿を、今でも覚えています。

出征の日、昼田地区の人や親戚の人達が集まってきて、登り旗を作り、旗を先頭に行列をつくって、家から粟野、富岡、上地、新田町の畑道を通って、国鉄田丸駅につきました。

「勝ってくるぞと出征万歳万歳」

と歓呼の声で送り、父は列車に乗っていきました。私や妹三人の内二人は、おおぜいの人達が、集まってわいわい、がやがやしているの、嬉しくて、はしゃいでいました。一年後、昭和二十年八月十五日戦争は終わりました。

母や祖父母は、父の帰還が今日か明日かと待っている日々が続きました。秋もすぎ冬の季節となったある日、戦死の報が入ってきました。玄関の所で母と祖父母が手紙をみて泣きくずれている姿に、何が起きたのかと不安な思いをしました。何日かが経ち、祖父の弟の小父さんに連れられて、遺骨をもらい受けに田丸駅から汽車に乗って津まで行きました。多分県庁か護国神社か定かではないのですが、白い布でつつんだ骨箱をもらいました。津駅へむかう道中、首から吊した骨箱を何とはなしに左右にゆすりました。箱の中でカタコトと音がし小石のようなものが入っていました。私は小父さんに

「小父やん石が入っているで」

と言いました。戦地の遺骨収集も出来ない時、小石でも入れて戦死の報としたものと思われず。

戦後四十年頃父の戦死は沖縄の真栄平であることが分かりました。毎年二月の第二日曜日

に沖縄では遺骨収集が行われています。出来るかぎり参加したいと思っています。

(二) 空襲の記憶

それは昭和二十年、私が小学三年生の夏のことです。北の夜空が真っ赤に染まっています。それはアメリカの爆撃機B二十九が私達の身近な街津・松阪方面に空襲をかけてきたのでした。

次は伊勢の街の番です。爆音が近づいてきたかと思うと、花火をまき散らしたかのように伊勢の空が真っ赤に染まりました。それは照明の為の焼夷弾で、家々が次々に焼け、その上に爆弾の追いつちです。伊勢の街は一面焼け野原となり、人々は宮川や五十鈴川に逃げたり、郊外へと逃げまどいました。翌日、上級生につれられて伊勢の街を見に行きました。途中の畑や河原には焼夷弾の殻や電波妨害のための錫が無数に落ちていました。度会橋を渡りきった東詰め橋の袂にある一本の桜の木を覗いたとき、私は愕然として足が震えました。若いお母さんが生まれて間もない赤ちゃんを背負ったまま死んでいるのです。よく見ると、

母親と赤ちゃんの顔がないのです。桜の木を見上げたら枝には黒髪がまきつき、幹には砕けた頭部がへばりついていて、その無惨な姿に立ちすくんでしまいました。市内は焼け野原となつて見る影もありませんでしたが、それよりも母子の悲惨な光景は今もくつきりと私の脳裏をはなれません。

戦争とは、醜い行為で百害あつて一利もありません。六十二年も続いた戦争のない平和な社会を、いつまでも守り続けていくことが私達に課せられた大きな使命であると強く思います。

父の眠るビルマへ

角 谷 泰 六十四歳・中角

「私にはお父さんがいない」と悟ったのはいくつの時だったろうか。母が冠婚葬祭や出合寄合に一家の代表として勤めながら生計を守るため必死で働いている姿を子供ながらに眺めていました。少しでも手助けをしなくてはと小学校四年生から牛を使うことを習っていました。中学校になった頃、近所の人から

「泰も牛を使えるようになったから」

と麦畑の中耕や田の荒耕^{あき}し、代かきなどを頼まれました。仕事上で援助をいただきその代金を校内貯金をして友達に追いついて楽しんだことがつい先程のように思えます。

昭和四十五年に結婚して、よき妻と三人の子供に恵まれ、私が悟った頃の思いとダブルラせて、念願の父の眠るビルマへ戦跡巡拝に出かけました。三月の日本は寒さの厳しい時、ビル

マはさすがに乾期の真夏日でした。インドのインパールとの境にあるアラカン山系を五百キロ向こうに眺めながらの参拝です。

「今回の巡拝ではここがいちばん亡くなった地に近いところです」

と言われ

「お父さん、お父さあん」

と涙ながらに叫び

「こんな離れたところでさみしかったでしょう私といっしょに帰りましょう。母がふるさとが待っています」

とみ霊を抱いて帰ることができました。感動した汗と涙の巡拝でした。

昭和五十六年のビルマは、日本の戦後間もない国土のようだった気がします。しかし仏教国のビルマ国民は、当時やさしく日本兵をもてなしてくれたと伺い、ほつゝとしています。

私の子供達に孫が授かった今、両親が揃っていない思いをさせたくない、まして国の事情であつても戦争の犠牲はあつてはならないことを念じます。

戦争とはなにか

それは敵対視する国が潰し合うことにほかならない。そして罪を償わない殺人行為である。上官の命令で必死に国を守ろうとする兵士、それも国からの召集によって若人がそこに集つての戦い。

召集された兵士は一家の将来を担うべき立場の人達、そんな中心をとられた遺族は家庭の駆動軸を失った。そして祖国のために必死で戦い倒れたまま帰らざる人となった。

残された遺族はその歯車をなんとか動かさなければ生活がなりたたない。「死は苦よりも楽」とは、死んだ兵士よりも残された遺族のほうが何倍かの苦勞を強いられた。平穩な家庭と戦没者の家庭はあまりにも平等差が激しすぎた。

従軍追想

中西 勘 六 八十八歳・中角

昭和十七年七月十五日、私は青春に終わりを告げ、国家の干城の一員となった。

徴兵検査で、第二乙種に格付けされたのでまさかと思っていたが、戦局の拡大進展は国民皆兵へと進み、私にも突然赤紙（召集令状のこと）が到来。中部第四十部隊（野砲兵第五十三連隊）に入隊することとなった。

七、八月の盛夏を中心とする五か月間の厳しく苛酷な訓練を経て、十二月中支派遣軍に転属、中国戦場に出征した。

当時中国は日本軍の占領下にあつて、安全な戦場であると報道されており、私も又そうだと信じていたが、占領とは名ばかりで一步部隊から離れると敵地であると知る実情であつた。任地は安慶で、揚子江沿岸地域の警備の傍ら戦闘教育をうけ、装備の充実を図り昭和十九

年早々武昌へ移駐作戦兵団に編制された。三月から終戦迄の間湘桂作戦、宝慶作戦、湘西作戦と武昌出征以来珠州↓長沙↓衡陽↓宝慶↓山門↓洞口と凡そ二千キロに及ぶ戦線を言語に絶する激戦苦闘を重ねて踏破した。

特に、湘桂作戦では敵軍の重要拠点都市である衡陽の攻略に約一か月に及ぶ激戦が続けられ、多くの戦友を失ったが、無条件降伏で我が軍の勝利となった。又、湘西作戦は中国の奥深く敵軍の最前線であり、峻険なる雪峰山脈の山岳戦で数倍の新鋭敵軍との激戦であった。加えて我が軍の戦略物資の補給が困難となり、弾丸尽き矢折れの悪戦苦闘、継続困難となり止むなく作戦中止となった。

当時、戦友の間で流行った愛唱歌である。

一草一木いたわり進む

兵の心の豊かさよ

みよあの山もあの川も

まるで故郷だそっくりだ

さすが男の胸をつく

私の戦争体験

内山裕敏 七十歳・山岡

私は昭和十九年四月に下外城田小学校(当時は下外城田国民学校初等科)に入学しました。十六年十二月(三歳)に日本が米国と英国と戦争を始めたことを親から聞いた、かすかな記憶が残っていました。日本は必ず勝つ、負けるはずがない、今まで負けたことがないと教えられてきました。学校生活で戦争が近づいてきたと感じたのは昭和二十年になってから、先生が、これから、敵が攻めてくるから負けないように心しておけと言われました。

最初に戦争を体験したのは、明野の飛行場に敵の爆弾が投下され、すごい爆発音を耳にした時でした。その後、神戸製鋼(今の神鋼電機)にも落ちた噂を聞きました。学校の運動場が開墾され、さつま芋畑になり、獲れた芋を兵隊さんに送るのだと誰もが思いました。山では松の木から缶詰の空き缶に松脂を採って、飛行機の燃料にするのだと聞かされました。また、

学校では下外城田の木工さんが、学校の天井を剥がし、実物大の模型の戦闘機を作り、まだ、日本には飛行機が沢山あるぞと米軍に誇示したかったのでしょうか。

七月には山田（今の伊勢市）に焼夷弾が夜間に投下され、火の海となり沢山の人が焼け出されました。自宅から見ていると、火花のように明るかったです。綺麗と思う前に、いつ下外城田にも落ちるかと不安で、みんな、わんだ（汁谷川上流）へ避難しました。竹槍で敵の落下傘兵士を下から突き刺す訓練をしたり、バケツリレーで消火訓練を授業にとりいれていました。それからまもなく、学校や役場（今の農協）の東に相当の数の兵隊さんが進駐してきました。老人や女、子供は兵隊さんが敵から守ってくれると安心しました。山岡の松田寛さんに召集令状がきて山岡の入り口に日章旗と海軍旗が掲げられ、山岡から宮さん（神社）まで見送りに行きました。

松田さんは北満に送られ、終戦でソ連軍に拘束され、シベリアへ抑留され、大変なご苦労をなされ、昭和二十五年に奇跡的に生還されました。

夏休みにはいり、岩出のフケでかいどりをしていた時、空襲警報が鳴り、あわてて、稲場の林へ逃げ込んだ後、激しい機銃掃射が自分のすぐ近くの所に撃ってきました。高度二十メートル上空で敵の操縦士の顔がはっきり見えました。

敵の艦載機（P-51）の大編隊が東の空から押し寄せ、昼田や田丸に雨あられのごとく機関銃の弾を撃ち込んできました。

山岡にも沢山の疎開者がきました。私の叔父さん一家も大阪から疎開してきました。八月十五日、お盆の墓参りをしている時、叔父さんから、日本が負けた事を聞かされ、本家のラジオで天皇陛下の玉音放送を聞き、まさか日本が負けるとは思いませんでした。しかし、これから空襲がないと嬉しく思いました。

三百万人以上の人が戦争の犠牲になり、命と領土を失い何の戦争であったのでしょうか。先人達の尊い命の代償が今の日本の繁栄に繋がっていると思います。

相手を思いやる心、譲り合う心、これが世界から戦争を無くすことだと、大人も認識して、子供に教えていかなければならないと思います。

愚かな戦争を二度と起こさないために…

戦争は悲劇

松田 一良 八十一歳・山岡

昭和十二年七月七日、現在の中華人民共和国、当時は支那といって教えられていたと記憶している。盧溝橋という所で一発の銃声をもとで戦争が起きた。軍事統制が布かれ、生活をはじめあらゆるものがきびしくなっていた。戦地からは戦死者や戦病死が出るといふ悲しい出来事も起きてきた。時期あまり定かではないが、宮古の福本種吉さんという人が度会郡で一番最初に戦死されたことを約七十年すぎた今でも忘れることはできない。村葬式が小学校校庭で行われた。陸軍大佐くらいの人が騎乗して参列していた。其の時花輪というものを初めて見た。戦争で人が死んだ現実に当時十歳程だった目に涙が浮かんだのを覚えている。

昭和十六年三月、十五歳で現在の鳥羽市の会社に入ったが、事務所の人は年輩の方ばかり。現場の人にも、次々と召集令状がきて、久居の歩兵第三十三連隊に入隊されていた記憶が

ある。昭和十六年大東亜戦争に突入し、中国大陸から遙か南太平洋まで陸、海、空一大総力戦となった。十八年頃になると米国の攻撃態勢が整い、海上封鎖され物資が欠乏、すべての状況がわるい方向に進んでいった。

大本営の戦況発表は、今の何処かの国の如く国民を欺き虚偽のニュースをラジオで流しつづけた。B二十九の空襲は勿論のこと、艦載機グラマンに因る機銃掃射攻撃は頻繁にあり、田舎道を女の人が一人歩いてた時攻撃をされたこともあった。参宮線でも列車が攻撃された。鳥羽の中之郷海岸には海軍が居たが、駆逐艦が艦載機の攻撃を受けると応戦になり、機関砲が撃ちあう轟音の凄さに身も心も縮んだことがあった。鳥羽の日和山には海軍が掘った防空壕が二ヶ所あった。人の話に一トン爆弾でも大丈夫だときいていたが、其の壕に入る前に飛行機が来ると物陰に身を潜めていたことを六十年余りたった今でも忘れない。

捕虜となつて

松田 寛 八十三歳・山岡

私は、昭和十九年末か二十年初冬の二十歳になった頃、鉄道兵として旧満州ポタンコウへ渡った。鉄道第四連隊に入隊して朝鮮で働いていた。そのうち衛生兵の募集があり志願した。朝鮮から満州に戻り衛生兵として教育を受け、もう少しで元隊に帰って病院で働くことになっていた。が、満州にいる時に敗戦になってしまった。敗戦がもう少し遅かったら―。朝鮮に戻っていたなら―。敗戦と同時に日本に帰れたのと思った。

捕虜としてシベリヤへ連れていかれることになった。バイカル湖の西側のハラゴンという地で、カラ松の伐採作業で一日に四平方メートル伐採するノルマが課せられた。マイナス二十度があたたかい方で、食べ物は一日に黒パン二百五十グラムとスープ。毎日がそれだった。一日の仕事にノルマが与えられ、それが出来ないし食事も減らされたりもした。丁度私は、

一緒に仕事をする人がよく仕事のできる人で、大事にしてくれたのでずいぶん助けてもらった。要領のよい人は得をする。特に共産党に染まれる人や作業の能率の上がる人だ。又気晴らしにカラ松の葉でタバコを作って吸った。

一年位こんな生活をして、復員が始まった。ハラゴンからハバロフスクと移された。ハバロフスクでは熱がでて入院した事もあったが、病院に入ると、どこへ連れていかれるかわからないので、辛抱して働いたこともあった。ハバロフスクからナホトカには予定より一週間早く着いた。がその一週間分の食料をシベリア兵が持って逃げた事があった。それに抗議したので又、収容所に入れられてしまった。共産党教育になじめないとか、この問題は国際法違反であると抗議した。だまっていればもう少し早く帰れたかも知れない。ナホトカで一年位すごしたと思う。ナホトカ港から舞鶴港へ。やっと帰れた。二十三歳だった。

家に帰ってびっくりした。戦死の公報が入っていた。本人の知らないうちに死んでいた事で酒びたりにもなった。

戦中、戦後をかえりみて

松山 勇 八十歳・山岡

戦中、私も学校を卒業し、一社会人として当時の国策に沿い、一生懸命に、社会や人の為にと努力してまいりました。

忘れもしない、昭和二十年七月二十八日東海地区に警戒警報が発令され、爆撃機B二十九の空襲のサイレンが鳴り響き、家の外に出てびっくりしました。西の夜空が真っ赤に染まり、宇治山田上空を北上して津市に焼夷弾攻撃を開始したのでした。その攻撃が終わろうとした翌二十九日、志摩半島南方洋上に敵機が現れ、午前一時頃宇治山田駅前より西方にかけて油脂焼夷弾を多数投下し、引き続き別の敵機が市内中央部及びその周辺に焼夷弾を投下しました。敵機は約一時間位で攻撃を終わり、潮岬方面から全機洋上に去りました。

その焼夷弾攻撃によって、市内は中央部から以西の人家が密集している地域や、商店街が

大火で燃えあがり、その焰は天を圧する勢いでありました。一瞬にして焼け野原となり、何の罪もない人々が、家を焼かれ、命を奪われる理不尽さ。夜が明け、伊勢の街を見に行きました。途中、爆撃の恐ろしさに目を疑いました。あちら、こちらに生々しい焼夷弾のきず跡、戦争というむごたらしさを心に強く刻み込まれました。

昭和二十年八月、多くの人の犠牲の上に立ち、終戦を迎え、戦後の復興に、国民ひとりひとりが寝食を忘れ、終戦直後は、あらゆる食糧、物資の不足にも何一つ不平も言わず、ただ、ひたすら、郷土復興のため建設に邁進しました。

戦後六十有余年を経て、衣食住何も不安のない今日の平和な社会を築きました。

戦争という悲劇は、未来永劫忘れてはならないと共に、平和を守り続けていくことこそが、すべての人に伝えていかなければならないと思います。

東京空襲のこと

井上 亨 八十二歳・小社

私は太平洋戦争当時、東京都の武蔵野にある中島飛行機で働いていました。工場は海軍の主力戦闘機である零戦のエンジンを作っていました。

戦争が段々熾烈の度を加え、ゴム、サイパンそして沖縄まで米軍に占領され、これらの島を基地として飛び立ったB二十九爆撃機による空爆が開始され、私の工場が本土で最初の標的となりました。当時日本の制空権は殆ど奪われ、銀色にピカピカと輝いたB二十九が低空で襲ってきましたが、弾倉が開き、爆弾が落ちてくるのが見えたものです。

私は事務所の警備を命ぜられ他の課員は外の防空壕に避難しました。

爆弾の音がドスンと近くになり又遠のいて本当に無気味なものでした。その都度柱のかげや机の下にもぐり込み逃げ回りました。一方防空壕の人々は、爆弾が近くに落ちて防

空壕が押しつぶされ、全員が生き埋めとなり、三人の方が亡くなりました。救出作業が大変だったそうで仲間を失った悲しみは今でも忘れる事はできません。又同室の友が夜になっても帰らず、八方手を尽くして探し回りましたが病院に入院している事がわかり、見舞いに行きました。顔一面包帯に包まれ目と口だけが見えました。唇が大きく紫色にはれ上がり、目をおおいたくなるような状況で、名札により本人である事を確認しました。地下道に避難して、ものすごい火のかたまりが走りすぎ、何がなんだか解らない一瞬の出来事だったようです。部屋の警備の私が無事で防空壕地下道に避難した方が事故にあうという明暗のわかれた結果に驚いています。

他の日の爆撃では工場外に避難しました。爆弾の気配に地面に伏すと物凄い音と共に土砂が舞い上がりあたりは夕方のようにうす暗くなり、頭を上げて見ますと、地面が上下にはげしく波を打ち、物凄い光景でした。一トン爆弾が落ちたとの事でした。

又、艦載機に襲われ、急降下に気づきやっと一階の階段の壁にはりつきました。二階の壁に爆弾が当たり物凄い土砂が降り注ぎ、あたりは真っ暗になり、もう駄目かと覚悟したものです。やっこの思いで建物を飛び出し、必死に木の下をにげました。みんな真っ黒な顔になっていました。

其の後も爆撃は昼夜を問わず行われ、今度は住宅街に無差別に焼夷弾が投下され、夜の空を真っ黒にこがし東京の街が一夜にして瓦礫の山と化しました。

もしこの戦争で敵が本土に上陸し地上戦になった場合、もつともつと大きな被害が出た事を思うと身の毛がよだつ思いがします。このように人と人が殺し合う殺伐な戦争は二度と起こしてはなりません。戦争のない平和な世界がいつまでも続くよう願うものであります。

思い出

奥藤義治 八十一歳・小社

昭和十二年、支那事変が勃発すると世の中が急にさわがしくなり、若い男子が多く兵隊に召集されました。私達の村からも何人かの人が召集されました。出征の日、区民が氏神に集まり、区長さんの挨拶。婦人会の人は白いエプロンに肩から国防婦人会と書いたタスキをかけ、男の人は中折帽子に着物、それに国防色の服に戦闘帽。神主のおはらいを受けて出発。区長さんが先頭で出征軍人奥藤坂之助君と書いた幟旗を持った人と出征軍人その後には区民の人達が手に手に日の丸の小旗をにぎり駅まで歩いた。駅に着くと兵隊さんが見送りの人にお礼の挨拶。

「お国に召されたからには、国家の干城の一員として軍務に励み頑張って参ります」と挨拶をして駅の中に入りました。区民も後に続きます。プラットホームは他村の人も来

ていて、満員です。汽車が着くと兵隊さんののりこみ車窓から身をのり出して帽子を振りました。汽車がすべり出すと見送りの人も日の丸の小旗を振りながら、万歳万歳と歓呼の声や旗の波。幼子を背に小さな子供の手をにぎり、見送る女性やホームの陰から手を振る人。汽車はだんだん家族の人を振り切り切るように遠く小さく消えていきました。

小学生も五、六年になると戦死された家や出征軍人の家に勤労奉仕に行きました。その頃は養蚕が盛んで、繭もぎとか蚕の桑もぎとかを手伝いました。その頃絹の織物は飛行機から降りる落下傘を作る原料で、なくてはならぬものでした。又桑の木の皮も繊維をとる原料となり、衣類に多く使われました。戦争が大きくなってくると、食糧や衣類が不足し、生活必需品が配給制になりました。米・麦・甘藷の食糧品の供出はだんだんきつくなりました。毎日の食事は代用食で粗末なものばかり。

その頃の野良仕事は重労働で、なにかにつけて手作業のため親達は朝は早く夕方はおそくまで働きました。夜はご飯がすむと母親は子供達の着物、服とかズボンをつくろい、父は縄をなったり草履を作ったりして子供にはかせたものです。学校でも工作に草履作りをしました。新しい服とか靴をはくのは参宮とか遠足の時ぐらいで、子供のオヤツはアラレ・いもだんご・切干いもなど粗末なものばかりでした。その頃男の子は大きくなったら兵隊さんにな

ると希望に胸をふくらましたものでした。一億火の玉だといった時代でした。今思うと想像もつかぬ事ばかりです。



八知国民学校での出征式（三重の戦争遺跡より）

過去を忘れまい

西山 勇 七十五歳・曾根

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争の勃発から苦しみの始まりです。米英という大国を相手に無謀な戦争でありました。

軍部の横暴なのでしょいか、全国民を巻き添えにして、前途ある若者が他国へ侵略をさせられ多大の犠牲を強いられました。

兄も遠いビルマの地、ラングーウンで戦渦に散っていきました。その日は昭和十九年十二月二十一日ということであります。

兄と共に暮らしたことはありません。没落家庭の長男として大阪の商社に勤めていました。記憶の隅にあるのは、兄の出征に際し親戚、縁者が多数集まり見送りをして下さいました。兄の膝の上に座って、不安げな思いをしたことを覚えています。

まさかそれが永遠の別離となろうとは知る由もなく無念でなりません。
時は流れて無情にも白木の箱での帰還となりました。父母の打し萎れた顔が忘れられませ

ん。
惨敗で幕がおりた戦争が今度は、飢餓戦争として追い討ちを掛けます。私の家庭は非農家でありましたから、直撃を受けました。専業農家でも大変にご苦勞な時代であったと思っております。

みんなそれぞれの苦難を乗り越えて今日という日を迎えました。

この飽食の時代、過去を忘れることなく、生きていきたいと思えます。

飽食の時代ありがとう。唯感謝。

耳の奥に残る空襲警報

野口 繁 七十五歳・小社

国民学校三年生の昭和十六年十二月八日。早朝からラジオの戦争開始の放送が一日中続いた。私には何の事かわからなかった。年があげると日本の兵隊に入るよう、赤い紙に印刷された召集令状がたくさんの方に届くようになった。

祝〇〇君と書いた旗、たくさんのおかあさんに赤い糸で撮んでもらった千人針、寄せ書きの日の丸の旗などを持って入隊者が小学校校門の近くで、村長、村の人、小学生で激励会がなされ、式典後田丸駅まで見送りをした。

翌十七年には各地で空襲が始まる。

今の農協の敷地内に役場と農協の合同建物があって屋根に大きなサイレンが設置され、米軍機B二十九が空襲に飛んでくると連続でサイレンが鳴らされた。

昭和十八年、運動場で麦やサツマイモを作る。
昭和十九年、農兵隊約五十名が学校に泊まり、下外城田神社南の松の木を切り、根っ子より松根油を作っておった。田丸栄町地区の松林も同じ隊員達が松を切り、根っ子を運んできて製油し、明野飛行場へ燃料として運んでいた。さらに岩出城も農兵隊や明野農産学校生徒により開墾された。

昭和二十年一月十四日、米軍機B二十九により伊勢神宮や山田市常盤町、錦水橋附近に二百五十キロ弾の投下があり、サイレンは連続して鳴らされ、各家は明かりが外にもれないよう電球に黒いカバーなどをつけていた。都会からは学童疎開者五名、計七十名一教室で勉強、鉄道も不通が増し、楽しみの修学旅行もなく卒業し



12月9日の新聞

た。

昭和二十年四月、伊勢市の山田中学校に入学し田丸駅から汽車通学。運行本数は少なく、客室には乗れない。貨物車が機関車の石炭の上か連結器に乗っての通学であった。

昭和二十年四月二十二日、朝学校につくと空襲のサイレンが鳴りすぐに下校。帰宅の途中、栗野近くに来た時、上地町の上空で発射音がし、その瞬間、P五十一が超低空飛行で私の頭上を飛んでいった。

中須町や昼田の家に連射され民家に弾が当たる音が聞こえた。三機は田丸方向へ飛んでいき、三縁寺の近くで一人犠牲者がでた。伊勢市内も多くの米軍機が飛来し死者や負傷者も沢山でた。神鋼電機山田工場も焼かれた。

昭和二十年四月二十八日、伊勢市大空襲。夕方からサイレンが連続して鳴る。十一時米軍機B二十九が何機となく飛来し、伊勢市の空は火災で一面明るくなる。家族みんなで屋敷に掘った防空壕にかくれる。伊勢市内は油脂焼夷弾での火災であった。翌朝も各地で火災が続いていた。二日後学校に行くため旧度会橋を渡ったが、学校への道は行くことが出来ず悪臭



P51の機関銃の弾

がひどかった。中学校も焼かれてしまった。同年五月、下外城田の小学校に米軍機を迎え撃つために京都より約百人の兵隊が駐屯し、小学生は各自で勉強をした。

校長室は隊長部屋、職員室は下士官の部屋と化し、汁谷川沿いの山の中に高射砲を配備した。明野飛行場との連絡用として馬三頭が農協の東側の山道につながっていた。米軍機ははるか上空を飛んでゆくため高射砲は役にたたなかった。婦人会が兵隊の食事づくり、私の家の土蔵には食糧の大豆粕やコウリヤンを運んできた。

終戦。農家へ伊勢市より多くの人が着物と米など食料品と物々交換に来る姿がよく見かけられた。山田中学校は隣の小学校での間借り。伊勢市の早修、倉田山、明和町の兵舎など転々と移転して、中学校を卒業するのに五つの場所で勉強をした。

語り伝えたいこと

橘 浩文 九十一歳・曾根

私の戦争体験には、「失態」と「許してはならないこと」がある。先ず「失態」から。

一、入浴

昭和十八年の二月、A三十三部隊に入隊した時のこと。古兵から

「お前たちは、すぐ入浴して娑婆の垢を流せ」

と命じられたので、新兵の私たちは入浴した。すると古兵が

「お風呂の加減は如何か」

と聞いたので、

「大変よろしいわ」

と返事した。その途端、古兵が

「お前たち新兵はこの風呂を何と心得ているのか！ この風呂は将校専用の風呂だ。すぐ出ろ」

と激怒され、寒い二月の庭に一時間くらい一列に立たされた。

二、食事

食事当番（二人一組）の時のこと。班（新兵二十人）と班長（軍曹）、補佐役（伍長二人）の計二十三人分の朝食を配膳し、一番に班長と補佐役に飯、味噌汁を配り、残りを新兵に配った。が、その時、味噌汁の底からたくさん貝が出てきた。仕方がないので新兵だけで食べてしまった。それを知った班長が

「お前たちは、貝の味噌汁は貝が底に残るということを知らんのか！ 一列に並べ」

と命令され、我々新兵二十人は直立不動の姿で、往復ビンタをくった上、味噌汁の入っていた金属製の寸胴鍋をかぶせられ、その上から大きな杓文字で数回殴打された。鼓膜が破れたかと思った。

次に「許してはならないこと」に軍隊は地獄であるということ。

一、同班だった友人は喘息気味だった。毎日毎日続く早朝から夕方までの激しい訓練のため夜間になると、もがき苦しみベッドから転げ落ち、喉を掻きむしっていた。しかし、班長は彼を一度も軍医にも診せずほったらかしであった。傍に居る人間として、あれ程辛い思いをしたことはなかった。全く非人間的な世界だ。

二、友人の兄が「反戦思想」があると疑われ、営倉に入れられ、そこで首を吊った。家族は暫く門扉を閉ざし、悲しい辛い日々を強いられた。可哀相で「まるで地獄だ」と思った。戦争は「戦場」だけではなく、日々のくらしの中にもあること忘れてはならない。

悲しいかな戦争は未だに無くならず、世界のそこかしこで起こっている。つまり戦争は過去の遺物ではなく、現在も続いている。だから私たちは、平和を願い祈り、二度と戦争を起こさないように、辛い体験を旨として語り伝えていかなければならない。

遠ざかる記憶

中村 勝 臣 七十二歳・曾根

昭和十六年十二月八日、日本はハワイ真珠湾のアメリカ艦隊を奇襲し太平洋戦争に突入した。この時自分は五歳、既に父は出征していて祖母と母が農業を引き継いでいた。戦局は何となく生活の周辺にも及び、戦争を推し進めるべく心理教育一色に統制され、強い兵隊さんになるんだという意気が養われてきたように思う。報道各社は戦況通信で毎日凱旋を報じ、国民の戦闘心をより奮い立たせる。

あの大国に立ち向かい、こんな勝ち戦がいつまでも続く筈もなく、戦況は悪化の一途を辿り徴兵制度により、尚一層の兵の充足を図るべく毎日村の若者が歓呼の声に送られて出征していった。誰もが意気込むその裏では、

一つには、婦人会で竹槍訓練を始めた。

二つには、竹骨模型飛行機を作った。

三つには、二宮尊徳の立像が取り扱われた。

四つには、食料充足のため運動場を耕し、さつまいもを栽培した。

五つには、軍用品量産のため、戸毎に銅、鉄類の供出を迫られた。

この頃から国民は、不可思議な戦略に敗戦の濃いことを気付き始める。

昭和二十年代に入って本土が頻繁に攻撃を受けるようになり、各戸が防空壕を掘り保身した。B二十九爆撃機の来襲は日々激化、近隣の伊勢市でも大部分が焦土と化した。皆の恐れを尻目に三月十日東京大空襲、八月六日広島、八月九日長崎に原子爆弾が投下された。

この惨状を受けて八月十四日、日本がポツダム宣言を受諾、天皇陛下は終戦を決意ラジオを通じ日本国民に玉音放送を発し、八月十五日第二次世界大戦が終わった。この時自分は九歳で遠ざかる記憶はここで終わる。

一転、戦後の国土復興に目をやれば、すばらしい日本が輝いている。被爆国の影一つさえ感じさせぬ、先進国となった。しかしながら何年経つともあの酷い終戦日は巡りくる。毎年この日に戦没者追悼の催しが、全国各地で行われる事がせめてもの慰みである。

戦争を起こすは人間鬼畜に劣ることなかれ。

宇治山田大空襲の記憶

西川 勝洋 七十一歳・曾根

太平洋戦争も終局に近い昭和二十年、初夏の頃に入ると、毎日のように空襲警報のサイレンが鳴り、防空壕へ逃げ込んだことが多かった。当時私は小学校三年生で、夏休みにはいつた七月の終わり頃には今も忘れることの出来ない宇治山田大空襲があった。夜に入りB二十九の大編隊が侵入してきた。まず津市を爆撃し、夜半に市中心部より焼夷弾による空襲である。私達の頭上で投下される焼夷弾は赤く火花のように宮川の向こうに落下し、東の空は真っ赤である。街は家が次々に焼け、一面の焼け野原となったさまは今でも忘れられない。

私は、その後しばらくして祖父に連れられ古市の親戚に見舞に行ったが、山田駅の建物は焼けプラットホームだけが目についたのを覚えている。

後の話では、街の六十パーセントが焼失し、中でも二俣町にあった度会製糸は三日三晩燃

え続けたという。又、中島町辺りは宮川へ避難する人で混雑し、あまりの熱さに耐え切れず河川敷には人があふれ、川の中に浸って難をさける人も多かつたと聞いた。時の内閣鈴木貫太郎は国民に対し「本土決戦」「一億総玉砕」をスローガンに徹底抗戦を訴えていた。今にして思えば酷い行為で、戦争は二度と起こしてはいけないと思います。今の平和な社会がいつまでも続くことを願います。

参考

宇治山田市への空襲

B二十九 一〇二機

爆撃機 九四機

投下 七三五トン

死者 七五名

負傷者 一一七名

家焼失 四八五九世帯



空襲に遭った伊勢市内の様子
(伊勢の空襲展より)

幼少時代の戦争体験

西山達也 七十三歳・曾根

昭和十六年四月、尋常小学校から国民学校へと改称され、私達昭和九年、十年早生まれの者は初等科一年生として入学しました。この年十二月には太平洋戦争の始まりでした。

戦争の長期化で生活物資も欠乏し日々の暮らしも厳しく、毎日の食事は麦ごはんや雑炊などの代用食でお米のごはんは祭の時ぐらいしか食べませんでした。学校では修身の時間に「教育勅語」や歴代天皇の名前を暗誦するのに懸命でした。時々、校舎の東の方にあつた溜め池の土手に座って草履づくりをしたものです。校舎は兵舎として使われ、低学年の生徒は民家の納屋とか会所で分散授業をしていました。

昭和二十年になると本土空襲が始まり、P五十一艦載機が低空飛行で田舎の方まで襲うようになり、宮川の堤防下にある山林が焼かれたりしたこともありました。

終戦間際の七月二十九日、深夜の宇治山田市が大空襲で市街一面火の海となり、空高く油の燃え盛る炎を見たことは今も強烈な印象として残っています。

被災状況を記述した資料によると、四十数機のB二十九が市の中心部とその周辺に、約一万数千発の焼夷弾を次から次へと投下し、市街地の六十パーセントを焼失しました。公施設では、国鉄山田駅、宇治山田中学、厚生国民学校や度会地方事務所等が焼失しています。焼失家屋四八五九戸、死者七十五名、負傷者百十七名とされています。

無意味で悲惨な戦争は再びくりかえしてはなりません。世の中の安穏を願うものです。

夫の戦死

西山 すすへ 八十八歳・曾根

私の青春時代は、戦時色濃厚な時期でした。

中支事変や満州事変が続き、次兄は、二度までも召集を受け、出兵しました。

二・二六事件で東京に戒厳令が出た後は、段々と軍事色が拡大し、真珠湾攻撃と共に大國アメリカに宣戦布告、大東亜戦争に突入しました。戦場が拡大されると、兵士不足となり、国民兵まで召集されました。私はその時、国民兵の主人と結婚していて、三人の子供がいましました。

長女三歳、次女一歳、長男零歳です。農業経営がやっていけるのか心細く、ましてや大家族の中、一番こまるのは、養蚕や煙草の吊込でありました。でも近所の人達の世話になりながら、無理矢理にも半人前の親として、仕事に打ち込む事しかありませんでした。

悲しいつらいことばかりでした。私の夢は、子供達を高校に行かせたかったのですが、その夢もやぶれ、悲しい思いばかりの日々でした。

昭和二十年八月十五日終戦が報じられ、主人の帰りを待ち続けましたが、ついに戦死の通知を受けました。父の顔を見る事の出来ない子供達を思い、唯々涙するばかりでした。それからの苦しみは、言語につきぬ苦勞が続くばかりでした。

父のこと

池 山 義 則 五十八歳・岩出

私は二十五年生まれなので小学校時代、先生にせがんで国語の時間に戦争の話をしてもらいました。巡洋艦に乗っていた時の話をよく聞いて、かっこいいなと思っていました。

それから戦争について話すこともなく数十年がたち、数年前に父が亡くなった時、まわりの人から、まるでドラマのような話を聞きました。父の話なんですけど全部実話です。

父は実母と別れていたの、出兵する少し前に実母に会いに行きましたが、母親は会ってくれなかったそうです。父は母親に会えない悲しみを胸に出兵し、戦地では泣きながら思いを馳せた夜も何度かあったそうです。

また、戦地では腹ちがいの弟に奇跡的に会って、「どんな事があってもお前は生きて帰れ、死ぬなよ」

と、父は弟に言ったそうです。弟は

「そんな事言つて上官に聞かれたら大変な事になるよ」

と答えると、父は

「俺は古参兵だから誰も文句はいわないよ」

と笑つたそうです。そんな二人の夜は過ぎましたが、弟は戦死し、運良く父は帰り、私達が生まれました。

父から戦争時の事を聞いたことは一度もありませんが、月を見ながら泣いた夜は度々あつたのではなかったかと思えます。行きたいと願つて戦争に行く人はいないでしょう。人の人生を狂わせてしまう戦争は、あつてはいけません。

編集後記

「アア戦争ヤアハレ、兵隊ノ死ヌルヤアハレ、

コラヘキレナイ、サビシサヤ、國ノタメ死ンデシマフヤ、ソノ心ヤ」

竹内浩三の詩です。私はこの詩が大好きです。このたび玉城町遺族会が中心になり、戦後体験記を発刊するにあたり、一言御礼の詞を申し上げます。

大東亜戦争終結後六十三年が経ちました。靖国の妻と呼ばれた人達も八十路半ばを越え、大半の方々が亡くなりました。遺族会婦人部の人達の作文を一つでも多く本の中に残しておきたかったのですが、時間が遅れたため、その貴重な体験が網羅できなかつたのが残念ではありません。遺族会の役員及び各地区理事の方々の絶大なる御協力を得て、ここに百余名の体験文が集まり、「私たちの戦争体験」として、発刊出来ます事は無上の喜びでございます。御協力を賜りました各位に深く感謝申し上げます。

この本が後世の町民に読み継がれ、平和な社会の構築の一助になれば幸であります。

玉城町遺族会会長 山本 勇

編集委員

山本 勇
高木 市郎
伊藤 儀久
大北 幸松
八木 勝美
吉田はつゑ
角谷 さぬ
藤川 さぬ
中西 清
福井 一夫
西野 武

資料提供

伊勢市役所「伊勢の空襲展」
伊勢市役所「ぼくらのことばで平和を語ろう・2」
株式会社つむぎ出版「三重の戦争遺跡」
毎日新聞社

お断り 一部の写真は文章と関係ありませんが、
イメージとして使用させて頂きました。

私たちの戦争体験

発行日 平成二十年十二月二十日
発行者 玉城町遺族会
印刷所 千巻印刷産業株式会社